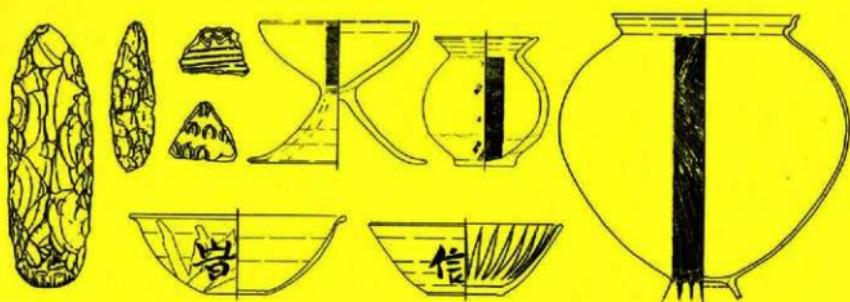




県営圃場整備事業に伴う縄文時代・古墳時代  
及び平安時代の集落遺跡の発掘調査報告書



1994

山梨県明野村教育委員会  
峡北土地改良事務所

かんどり  
**神取**

県営園場整備事業に伴う縄文時代・古墳時代  
及び平安時代の集落遺跡の発掘調査報告書

1994

山梨県明野村教育委員会  
峡北土地改良事務所

## 序

神取遺跡は、平成4年6月より県営圃場整備工事にさきがけて発掘調査されました。この調査報告書には、約6カ月間に及ぶ現地発掘調査の成果がまとめられています。

神取遺跡からは縄文時代草創期の遺物が山梨県で初めてまとまって発見されました。これまで隣接県で草創期の発見が相次ぐなか、本県だけはまだこの時期の発見が希薄であったと聞いております。それだけにこの調査報告書を刊行できたことは明野村の喜びでもあります。この発見を機に、山梨県と周辺地域の縄文時代の始まりがより詳細に研究されることになればと期待しております。

古墳時代前半の集落遺跡の調査例も同様に、山梨県の北西部地域では少ないと聞いております。これらの発掘調査の成果が私たちの遠い祖先の生活を解きあかすことに貢献できることを願ってやみません。

発掘調査にあたっては圃場整備を心待ちにしてこられた地元地権者、耕作者の方々には多大なご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げると共にご協力に深く感謝いたします。また、事業遂行に何かと問題になる埋蔵文化財の扱いについて、常に大きな理解を示し協力してくださった峡北土地改良事務所の担当者の方々、夏の炎天下、発掘作業に参加し調査進行の原動力となっていた方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。

平成6年3月31日

明野村教育委員会教育長 深澤正彦

## 例　　言

- 1 本書は、山梨県北巨摩郡明野村下神取字神取（かんどり）に所在した神取Ⅰ遺跡、神取Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。遺跡は、縄文時代草創期から晩期、古墳時代前期、平安時代、中近世までの遺物、遺構を含む複合遺跡である。
- 2 発掘調査は1992年6月より11月まで現地での発掘調査を行い、1993年4月より1994年3月まで遺物の整理、報告書作成作業を行った。
- 3 発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体	明野村教育委員会 教育長 深澤正彦
調査担当者	明野村教育委員会社会教育係文化財担当 佐野隆
整理調査員	加藤博文（筑波大学歴史・人類学系博士課程）
調査補助員	吉田光男
調査事務局	明野村教育委員会
- 4 本書の執筆・編集は佐野が行った。第3章は加藤の観察所見をもとに佐野がまとめた。遺構・遺物の実測・トレースは佐野、加藤、吉田、阿部、石渡、筒井が行った。本書中の遺構、遺物の写真は佐野が撮影した。石器実測図のうち第8図～第11図23、27、28、41～46、51、53、55、60は保坂康夫氏による。
- 5 発掘調査及び本書作成にあたって次の方々に多くの指導・教示をいただいた。記して感謝したい。(敬称略)  
金田進（長野県岡谷市教育委員会）、加藤勝仁（神奈川県教育庁）、栗島義明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、白石宏之（神奈川県埋蔵文化財センター）、新谷和孝（長野県木曾郡町村会）、渡辺哲也（野尻湖博物館）、今福理恵、小林広和、中山誠二、新津健、保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）、河西学、柳原功一（山梨文化財研究所）、映北土地改良事務所、山梨県教育庁学術文化課
- 6 本書の挿図は以下のとおりに作成した。
  - (1)遺構および遺物の実測図の縮尺は各図中に示した。
  - (2)遺構実測図中の水糸高は海拔高(m)である。
  - (3)住居跡実測図中の網目は焼土散布範囲を示し、実線で囲んだ範囲は、固くしまった床面が検出された範囲を示している。
  - (4)平安時代の遺物実測図のうち土器断面に網がかかるものは須恵器を、断面が空白のものは土師器をそれぞれ示している。また、土器内外面の網目は平安時代の土器については黒色処理してあることを、また古墳時代の土器については赤彩色を施してあることを示している。

(5)添図第6図縄文時代草創期の遺物分布図中の記号は下記のとおりの遺物を示している。

- ▲ 縄文時代草創期の尖頭器および尖頭器断片
- 縄文時代草創期の尖頭器製作にかかわると思われる剥片
- 縄文時代草創期および早期の土器片
- △ 石 錘
- 黒曜石製の石器および使用痕のある剥片
- 上記以外の剥片類、土器片など

(6)表裏に文様のある土器片の拓影は、断面図右に器表面を、断面図左に器裏面を配した。

7 文章中の註は、各章末にまとめた。

8 本道跡の出土品及び諸記録はすべて、明野村教育委員会が保管している。

#### 9 調査参加者（敬称略）

秋山圭子、阿部恵子、石渡節子、今村憲一、大崎喜久江、大柴宏之、長山かたみ、長山貞子、長田文雄、奥水万代、奥水利枝、小林たま代、小林とき子、小林ゆきえ、小松原俊一、小松原千津、清水昭子、清水さゆり、清水すみえ、清水照二、清水美智子、清水みゆき、清水祐至、齋原愛子、新海棠、鈴木晶子、筒井つや子、入戸野きぬよ、入戸野朝夫、入戸野宏、橋本隆廣、深沢よし子、日向浅子、日向勇、日向まさる、平賀あさじ、福山和久、堀内三千子、松山恵美、水森広徳、三井つや子、三井とも子、三塙てつ子、皆川一子、宮川寛、宮沢幸子、守屋真弓

## 本文目次

第1章 遺跡をとりまく環境 .....	1
1 遺跡の地理的環境 .....	1
2 遺跡の歴史的環境 .....	3
第2章 調査にいたる経緯と発掘経過 .....	8
第3章 縄文時代草創期の遺物 .....	10
1 出土石器と土器 .....	10
2 尖頭器製作にかかわる剝片資料 .....	14
3 まとめ .....	16
第4章 縄文時代の遺構と遺物 .....	32
1 縄文時代早期の遺構と遺物 .....	32
2 縄文時代前期～晚期の遺物 .....	35
3 縄文時代の石器類 .....	40
4 まとめ .....	42
第5章 古墳時代の遺構と遺物 .....	49
第6章 平安時代の遺構と遺物 .....	66
第7章 中世～近世の遺構と遺物 .....	86
第8章 時期不明の遺構 .....	90
第9章 まとめ .....	96
付編 神取I遺跡のテフラ（山梨文化財研究所 河西学） .....	97

## 挿図目次

第1図 県北西部の縄文時代草創期から早期の遺跡位置図	2	第44図 21号住居跡出土遺物	58
第2図 古墳時代～平安時代の遺跡位置図	4	第45図 土坑出土遺物	59
第3図 遺跡周辺の地形復元図	5	第46図 遺構外出土土器	60
第4図 現況図と調査区	7	第47図 遺構外出土遺物	61
第5図 苗木基序	8	第48図 遺構外出土遺物	62
第6図 縄文時代草創期～早期遺物分布図	(折込図版)	第49図 遺構外出土遺物	63
第7図 草創期の石器	19	第50図 遺構外出土遺物	64
第8図 草創期の石器	20	第51図 遺構外出土遺物	65
第9図 草創期の石器	21	第52図 遺構外出土遺物	65
第10図 草創期の石器	22	第53図 1号住居跡	66
第11図 草創期の石器	23	第54図 1号住居跡出土遺物	67
第12図 草創期の石器	24	第55図 3号住居跡	68
第13図 草創期の石器	24	第56図 3号住居跡出土遺物	69
第14図 草創期の石器	24	第57図 4号、5号住居跡	70
第15図 犬岩別資料No.2 刃片	25	第58図 5号住居跡出土遺物	71
第16図 犬岩別資料No.5 刃片	26	第59図 10号住居跡	72
第17図 犬岩別資料No.10 刃片	27	第60図 10号住居跡出土遺物	73
第18図 犬岩別資料No.11 刃片	28	第61図 11号住居跡及び出土遺物	74
第19図 犬岩別資料No.15 刃片	29	第62図 12号住居跡	75
第20図 犬岩別資料No.18 刃片	30	第63図 23号住居跡	76
第21図 草創期中葉と想定される遺物群	30	第64図 23号住居跡出土遺物	77
第22図 草創期～早期の土器	31	第65図 24号住居跡	78
第23図 19号住居跡	32	第66図 24号住居跡出土遺物	79
第24図 19号住居跡出土遺物	33	第67図 25号住居跡	80
第25図 早期の土器	36	第68図 25号住居跡出土遺物	81
第26図 早期の土器	37	第69図 30号住居跡及び出土遺物	82
第27図 早期～中期の土器	38	第70図 34号住居跡	83
第28図 中期～晚期の土器	39	第71図 34号住居跡出土遺物	84
第29図 石器	43	第72図 37号住居跡	84
第30図 石器	44	第73図 遺構外出土遺物	85
第31図 石器	45	第74図 1号～6号地下式土坑	86
第32図 硬玉、削器、石錐	46	第75図 地下式土坑内出土遺物	87
第33図 使用痕のある黒曜石剝片	47	第76図 3号～6号土坑及び出土遺物	88
第34図 その他の石器	48	第77図 遺構外出土遺物	89
第35図 石錐	48	第78図 遺構外出土石器	89
第36図 2号、17号住居跡	50	第79図 遺構外出土遺物	90
第37図 2号、17号住居跡出土遺物	51	第80図 22号住居跡出土遺物	90
第38図 6号、7号、8号、9号住居跡	52	第81図 22号住居跡及び出土遺物	91
第39図 7号、8号住居跡出土遺物	53	第82図 1号、2号土坑	92
第40図 12b号住居跡出土遺物	54	第83図 1号石積上坑	93
第41図 13号、18号住居跡	55	第84図 2号石積土坑及び出土石棒	93
第42図 13号、18号住居跡出土遺物	56	第85図 1号土坑群	94
第43図 21号住居跡	57	第86図 2号、3号土坑群	95

### 折込図版

神取遺跡全体図 A区

神取遺跡全体図 B区

## 図版目次

図版1 通路全景	102	図版18 21号住居跡及び遺物	119
図版2 通路A区全貌	103	図版19 古墳時代、4号上塙遺物、通路外遺物	120
図版3 調査区近景、縄文時代草創期の通路群が出土した地点	104	図版20 1号住居跡及び遺物	121
図版4 草創期の石器1	105	図版21 3、4号住居跡	122
図版5 草創期の石器2	106	図版22 5、10号住居跡	123
図版6 草創期の石器3	107	図版23 10号住居跡カド及び遺物 11号住居跡及び遺物	124
図版7 草創期の石器4、母岩剥資料No.2の剥片	108	図版24 12号住居跡	125
図版8 母岩剥資料No.11の剥片	109	図版25 23号住居跡及び遺物	126
図版9 母岩剥資料No.10の剥片、草創期の上墓	110	図版26 24、30号住居跡	127
図版10 19号住居跡及び遺物	111	図版27 34号住居跡及び24号住居跡出土状況 30号住居跡及び遺物	128
図版11 縄文時代の土器・石器	112	図版28 34、25号住居跡出土遺物 6号地下式上塙、3～6号上塙及び遺物	129
図版12 石礫1	113	図版29 1号土坑群、1・2号石積土坑 22号住居跡出土遺物、中～近世通路外遺物など	130
図版13 石礫、黒曜石製石器	114	図版30 調査参加者	131
図版14 黒曜石製石器	115		
図版15 2、17号住居跡及び遺物	116		
図版16 8、9、13、18号住居跡及び遺物	117		
図版17 13、18号住居跡出土遺物	118		

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 1 遺跡の地理的環境（第1図—第3図、図版1）

明野村は東に茅ヶ岳、金ヶ岳（標高1703m、1764m）を望み、西は秩父山系より流れ出る塙川の断崖により区画された南北15km、東西8kmほどの茅ヶ岳山麓に位置する。茅ヶ岳山麓には、小河川が形成した谷が東西に数多くのびているが、現在水流のある河川は、北から湯沢川、柄沢川、正樂寺川などがあるだけである。いずれも小河川であり、古来、農業用水の便に苦しんだ土地柄である。しかし、茅ヶ岳山麓には南北に連なる湧泉列があり、そのうちのいくつかは現在も清水をたたえている。遺跡の多くもこれら的小河川、湧泉の近くに分布する（佐野1993）。

神取遺跡は、この茅ヶ岳山麓の西端を塙川が切り取るように形成した3枚の段丘面のうちの中位段丘（神取面）上に位置し、標高は485mほどである。塙川との現比高差は約30mである。段丘面のうち下位段丘面は、かつて圃場整備にともない遺跡所在確認調査が行われたが、遺物埋蔵地は発見されなかった。後述するとおり、中位段丘面のAT降灰層の有無については評価が分かれることもあるが、上位段丘面上ではAT堆積層が確認されている（合田1989）。従って、神取遺跡が立地する中位段丘面はAT降灰前後に形成され、本遺跡で縄文時代草創期の遺物が発見されているとおり、縄文時代初頭までは離水、陸化していたものと思われる。ただし、この中位段丘面が一時期に離水したのかは、段丘面上の遺跡分布と内容が充分に知られていない現時点では、まだ検討の余地であろう。神取遺跡A区が立地する微高地は、地形復元図（第3図、地形現況図より作成）で見る限りでは塙川が流路を変える地点に形成した自然堤防を起源とするようであり、縄文時代草創期までに離水し、塙川に面した生活遺跡として縄文時代から中、近世を通じて利用され続けたものと思われる。

さらに、本遺跡B区では古墳時代以前の遺構、遺物がほとんど検出、出土していないことも注意を要する。黄褐色砂層を地山とすることから古墳時代にはすでに離水していたと思われるが、上位段丘面から流れ落ちる柄沢川がたびたび流路を変えたことにより、洪水にさらされる不安定な面であった可能性が高く、従って、おそらく古墳時代にはまだ居住城ないし生産城として利用できる状態ではなかったのではないだろうか。

神取遺跡ではこのように手近に水田を営むことができるような場所が確保できなかった可能性が高い。明野村では過去10年間にわたり、主に塙川の上位段丘面上で圃場整備とそれに伴う埋蔵文化財調査を行ってきたが、奈良時代以前の遺構、遺物はほとんど発見されていない。それに対して、中位段丘面に古墳時代の集落が形成されたことの理由をあえて考えるならば、塙川対岸の氾濫原の利用、蘿崎市藤井平北部との関係などが重視されていた可能性が挙げられよう。

### 縄文時代草創期から早期の遺跡

番号	遺跡名	出土・収集施設の時期	番号	遺跡名	出土・収集施設の時期
1	神取遺跡	草創期の石器群と土器群。早期戦国から末葉の土器が出土。	12	内田古墳	早期縄文土器が発見されている
2	兵の公園第5遺跡	早中期の火葬坑、早期埋葬土器、縄文灰土塗付土器文、中期・後期灰土器など	13	川又遺跡・川又坂土遺跡	早期縄文土器が発見されている
3	兵の公園第11遺跡	中期灰土器など	14	梅氏遺跡	中期土器が発見されている
4	兵の公園遺跡群	早期洋式土器などが発見されている	15	東高麗遺跡	中期土器が発見されている
5	中込遺跡		16	弓寺遺跡	中期縄文土器が発見されている
6	城下第2遺跡	早期洋式土器。中期末の縄文灰土文土器が出土。	17	御敷古跡	中期土器が発見されている
7	天神遺跡	早期洋式土器が発見されている	18	船山遺跡	前期始段～前半の監視塔が発見されている
		早期灰土器が発見されているほか、鐵鏃など。	19	上北尾遺跡	中期半の馬糞坑が発見されている
8	油川第3遺跡	中期洋式土器が発見されている	20	新庄上遺跡	初期始段～前半の墓塔群が発見されている
9	甲ツ原遺跡	早期洋式土器が発見されている	21	平沼円土遺跡	中期の土器が発見されている
10	甲ツ原遺跡	中期洋式土器が発見されている	22	墨俣遺跡	早期末～前中期の土器が出土している
11	小田遺跡	中期洋式土器が発見されている	23	中庭遺跡	早期縄文土器が出土している
			24	上ト武遺跡	中期の土器が発見されている
			25	中尾根遺跡	早期縄文土器、縄文灰土器が発見されている



第1図 県北西部の縄文時代草創期から早期の遺跡位置図 (1/100,000)

## 2 遺跡の歴史的環境（第1図、第2図）

神取遺跡では縄文時代草創期の遺物群、早期木葉の住居跡が検出され、さらに晩期まで少數ながらも遺物が出土している。特に山梨県内では初めてのまとまった資料出土となつた草創期と、県北西部では遺構の検出例が少ない早期については、本遺跡の提供する資料が今後の検討の出発点になると思われる。そこでここでは特に草創期から早期について、神取遺跡周辺地域を概観してみたい（第1図）。

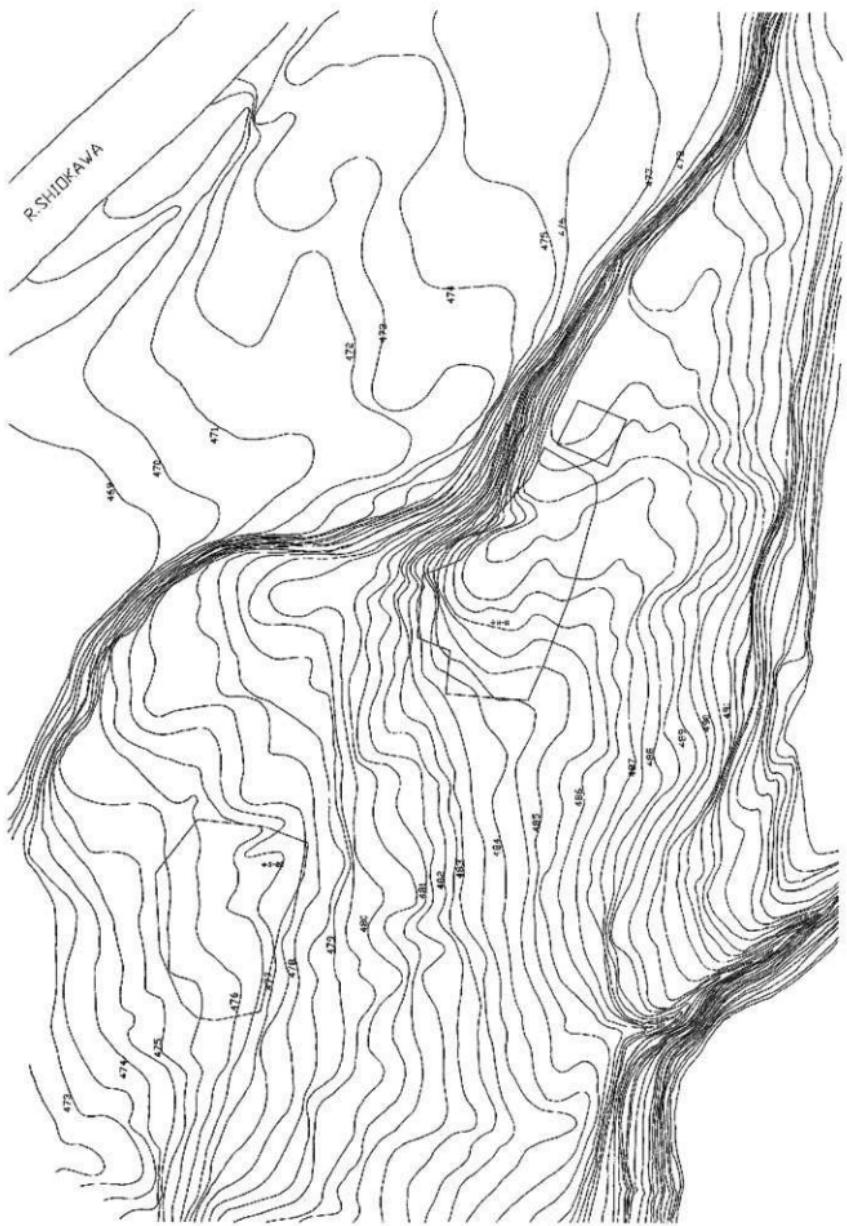
縄文時代草創期の遺跡は、八ヶ岳南麓で3カ所知られている。高根町丘の公園第5遺跡（保坂1990）および丘の公園第14遺跡（山梨県教育委員会1985）では草創期と思われる尖頭器、搔器などの石器が発掘調査の際出土している。また長坂町中込遺跡では爪形土器片2点が出土している（浅利、保坂1990）。ともに遺構を伴わず散発的な資料であるが、本地域の草創期遺跡は西関東、南関東地方の遺跡と比較した場合、上器出土量が少ない傾向があることを示している。これらの遺跡は河川によって開拓された河岸段丘上ないし丘陵地端に立地するという共通点が指摘できる。河岸段丘上に立地する神取遺跡と併せて本地域における草創期遺跡立地のパターンを示しているといえよう。八ヶ岳周辺は黒曜石原産地を有し、また旧石器時代研究の一中心地であることから、数多くの後期旧石器時代の遺跡が知られている。今後、中部地方において後期旧石器時代から縄文時代草創期への生活様式の変遷過程をさぐるうえで、重要な地域になると思われる。

縄文時代早期の遺跡は、早期木葉の降帯土器期の集落跡である駿迦堂遺跡（小野1986）がよく知られ、早期前半の押型土器が発見された遺跡は小野、信藤両氏の集成（小野、信藤1979）時で、甲府盆地を中心に75カ所が知られている。県北西部でも分布調査の折に採集された資料、発掘調査の際に出土した断片的な資料ではあるが、20を超える遺跡で早期の遺物が発見されている。特に採集資料で判別が容易な押型土器や条痕土器などの遺跡が多い。これまでのところ燃系土器や沈線文土器など早期前半の遺物があまり知られていない点が特徴であるが、押型土器の出土遺跡数を考慮すれば、今後発見例が増えてくると思われる。また山梨県内の早期木葉には本遺跡にもみられるように東海系土器群が流入していく。

一方、古墳時代では市川市の北端部、藤井平で後山遺跡（山下1989）が、また八ヶ岳の岩屑流（通称七里ヶ岩）上には坂井南遺跡（山下1984）などの古墳時代前期の遺跡が調査されているほか、分布調査でも古墳時代前期の遺物が各所で採集されている。また、神取遺跡から塙川をはさんだ対岸には奈良時代から平安時代初頭の大豆生山遺跡（末木1976）がある。弥生時代中期から集落が繁かれた藤井平に対して、茅ヶ岳山麓ではこれまでに弥生時代の遺跡は知られておらず、わずかに遺物が散見される程度（大森1990）であり、縄文時代以後この地に集落が営まれるのは古墳時代前期からであったと考えられる。用水に乏しい茅ヶ岳山麓の地理環境が原因であろう。

平安時代になると茅ヶ岳山麓、八ヶ岳南麓では集落遺跡が急増する。明野村だけでもこれまでに6遺跡が調査されている（宮沢1987、大森1988、1990、1991、1992、佐野1993）。さらに神取遺跡からは官衙跡とされる高根町湯沢遺跡（南宮1983）、土師器製作跡が発見された須玉町大小久保遺跡（山路1983）が遠望できる。遺跡から南に約1km離れた宇波刀神社には、貞勤六年（864年）の銘をもつ石鳥居がある。八ヶ岳南麓と茅ヶ岳山麓には9世紀頃より官牧が置かれたたらしく、遺跡の急増をこうした動きと関連させて説明する考えもある（末木1986、萩原1986）。





第3図 遺跡周辺の地形復元図

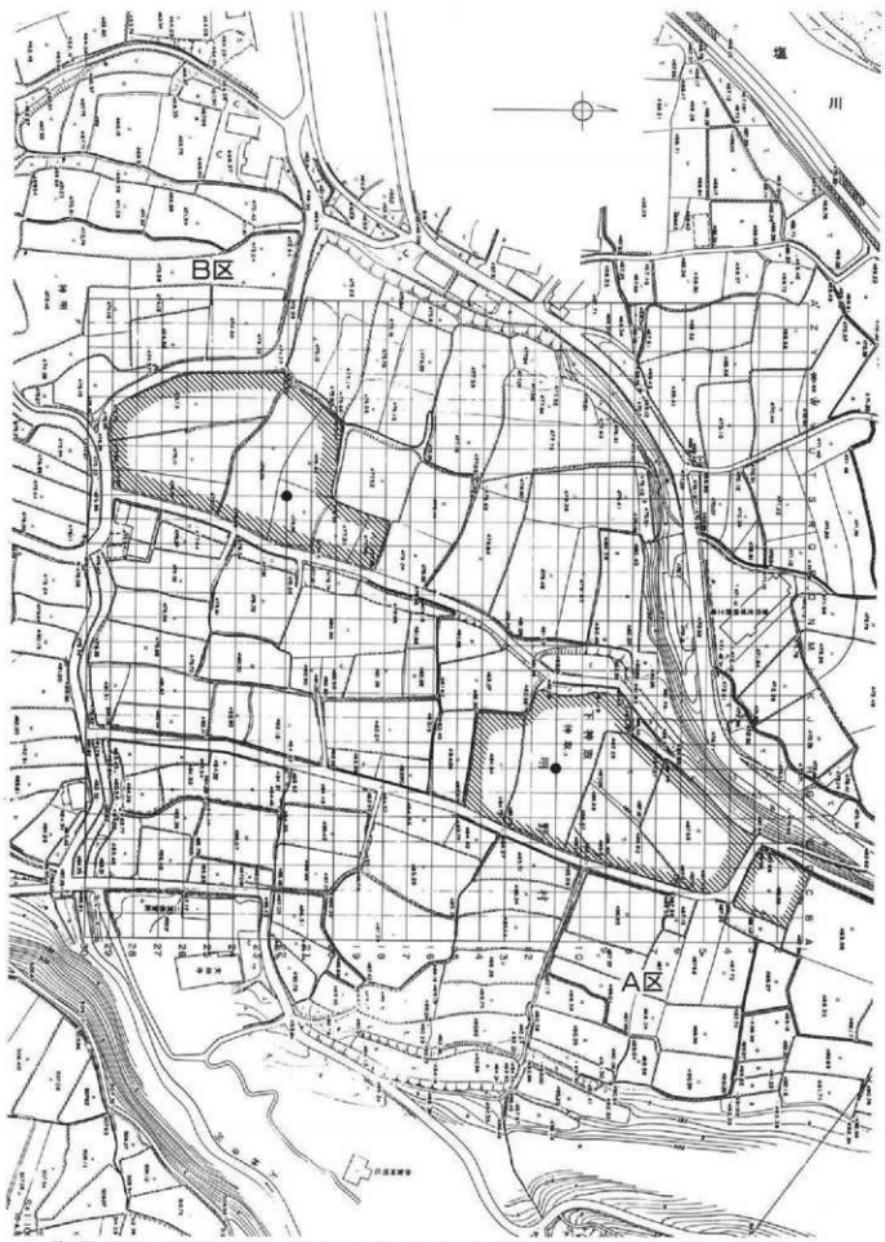
## 古墳時代から平安時代の遺跡

番号	遺跡名	時期・特徴
1	神坂遺跡	古墳時代前期・平安時代
2	高台遺跡	平安時代
3	高台・中谷井遺跡	平安時代
4	高門立遺跡	平安時代
5	鶴の木遺跡	平安時代
6	御室空塗跡・中村道祖神遺跡	平安時代
7	北原遺跡	平安時代
8	吉野山小字板石塚	後醍醐朝
9	高台古墳	後醍醐朝
10	小久保遺跡	平安時代 上田郡製作所
11	通水遺跡	平安時代 官衙跡
12	大里牛田遺跡	平安時代
13	昭敷市遺跡	平安時代
14	中須遺跡	平安時代

番号	遺跡名	時期・特徴
15	中田小字板石塚	奈良時代・平安時代
16	前田遺跡	奈良時代・平安時代
17	吉ノ前第2遺跡	奈良時代・平安時代
18	羽柴遺跡	奈良時代
19	弓ノ面遺跡	古墳時代・奈良時代・平安時代
20	北浅田遺跡	奈良時代・平安時代
21	後田遺跡	古墳時代前期・奈良時代・平安時代
22	堂ノ面遺跡	奈良時代・平安時代
23	大の面塚古墳	後醍醐朝
24	忍井南遺跡	古墳時代前期
25	若下条遺跡	平安時代・平安時代
26	小立原氏郷跡	平安時代末・鎌倉時代
27	竹原遺跡	平安時代
28	三之瀬古墳群	後醍醐朝・奈良時代

## 引用参考文献

- 合田信行 1989 「白山1遺跡の砂粒組成・重鉱物組成」 大森隆志「踏石遺跡薬師堂遺跡白山1遺跡」 明野村教育委員会
- 浅利司・保坂康夫 1990 『中込遺跡』 山梨県教育委員会
- 雨宮正樹 1983 「高根町湯沢遺跡」「山梨考古」10 山梨県考古学協会
- 猪又喜彦 1980 「韮崎市中尾根遺跡発見の押型文土器」「丘陵」8 甲斐丘陵考古学研究会
- 大森隆志 1988 「北原遺跡」 明野村教育委員会
- 大森隆志 1989 「踏石遺跡薬師堂遺跡白山1遺跡」 明野村教育委員会
- 大森隆志 1990 「千野木1・2遺跡・池の下遺跡・踏石1遺跡・中村道祖神遺跡」 明野村教育委員会
- 大森隆志 1992 「宮後遺跡」 明野村教育委員会
- 岡本範之 1990 「平安期における甲斐国巨摩郡の動向」「山梨県考古学協会誌」3
- 小野正文・信藤祐仁 1979 「甲斐の押型文土器」「丘陵」6 甲斐丘陵考古学研究会
- 小野正文 1986 「駿遠堂1」 山梨県教育委員会
- 小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」「東日本における古墳出現過程の再検討－日本考古学協会1993年新潟大会資料－」 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 佐野 隆 1993 「星敷派」 明野村教育委員会  
このほか明野村教育委員会が平成5年度に調査した村の内II・III遺跡・高台・中谷井遺跡でも平安時代の住居跡が発見されている。
- 末木 健 1976 「山梨県中央道塙藏文化財包蔵地発掘調査報告書巨摩郡須玉町地内」 山梨県教育委員会
- 末木 健 1986 「甲斐国巨摩郡の成立と展開」「研究紀要」3 山梨県埋蔵文化財センター
- 中山誠一 1986 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」「山梨考古学論集」I 山梨県考古学協会
- 中山誠二 1993 「山梨県域における集落・墳墓の概要」「東日本における古墳出現過程の再検討－日本考古学協会1993年新潟大会資料－」 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 新津健・二田村英彦 1993 「川又坂上遺跡」 山梨県教育委員会
- 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」「山梨考古学論集」I 山梨県考古学協会
- 平野修 櫛原功一 1992 「宮ノ前遺跡」 萩崎市遺跡調査会
- 保坂康夫 1990 「丘の公園第5遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター
- 宮沢公雄 1987 「善門寺遺跡」 明野村教育委員会
- 山下孝司 1986 「金山遺跡下木戸」 遺跡中道遺跡」 萩崎市教育委員会
- 山下孝司 1984 「坂井南遺跡」 萩崎市教育委員会
- 山下孝司 1989 「後田遺跡」 萩崎市教育委員会
- 山路恭之助 1983 「大小久保遺跡」 福生町教育委員会
- 山梨県教育委員会 1985 「丘の公園第14番ホール遺跡範囲確認調査報告書」



第4図 現況図と調査区(1/2,000) H11 X=-25296.078 Y=-5910.572 S22 X=-25406.078 Y=-6020.572

## 第2章 調査にいたる経緯と発掘経過

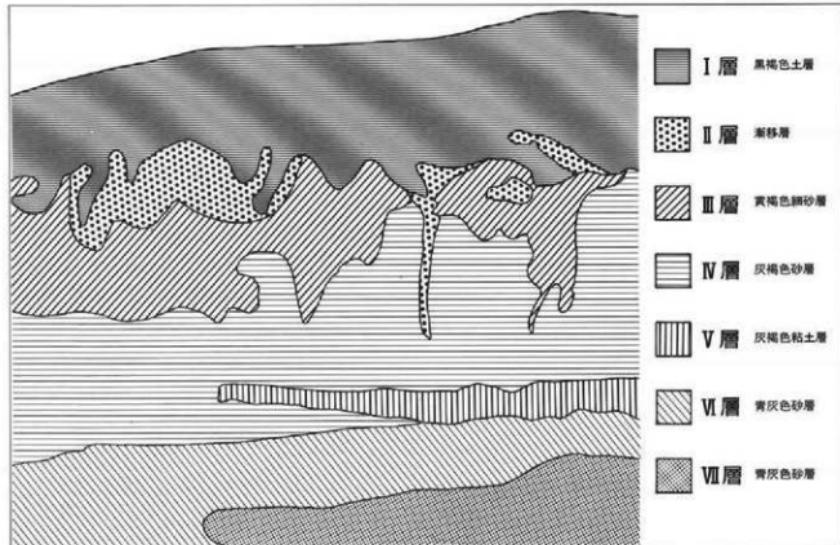
神取遺跡を含む下神取地内の水田地帯では、1992年に県営圃場整備事業の着工が計画された。それに先立つ1990年に明野村教育委員会が、予定工区内の埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施したところ、2ヵ所に古墳時代、平安時代の遺物が集中して発見される地点が確認され、それぞれ神取I遺跡、神取II遺跡として遺跡の発見届を行った。

この神取遺跡の発見により、明野村教育委員会では岐北土地改良事務所と協議、調査経費負担協定を締結し、1992年6月より文化庁及び山梨県の補助金を得て、発掘調査を実施することとした。

試掘調査の結果から削平が少ないとと思われる範囲18,000m<sup>2</sup>を調査区としたが、重機による表土剥除の結果、遺構が確認されたのはここに報告する約11,000m<sup>2</sup>の範囲である（第4図）。

試掘時に局部磨製石斧が1点発見されていたが、そのときはその石斧の性格や属する時期について不確実な点も多く、調査当初には縄文時代草創期の遺物包含層を調査する心づもりが全くくなかった。結果として、古墳時代以降の住居跡や造田による削平により草創期の遺物は原位置を保っているものが少なかったとはいえ、当初より準備を行わなかつたことは今となっては悔やまれる。

6月より開始した現地での発掘調査は、途中1回の現地説明会を経て、9月下旬にはほぼ遺構調査を終えたが、調査中、黒曜石、珪質頁岩の剝片類のほか、縄文時代早期の押型文土器、さらには草創期のものと思われる表裏に縄文を施した土器片が発見されるに至り、縄文時代草創期の遺物包含層がまちがいなく存在することを確認し、



第5図 基本層序

再度岐北土地改良事務所と協議、調査期間を1ヶ月延長し調査を続行することとした。この結果、比較的十層遺存状態がよいと思われる範囲で縄文時代草創期の石器類が発見された。11月中旬、Ⅲ層をもはや石器、剣片類が出土しないところまで掘り下げて現地での調査を終了した。

本遺跡出土上の草創期の遺物群は、県内で初めてのまとまった資料として注目され、新聞発表もされた。また、10月には駿河堂遺跡博物館（山梨県一宮町、勝沼町）主催の特設展『縄文世界の形成』（平成4年10月1日～11月9日）にも遺物の一部が貸与され、展示された。

このように遺物が一般にも広く公表されたと裏腹に、調査中に遺物の一部が紛失するという事件も起きた。調査中の手違いであったと思いつかうが、調査中の尖頭器のみが紛失したことから盗難の可能性もある。紛失した遺物のうちの1点は第9図30とはほぼ同形の黒曜石製小型有茎尖頭器であった。

神取遺跡の出土遺物の整理作業は翌1993年4月より1994年3月まで行った。この間、草創期の石器類の接合作業も行ったが、原位置を保った状態で発見された遺物が少なかったため、接合作業は遅々として進まず、この報告では充分な分析ができなかった。この点については後日機会改めて報告、検討するつもりである。

発掘調査区は、神取I遺跡、神取II遺跡を同一遺跡として扱い、東西方向に東よりA～W、南北方向に北よりI～30までの10mグリッドを設定し、H-11およびS-22の2点に公共座標第VII系による基準点を設けた。出土遺物は原位置を保持していると思われた縄文時代草創期の遺物については一点ごとに、そのほかの遺物については造構単位、グリッド単位で出土位置を記録した。

遺跡の基本層序は第5図に示したが、微高地状の旧地形は造山による削平、土砂の移動が著しく、実際ここに示した層序が遺存する範囲はごくわずかで、調査区のほとんどは第III層で造構確認を行った。造構全体図で造構が検出されていない範囲は削平がIV層からV層にまで及んでいる部分である。

上層はB-3グリッド調査区東端に観察用の深掘りトレンチを設けて観察した。第I層は耕作土直下の墨褐色土で、土壤化した砂層である。A区でこのI層がきちんと残っていた範囲はごく限られる。II層はI層とIII層が入り組んだ漸移層である。III層は粘性がややある黄褐色の細砂層で、草創期の遺物の多くはII層ないしIII層から出土している。造構の大半はこのIII層で確認、検出した。IV層はIII層よりも粒子が粗い、灰褐色の砂層である。H-11グリッド北の造構が希薄な範囲はこのIV層が露出するまで削平されている。V層は灰褐色の粘土層である。VI層は粒子がかなり粗い青灰色砂層で、VII層はVI層よりいくらくら粒子が細かい青灰色砂層である。

この土層観察トレンチを利用して土中のテフラ分析を行った。詳細は分析を委託した山梨文化財研究所河西学氏よりの分析報告書を参考に掲載したので参照していただきたいが、分析結果についてここで簡略に報告すると、始良カルテラ起源の広域テフラ(AT)はIII層中に、そのピークを有している。この結果をそのまま受け取れば、III層形成中にAT降灰があったということである。遺跡の立地する中位段丘面はすでにAT降灰時には離水、陸化していたことになる。しかし、河西氏は試料中にみられたピークについて2次的な堆積の可能性もあるとして、慎重な評価をすべきと注意している。

この点は縄文時代草創期当時の地理環境をどのように復元、想定するかにかかわる重要な問題である。AT降灰以前に中位段丘面が形成されているとなると、草創期までに約1万年の時間差があり、段丘面から河川面までの比高差がある程度あったと考えなければならないであろう。草創期の遺跡全般にいえることであるが、遺跡の立地する河岸段丘面と当時の河川との比高差を、環境復元の際どの程度に想定するかにより、草創期の河川指向の遺跡立地に対する評価が変わってくる可能性もあると思われる。今後各地の河岸段丘面上の遺跡調査の際に、調査対象が草創期であるか否かにかかわらず、地形形成過程の復元に努めるべく調査を計画することの必要性を強く感じる。

## 第3章 縄文時代草創期の遺物

### 1 出土石器と土器

縄文時代草創期の遺物はII-11グリッドを中心とする20m四方ほどの範囲で特に集中して出土したが、調査区全面にわたって遺構覆土および表土近くからも石器、剝片が出土している。第1章で述べたとおり、神取遺跡は自然堤防起源の微高地に立地するらしいこと、調査区の大半は造田のためにかなり削平されていること、削平が比較的少ない場所には古墳時代以降の住居跡が掘り込まれていることなどのために、遺物の大半は原位置を保っていないと考えられる。そこで包含層が比較的良好な状態で遺存していると予想されたH-11グリッド周辺を調査し、約400点の遺物について出土位置を記録した。

遺物は珪質頁岩製の石器、剝片約1500点と黒曜石製の石器、剝片約2100点、土器片11点が出た。大半が原位置を保っていない剝片類の整理は思うように進まず、本報告では接合資料などを充分に提示することはできない。草創期に特徴的な木葉形尖頭器の石材である珪質頁岩の剝片類は、石器資料との対比により分類、整理が可能であったが、黒曜石の石器、剝片類については、本遺跡が縄文時代草創期から晩期までの遺物を包含しているため、草創期に属すると思われる資料の抽出が困難であった。そこで本報告では黒曜石製の石器、剝片類は、その形態上の特徴から草創期に属する可能性があるもの以外は一括して第4章第3節で扱うこととする。

まず、遺物の出土状況について報告したい(折込図版第6図)。層別別の出土状況では、II層漸移層で縄文時代早期の遺物が多い傾向にあるが、II層とIII層の遺物包含層が厚さにして僅か30cm程度しかないことなどから、遺物群を層別に分けることは困難である。また、遺物の水平分布をみても遺物が比較的原位置を保っているような範囲がせいぜい20m四方であり、母岩別資料毎の分布範囲の傾向も明瞭ではない。遺物が原位置を保っているか否かは、遺跡が立地する微高地の傾斜面を遺物が流されている可能性も含め慎重に判断すべきであろう。

そこでここではまず石器種類毎に遺物を報告し、節末で草創期のなかでの石器群の位置づけを検討したい。また、珪質頁岩と安山岩については、母岩別資料としての分別がある程度可能であったため、1~46までの母岩別資料を設定した。それら母岩別資料についての特徴を第1表にまとめた。各石器種個体についての特徴と観察所見は第2表から第6表にまとめた。表中の出土位置は出土グリッド番号と出土層位を記し、第7図から第13図に実測図を提示したものは第6図中に示した。ローマ数字は出土層位を意味する。古墳時代以降の遺構覆土より出土したものについては、遺構番号と覆土出土を示す「覆」を記した。調査終了時に排土をふるいにかけ、遺物の回収を試みた。そこで回収した遺物には排土が搬出されたグリッド番号と「排」を記した。

第1表 母岩別資料一覧表

母岩別資料番号	石 材 質 と 特 徴
母岩別資料1 -	母岩別資料No.1から14はいずれも青灰色の珪質頁岩で白色の粘土脈が入る。石質の緻密さ、白色脈の入り具合などで14母岩に分類した。これらの石材は山梨県側の秩父山地を原産地とする可能性が高いものである。いくつかは同一母岩の可能性もある。
母岩別資料15 母岩別資料16	15, 16は淡青灰色の珪質頁岩で、白色脈が入る
母岩別資料17 -	
母岩別資料22 母岩別資料30 母岩別資料32 母岩別資料33 母岩別資料34	やや緑がかかった青灰色の珪質頁岩で白色脈は少ない

母岩別資料番号		石 材 質 と 特 徴
母岩別資料23		白色緻密の頁岩で、新潟県北部、山形県南部で産する白色の頁岩と思われる。
母岩別資料24		
母岩別資料25		母岩別資料No24、26、29も1から14と同様の青灰色で白色脈のはいる珪質頁岩であるが、珪質度が高く緻密である。
母岩別資料26		
母岩別資料27		
母岩別資料28		
母岩別資料29		
母岩別資料30		
母岩別資料31		
母岩別資料32		
母岩別資料33		
母岩別資料34		
母岩別資料35		安山岩である。39は黒色で発泡のみられる安山岩である
母岩別資料36		
母岩別資料37		
母岩別資料38		
母岩別資料39		
母岩別資料40		
母岩別資料41		
母岩別資料42		27、38、40、43はくすんだ墨縞岩のような色調のチャートで、珪質度が高く緻密である。長野県北部から北陸地方産の可能性がある
母岩別資料43		
母岩別資料44		
母岩別資料45		
母岩別資料46		珪質度が高い緻密な珪質頁岩で、やや脉がかった青灰色に暗褐色脈が僅かにはいる

以上のお他、暗褐色緻密な、チョコレートのようなチャートなどが若干出土している。長野県開田村で同様の石材を採取したことがあり、北東信、北陸に産するものの可能性があろう。珪質度の低い、青灰色で、白色脈のはいる珪質頁岩は基本的に在地系石材と考えることができ、珪質度の高い、黒色、暗褐色脈の入る珪質頁岩は北東信から北陸形の輸入石材と考えてもよいと思われる。これらの母岩の分類は肉眼で観察した限りの印象によるものであり、今後の接合作業などで変更する可能性があることを了承いただきたい。また、石材の科学的分析による产地同定も今後行う予定である。機会を得てその結果についても報告したいと思う。

### 木葉形尖頭器（第7図1～第9図25、61、第2表、図版4、5）

本遺跡で出土した木葉形尖頭器は25点で第2表にまとめた。そのほかに、石鏃と区別し難い小型の木葉形尖頭器が4点あるが、これらについては石鏃の項で扱うこととする。

木葉形尖頭器についてかつて速報として紹介した折、破損断面の観察により製作途上の偶発的な折れと意図的な折り取りとを区別したが（佐野ほか1993）、その後の造物観察の結果、本遺跡では節理の発達した石材が多く用いられたことによる破損が多いことが判明し、そのような区別は今回あえてしないこととした。

第2表 木葉形尖頭器一覧表

図中 番号	出土位置 と層位	石材質	大きさ（現存長、幅、 厚cm、重さg）	母岩 番号	規 察 所 見
1	I 12・III	珪質頁岩	5.9, 2.9, 0.9, 16	1	横剥片素材の未製品 背側面を交互剥離する
2	J 12	珪質頁岩	3.1, 1.8, 0.8, 4.9	2	
3	I 12・III	珪質頁岩	3.6, 2.4, 0.9, 6.0	2	
4	I 12・接	珪質頁岩	6.3, 1.8, 0.9, 11	2	小型で細身の尖頭器未製品
5	I 13	珪質頁岩	4.1, 2.0, 0.6, 4.1	3	縱剥片素材の周縁加工のみの未製品
6	II 12・覆	珪質頁岩	3.7, 1.7, 0.8, 4.4	5	背側面の片縁にそれぞれ調整がみられる
7	II 12・覆	珪質頁岩	3.5, 3.7, 1.0, 10.9	6	周縁調整が始まった段階の未製品
8	I 12・III	珪質頁岩	4.8, 3.1, 1.0, 13.7	6	完成に近い未製品
9	H 11・III	珪質頁岩	4.2, 2.5, 1.5, 9.5	6	
10	H 11・III	珪質頁岩	3.0, 3.6, 1.2, 15.3	6	
11	I 11・III	珪質頁岩	5.2, 3.3, 0.9, 16.8	7	背面に側表面を残す 節理面の割れが2カ所にある
12	I 11・III	珪質頁岩	5.3, 3.1, 1.1, 22.3	11	完成に近い未製品
13	II 12・覆	珪質頁岩	5.2, 3.1, 1.4, 18	13	
14	G 11・III	珪質頁岩	5.1, 3.8, 1.2, 20.3	13	基部周縁に弁念の調整があり、完成寸前と思われる
15	G 11・III	珪質頁岩	5.2, 3.2, 1.4, 21.7	13	
16	H 11・III	白色頁岩	2.9, 4.2, 1.2, 15.6	23	礫皮面を残す 分割した魚角標が素材か
17	不	白色頁岩	4.1, 1.7, 0.9, 5.8	23	反り返った個体面から剥離片を素材としたと思われる
18	I 11・拂	珪質頁岩	4.9, 3.6, 1.3, 18.7	33	石材は安山岩かもしれない
19	H 11・拂	安山岩	5.1, 2.3, 0.7, 10	35	非対称形の小型尖頭器

図中 番号	出土位置 と層位	石材質	大きさ（現存長、幅、 厚cm、重さg）	母岩 番号	観察所見
20	8作・覆 III 1・Ⅲ	安山岩	4.7, 2.5, 1.0, 14.7	36	表面の風化が激しい 磨擦皮を残す削片を素材とした削縁加工のみの尖頭器
21	安山岩	2.3, 2.1, 0.4, 7.1			
22	不 明	真 石	4.8, 1.7, 0.8, 7.4	37	横長削片を素材とする 箱型から外れ尾端か
23	H 13	安山岩	8.7, 2.7, 1.0, 19.5	39	本遺跡での中型木彫形尖頭器の一範型を示す資料である 磨擦皮を残す 主削縁両側は周縁加工のみであろう
24	111・Ⅲ	安山岩	7.4, 2.8, 1.1, 20.9		
25	2作・覆	安山岩	7.5, 2.7, 0.7, 13.7		
61	G 8	黒色真石	4.7, 2.2, 0.9, 10.3	27	僅かに磨擦皮が残る横長削片素材、周縁加工のみの尖頭器 周縁加工のみを施した尖頭器基部片

### 有茎尖頭器（第9図26～29 第3表、図版5）

有茎尖頭器は4点出土し、使用石材から草創期に属する遺物と判断した。さらに黒曜石製の小型有茎尖頭器の可能性があるものが3点（第29図1、2、1点は調査中に粉失）出土している。黒曜石製の3点については時期特定が難しく、ここでは扱わない。

第3表 有茎尖頭器一覽表

図中 番号	出土位置と 出土層位	石材質	大きさ（現存長、幅、 厚cm、重さg）	母岩 番号	観察所見
26	10作・覆 H 11・Ⅲ	珪質真石	5.0, 2.4, 0.6, 7.9	9	削片を素材とした周縁加工のみの有茎尖頭器
27	珪質真石	4.9, 1.6, 0.8, 7.1		11	返し部はそれほど強く突起しない
28	11作・覆 C 3・覆	珪質真石	5.1, 1.7, 0.45, 3.9	26	返し部は微くない 27より短いタイプであろう
30		珪質真石	2.8, 1.1, 0.4, 1.5		黒曜石製の何等の尖頭器が人口グリッドで出土したか調査中に粉失してしまった

### 石鎌（第9図30～34、36、37、第4表、図版5）

石材質、形態、出土位置から草創期に属すると思われる石鎌は7点ある。しかし、29、36、37などは小型の尖頭器と考えてもよいであろう。そのほか、草創期に属する可能性がある石鎌が第29図から第31図に含まれていると思われるので参照していただきたい。

第4表 石鎌一覽表

図中 番号	出土位置と 出土層位	石材質	大きさ（現存長、幅、 厚cm、重さg）	母岩 番号	観察所見
29	D 2	珪質真石	3.4, 2.3, 0.9, 7.0		
31	22作・覆 I 12・Ⅲ	珪質真石	4.0, 2.0, 0.5, 3.2	32	尖頭器破損品の基部を加工し直したものか、当初よりこのような形状をもつて製作されたのか不明。背面に節理面による凹凸が異なる。母岩資料32は、この個体資料の他に石鎌（37）があるが、削片数は少ない。
32	安山岩	2.3, 2.1, 0.3, 1.9		24	横長削片を素材とする 基部には凹部を作り出そうとする剝離がみられるところから石鎌と判断した
33	安山岩	3.3, 3.0, 0.7, 6.1			33を小型にしたような石鎌
34	黑曜石	2.4, 1.6, 0.6, 2.0			背面に磨擦をのこす
36	11作・覆 I 12	黑曜石	3.6, 2.2, 1.0, 7.0		34と同型でやや大型の石鎌 尖頭器とも考えられるが、33の大型の石鎌があることから石鎌と判断した
37		黑曜石	2.4, 1.4, 0.4, 1.1		尖頭器破損品か

### 搔器・削器（第9図35、38～第10図46、第5表、図版5、6）

搔器はほとんどが指撃状搔器である。小型の指撃状搔器は第32図に掲載した。指撃状搔器は草創期から早期にかけての石器組成に含まれているものであり、特に草創期に属するものを明確に指摘し得ないが、石材と形態からここに10点を報告する。削器は2点を除き珪質真石製のものだけを報告する。黒曜石製の削器は第32図～第33図に掲載した。搔削器は尖頭器製作で生じる削片を素材としているものもみられる。35、38は同一母岩の尖頭器個体資料が、40は同一母岩の尖頭器調整削片が多量に出土している。

第5表 振器・削器一覧表

図中番号	出土位置と出土層位	石材質	大きさ(現存長、幅、厚cm、重さkg)	母岩番号	観察所見
35	不 明	珪質頁岩	1.9, 3, 4, 0.5, 6.2	2	素材を荒削りする段階の剥片を素材とする
38	不 明	珪質頁岩	2.6, 2, 9, 0.6, 4.7	2	35と同様の剥片を素材とする
39	11住・Ⅲ	白色頁岩	8.1, 2, 3, 1, 3, 19.8	10	先刀型振器 同一母岩の剥片類は一切出土していない
40	D 9・Ⅲ	珪質頁岩	4, 3, 4, 1, 1, 6, 24.9	35, 38と同様の剥片を素材とする大型の振器	
41	不 明	墨 磨 石	5, 2, 4, 4, 1, 7, 26.9	40	40と同様の振器
42	不 明	墨 磨 石	4, 0, 3, 0, 0.8, 10.4		背面に理面を残す
43	I 12	墨 磨 石	2, 9, 2, 4, 1, 1, 7.3		背面に理面を残す
44	不 明	墨 磨 石	3, 2, 2, 9, 1, 4, 11.8		背面に理面を残す
45	不 明	珪質頁岩	3, 4, 3, 1, 0.8, 9.3	38	素材を荒削りする段階の剥片を素材とする
46	II 12	墨 磨 石	3, 3, 4, 5, 0.8, 21.1		大型振器を素材とする 高根町丘の公園第5遺跡出土の振器に類似がある
47	不 明	珪質頁岩	6, 8, 4, 8, 1, 1, 26.9	41	この母岩の剥片は全く出土していない
48	I 11・Ⅲ	珪質頁岩	5, 0, 3, 1, 0.7, 12.2		縦長剥片を素材とする振器が多いなかで横長剥片を素材とする資料は少ない
49	I 12・II	珪質頁岩	4, 6, 1, 8, 0.6, 4.7	40	側面に突出部を残す 調整はないが刃器としておく
50	不 明	珪質頁岩	4, 5, 2, 3, 0.8, 9.4	40	側面に調節と使用痕を残す
51	不 明	墨 磨 石	2, 0, 2, 0, 0.8, 3.5		
52	I 11・Ⅲ	珪質頁岩	3, 7, 3, 3, 1, 2, 11.2	40	側面に若干の調整と使用痕を残す
53	III 11・Ⅲ	墨 磨 石	4, 2, 3, 4, 0, 7, 8.6		背面に理面を残す

## 石錐・ピエススキュー・局部磨製石斧・礫器(第11図~第13図、第6表、図版6、7)

石錐が4点、ピエススキュー1点、局部磨製石斧1点が出土している。礫器はグリッド出土である。局部磨製石斧は試掘調査の際、調査区東側の旧河道を埋める黒色土中より出土した。この旧河道黒色土には古墳時代前期の遺物が多く含まれており、石斧は2次的に包含されたものと判断し出土地点周辺は調査区より外した。

第6表 石錐・ピエススキュー・局部磨製石斧・礫器一覧表

図中番号	出土位置と出土層位	石材質	大きさ(現存長、幅、厚cm、重さkg)	母岩番号	観察所見
54	G 11・II	珪質頁岩	4, 3, 2, 8, 0.5, 5.4	2	縦長剥片を素材とする石錐 先端部は使用により崩壊している
55	12住・複	墨 磨 石	4, 3, 2, 9, 0.5, 4.9		54と同様の石錐
56	I 12・III	珪質頁岩	5, 9, 1, 1, 0.5, 5.4	32	縦長剥片素材 先端部は使用により崩壊している
57	D 8・II	珪質頁岩	2, 5, 1, 1, 7, 0.3, 1.2		横長の小剝片を素材とする54、55と同様の振器
58	I 11・III	珪質頁岩	3, 2, 2, 2, 0.6, 5.2		横長内面に不規則な剝離がみられる
59	C 7	安山岩	14, 8, 4, 8, 2, 5, 17.5		方角四面を研磨する 断面は長者久保、御神子柴製石斧に類似する二角形である
12回	H 12	安山岩	8, 3, 10, 1, 2, 9, 35.5		前部形状の刀部を作出した礫器 背腹面は節理面である
13回	H 12	カルシウム	9, 2, 8, 1, 3, 2, 24.0		硬皮を残す前器状の礫器

## 土 器(第22図1~11、第7表、図版9)

細縫起線文土器の口縫部破片1点、縫起線文土器らしい土器片1点、爪型文土器片4点、表裏に網文を施した土器片4点、結状体压痕文土器片1点が出土している。土器片の多くは古墳、平安時代の造構を確認するための精査中に出土したものでII層、III層に包含されていたものと思われるが、グリッド一括遺物として取り上げられたため正確な出土状況は不明である。

第7表 草創期土器一覧表

図中番号	出土位置と出土層位	胎 土 質		観察所見
1	H 9・III	瓦石、石片、雲母の微細な粒子が混じる土の堆った粘土で、色調は赤褐色、織維の混入はない		口縫部底面に細い粘土縫の波状隆起が貼付けられる。口縫部は表裏から棒状工具で押して波状にしてある。波状隆起の下には少なくとも5本の横筋織維が横走る。焼成は良好である 連続縫幅は器表面頂点部で2~2.5mm
2	19住・床	長石、石英粒子が混じるキメの堆った粘土で、陶器に織維が混入する 色調は赤褐色		縫1.5cmの隆起が指跡による押えが施される。早期の住居跡より出土したが、小器片で品類がなく船上に他の早期の土器よりも1、3に類似するため、ここに報告した。焼成はやや不良

図中 番号	出土位置と 出土層位	胎 土 質	観 察 所 見
3	I II・III	IとIIは同質の胎土、 IIIは異なる胎土	ハの字形の爪型文が3列横走する 焼成はやや不良
4	H II・III	表面が風化し観察は困難であるが、 キメがよく揃った胎土で、色調は 暗灰褐色	爪形ではなく先端が二叉に分かれた棒状工具で刺突して疑似爪型文を施している 焼成はやや不良
5	I II・III	雲母、石英粒子が多く混じる。纖維の混入はない。色調は暗黒褐色	つまんでつけた爪型文 3と同一個体の可能性がある
6	E 6	纖維が僅かに混入する胎土で、色 調は灰褐色	上下に傾き方向の異なる爪型文が重なる 焼成はやや不良
7	I II・III	雲母、長石粒子が混じるぎらつい た胎土で、纖維混入はない。色調 は黄褐色	外側は厚塗して不明瞭だがRL単節施文か 内面はRL単節施文 焼成 はやや不良
8	H II・II	金色雲母、長石粒子が多く混じる ぎらつい胎土で、纖維の混入は ない。色調は暗黄褐色	器外面はRL単節繩文継続施文 内面はLR単節繩文継続施文 焼成は普通
9	H II・II	金色雲母、長石粒子が多く混じる ぎらつい胎土で、纖維の混入は ない。色調は暗黄褐色	器外面はRL単節繩文継続施文 内面はRL単節繩文継続施文 焼成は普通
10	不 明	金色雲母、長石粒子が多く混じる ぎらつい胎土で、纖維の混入は ない。色調は赤褐色	器面は風化して純文原体の識別は難しいが、器内外面ともRL単節繩文 継続施文と思われる
11	H II・III	長石粒子が混じる胎土で、纖維は 混入しない。色調は赤褐色 焼成はやや不良	施状体に直火と思われる文様が施される。田層から出土している。

## 2 尖頭器製作にかかる剥片資料 (第15図～第20図、図版7～9)

以上の石器、土器のほか、本遺跡では尖頭器製作にともなうと思われる剥片類が出土している。接合作業が進んでいないため製作過程を明らかにすることはできないが、各母岩別資料の剥片類の特徴を報告し本遺跡における尖頭器製作のあり方の一端を検討してみたい。

母岩別資料は46種を分類した。各母岩別資料の特徴はすでに記したとおりであり、尖頭器製作にともなうと思われる剥片の出土量は母岩により多少がある。ここではまず、尖頭器製作にかかると思われる母岩別資料のうち、No.2、No.5、No.10、No.11、No.15、No.18について実測図を提示し、これら資料から推測し得る範囲で製作過程を検討したい。製作過程は素材から尖頭器粗型を作出する段階を1段階、粗型を調整する段階の前半を2段階、後半を3段階と想定し、それぞれの段階に剥片を分類した。本遺跡で出土した尖頭器未製品は3段階の調整を行っている途中で破損、廃棄されたものが多い。

母岩別資料No.2 (1～19) は出土剥片総数148点のうち1段階の剥片が21点、2段階の剥片107点、3段階の剥片20点があり、石器個体6点が出土している。1段階 (1～8) では素材となる礫表皮を残す剥片がみられる (1、2、3) が、礫表皮面の観察からは角礫ないし亜角礫を用いていることが推測される。8は6と7の接合資料である。2段階 (9～13) の剥片には打面が比較的広く、剥片側面型がまっすぐなものを抽出した。1段階と異なり背面は複数方向からの剥離で構成されるが、3段階 (14～19) と比較して単純な剥離構造のものが多い。3段階の剥片は背面が複数方向からの剥離で構成され、縁辺部の調整も細かく入念である。使用痕のある剥片 (15) がある。1段階では剥片のバルブの発達からハードハンマーを使用し、3段階では打面をほとんど残さない剥片 19のように押圧剥離されたものがあることが推測される。母岩別資料No.2には1段階の剥片を素材とした搔器2点 (第9図35、38) と石錐1点 (第11図54) があり、1段階で他石器種の素材を提供していることが分かる。尖

頭器の個体別資料は3点（第7図2、3、4）が出土しており、母岩No.2は少なくとも2～3個体の製作にかかっている。

母岩別資料No.5（20～29）は出土剥片総数75点、うち1段階が9点、2段階が58点、3段階が8点で、石器個体2点である。剥片の特徴は基本的にNo.2と変わらない。1段階の剥片21の打面には礫表皮が残り、剥片23の切子状の2枚の打面から、角礫をもとにした厚手の盤状剥片を素材としている可能性が推測される。第11図58のビエスエスキューは1段階の剥片を素材として用いているもので、ここでもNo.2同様、尖頭器製作途上の剥片が他石器種に素材を提供しているが、No.2に較べて剥片軒用の度合いは低いといえよう。尖頭器個体では第7図6が出土している。2次調整、使用痕のある剥片24、26がある。

母岩別資料No.10（30～38）は出土剥片総数131点のうち1段階21点、2段階77点、3段階33点、石器個体1点がある。1段階の剥片を素材としたと思われる攝器（第9図40）が1点あるが、尖頭器個体は出土していない。使用痕のある剥片（31、38）がみられる。

母岩別資料No.11（39～48）は出土剥片総数62点中、1段階41点、2段階9点、3段階12点、石器個体2点がある。特に注目されるのは大型の剥片39である。打面と背面に広く平坦な礫表皮を残すこの盤状の剥片は、やや薄手であったためかこのような状態で廃棄されることとなったが、本遺跡の尖頭器素材の一形態を示すものと評価してよいのではないだろうか。本遺跡では1段階の礫表皮を一部に残す剥片が多く出土しているが、礫表皮が背面全体を覆うような大型で荒削られた剥片は少ない。そのことからも39のような角礫を荒削した厚手の盤状剥片が、尖頭器素材として搬入された素材の形態であった可能性が高いと思われる。母岩No.11の石器個体は尖頭器1点（第7図12）、有茎尖頭器1点（第9図27）がある。

母岩別資料No.15（49～55）には2段階剥片の接合資料54がある。54は49と51の接合資料である。1段階の剥片は1点のみで石器個体はみられない。比較的良質な石質であるこの母岩の尖頭器は破損することなく製品として完成され、搬出されたものと思われる。出土剥片総数は80点、うち1段階1点、2段階72点、3段階7点である。

本遺跡における尖頭器製作の一形態を示すのが母岩別資料No.18（56～58）である。1段階、2段階の剥片が全くみられず、3段階の剥片のみが6点みられるのみである。完成品に近い段階まで調整された形状で未製品が搬入され、最終的な調整が遺跡内で行われて製品が搬出されている。59、60は粗型段階を思わせる剥片である。

以上の6母岩別資料を典型として、本遺跡における尖頭器製作を素材および製品の搬入、搬出についてまとめると次のとおりである。

① 遺跡内に素材を搬入し、1段階から3段階までの尖頭器製作を行ない、完成品で尖頭器を搬出する。

このようなやり方を示す母岩別資料にはNo.1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、23の16母岩がある。これらの母岩から製作され遺跡内に未製品ないし破損品として廃棄された尖頭器個体は17点である。母岩No.6および13に破損品として廃棄された個体が多い。節理が発達した母岩の石質が災いしているものと思われる。

② 粗型で搬入し、尖頭器製作を行い製品を完成品として搬出したもの

母岩別資料No.16は1段階の剥片が全くみられず、粗型にまで調整された形状で搬入されたと思われる。

③ 粗型で搬入し、尖頭器製作の初期工程までを行い未製品を搬出したと思われるもの

母岩別資料No.17、26、28には2段階の剥片しかなく、粗型を僅かに調整し、そのまま搬出されたものと思われる。

④ 2段階までの調整を終えた状態で搬入し、3段階の最終調整のみを遺跡内で行ったもの

母岩別資料No.18、19、21、22、24、25、27、29、30の9母岩がある。これらの母岩は3段階の剥片のみが出土

している。個体資料は有茎尖頭器 1 点（第9図28）、剥片を素材とした石鏃（第9図31）1点がある。

⑤ 原礫で搬入してから粗型段階までの製作を行い搬出したもの

母岩別資料No20、31は1段階の剥片のみが出土している。個体資料もない。

⑥ 未製品もしくは製品で搬入され、製作がほとんど行われないもの

母岩別資料No35、36、37、39はいずれも2段階の剥片と個体資料がそれぞれに1点ずつみられる。いずれも石質は安山岩、真岩であり、珪質真岩に較べて調査時に小剥片が見逃されている可能性も多いが、それでも剥片数が非常に少ない。良質の安山岩原産地が遠隔周辺にないことが原因であろうか。

つぎに以上の結果をもとに、本遺跡における尖頭器素材と石材产地について検討してみたい。

本遺跡において原礫もしくは素材段階で搬入された母岩は18固体ある。それらの剥片を観察して、原礫の状態で搬入されていると考えられる丹岩はない。従って、母岩別資料No11の剥片39で素材の一形態として想定した、角理を用いた厚手の盤状剥片が素材の一般的な形態であった可能性が高い。本遺跡周辺で珪質真岩の産地としては、秩父山地が挙げられる。本遺跡からは塩川を測上し、直線距離にして10kmほどの塩川両岸の断崖中に珪質真岩の鉱脈がある。肉眼観察では、本遺跡で使用された珪質真岩に良く似ている。(註) 剥片に残された角理ないし亜角理と思われる礫表皮からも、原礫が河川上流部で採取されたことが推察される。本遺跡で唯一、原石の状態で出土した隼人の縄を第14図に示した。小縄であるため、そのまま尖頭器素材となることはないと思われるが、河原の転石の亜角理を利用したことをうかがわせる資料である。

秩父山地産の在地系石材とは別に、母岩別資料No23、32など肉眼観察では長野県開田高原の草創期遺跡でみられるような、透明感のある灰色で褐色の細脈がはいる珪質真岩や、北陸北部の白色で緻密な頁岩に近い石材が出土している。これらの石材はいずれも緻密で均一な石質であり、良質石材として石器もしくは剥片石器のかたちで搬入され(第9図39など)、廃棄されている。遺跡内での製作にともなう剥片はほとんどみられず、遠隔地の希少石材として保有されていた量も限られていたと思われる。

### 3 まとめ

以上の出土遺物と剥片資料の検討から、草創期における本遺跡の時期的位置づけと性格を考えまとめてみたい。時期を厳密に特定することは、層位的にも遺物分布からも遺物の共伴関係が明確ではないため困難である。しかし、木葉形尖頭器と剥片資料については母岩別資料の分別により共時性がある程度まで裏付けられる。そこで問題となるのは細隆起線文土器から爪形文土器、表裏繩文土器さらには早期押型文土器とつづく土器形式からみた時期と木葉形尖頭器を中心とする石器群の関係であろう。以下に土器および各石器種の特徴からそれぞれの所属する時期を推測し、本遺跡での各土器形式期ごとの遺物組成を考えてみたい。

本遺跡出土の細隆起線文土器は小さな波状の口唇部と、その両下に波状細隆起線が1条、さらにその下に多条の微隆起線が横走するもので、長野県石川屋洞穴遺跡、慶應大学湘南藤沢キャンパス内遺跡1区A遺物集中区出土上の土器に類する。小器片であるが、おそらくハの字字形文が施文されないタイプであろう。本遺跡出土の隆起線文土器と爪形文土器は胎土觀察からも別個体と考えられる。これらの土器の詳細な時期推定は小器片であるため差し控えたいが、降起線文土器が多角化する新しい段階と思われる。

木葉形尖頭器は未製品、破損品が多いためその形状を正確に知り得ないが、完形品は中型から大型の、幅はそう広くない木葉形になるものが主流を占めるようである。本遺跡では尖頭器の製作を行っているため、尖頭器が石器組成中に占める割合が高いが、依然、木葉形尖頭器が有茎尖頭器や石鏃に対して量的優位を保っている時期

に属するものと考えたい。したがって、本遺跡では多条化する時期の隆起線文土器から爪形文土器までにともなう可能性が高いのではないだろうか。

一方、尖頭器製作の剥片から製作された撲器、石錐などの石器の形態は、拇指状撲器や広いつまみ部をもつ石錐など草創期に特徴的にみられるものが多い。平基無茎、凹基無茎の石錐（第9図32、33）も同様である。しかし、これらの石器種は隆起線文土器から多縄文系土器にまでみられ、作出する土器形式を特定する根拠とはなりにくい。尖頭器および尖頭器製作剥片と同一母岩の石器は、隆起線文土器から爪形文土器にともなう可能性が高いであろうが、小形の拇指状撲器（第32図）や黒曜石製の削器には表裏縄文土器、さらには早期押型文土器などにまでともなうものもある。

有茎尖頭器は森平型に近い大型のもの（第9図27、28）と、石錐と大きさが大差ない小形のもの（第9図30）とが出土している。こうした大小の有茎尖頭器は隆起線文土器段階の遺跡での伴出例が多い。大型の有茎尖頭器は使用石材から木葉形尖頭器と同時期の可能性が高いものである。有茎尖頭器は石錐が主流を占めてくる多縄文系土器から、さらに最古期押型文土器にまで作出する可能性がある（森嶋1986）、これらの有茎尖頭器は隆起線文土器から爪形文土器にともなうと考えることができよう。

以上の検討から隆起線文土器および爪形文土器にともなうと思われる石器の主なものを第21図に示した。この遺物組成を前提に、本遺跡の性格について考えてみたい。

本遺跡はまず第一に尖頭器の製作場とみなすことができる。しかし、長野県下茂内遺跡などとは異なり、在地系石材を利用した自給を目的とする小規模なものである。第21図に示したとおり、尖頭器以外の石器種も安定して存在しており、遺構は検出されていないものの尖頭器製作以外の活動まで行った場と考えることができる。

遺跡は前述したように、塩川中位段丘面上の微高地にあり、草創期の遺跡立地によくみられるところである。上位段丘面上の安定した立地ではなく、河川に近い中位段丘面を選択したところに、河川に対する指向を感じられる。後期旧石器時代と縄文時代草創期の立地差は、丘の公園遺跡群でも指摘されている（保坂1990）。後期旧石器時代から縄文時代草創期における内水性漁獲の有無については、漁獲具の出土が不確実な現時点では評価が難しいが、本遺跡にもみてとれる河川指向は漁獲、シカなどの渡河地点での狩猟、交通、在地石材の入手などいくつかの要因が関係している可能性もある。

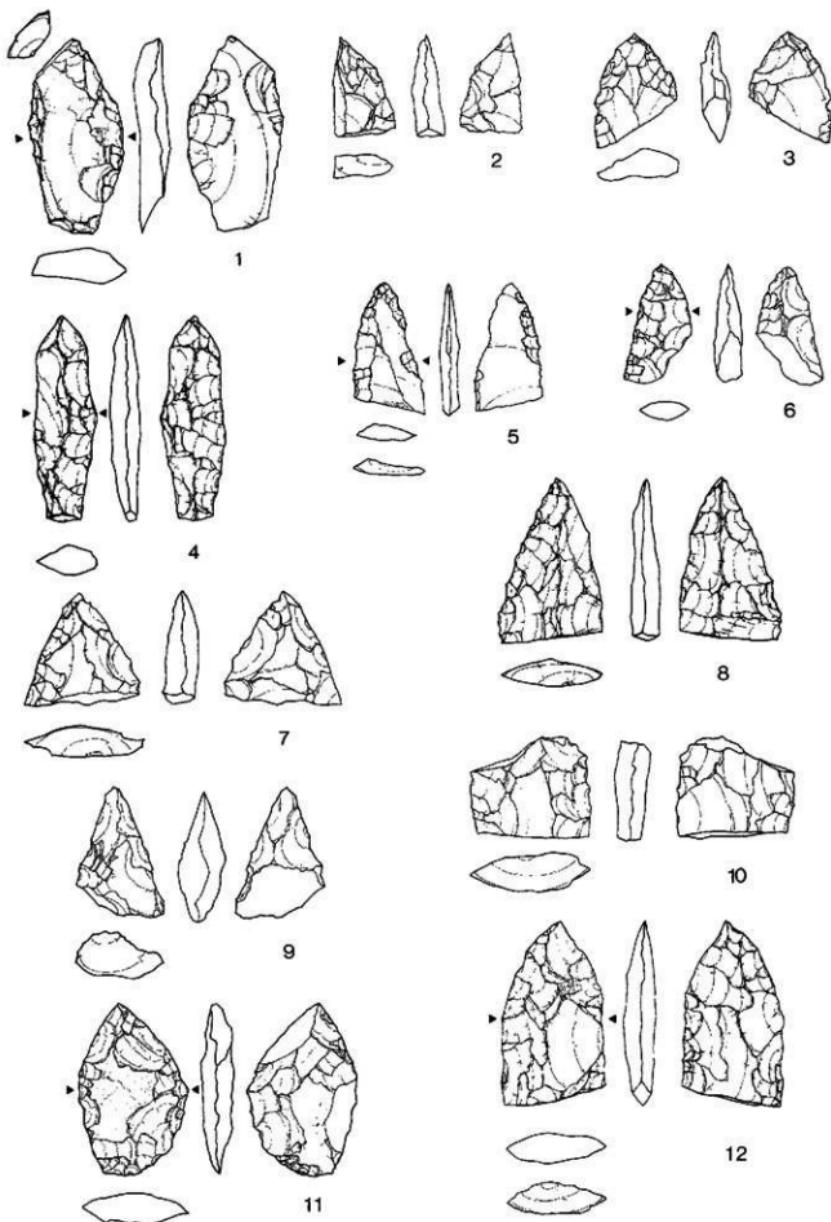
本遺跡では包含層の進存状態の制約から、明確な形で遺物組成を提示することはできなかったが、上述した組成を周辺地域の草創期遺跡の遺物組成と比較した場合、まず興味を引くのが木葉形尖頭器の量的優位と有茎尖頭器、土器の少なさであろう。関東地方西部の神奈川県月見野上野第2地点、慶應大学湘南藤沢キャンパス内遺跡などにみられる出土土器個体の多さ、有茎尖頭器の量的優位と本遺跡の組成は対照的である。遺物組成にみられるこうした差異は、遺物の所属時期や各遺跡での活動内容を反映しての結果であろうが、それとともに中部高地と関東平野などとの、より広域での活動内容の差異（季節的な移動と活動を想定することもできよう）をも反映しているものと思われる。

以上、充分な検討ができないまま考えるとこを記してみた。今後、遺物の組成など、先学諸氏の批判、教示を乞い再検討してみたいと思う。

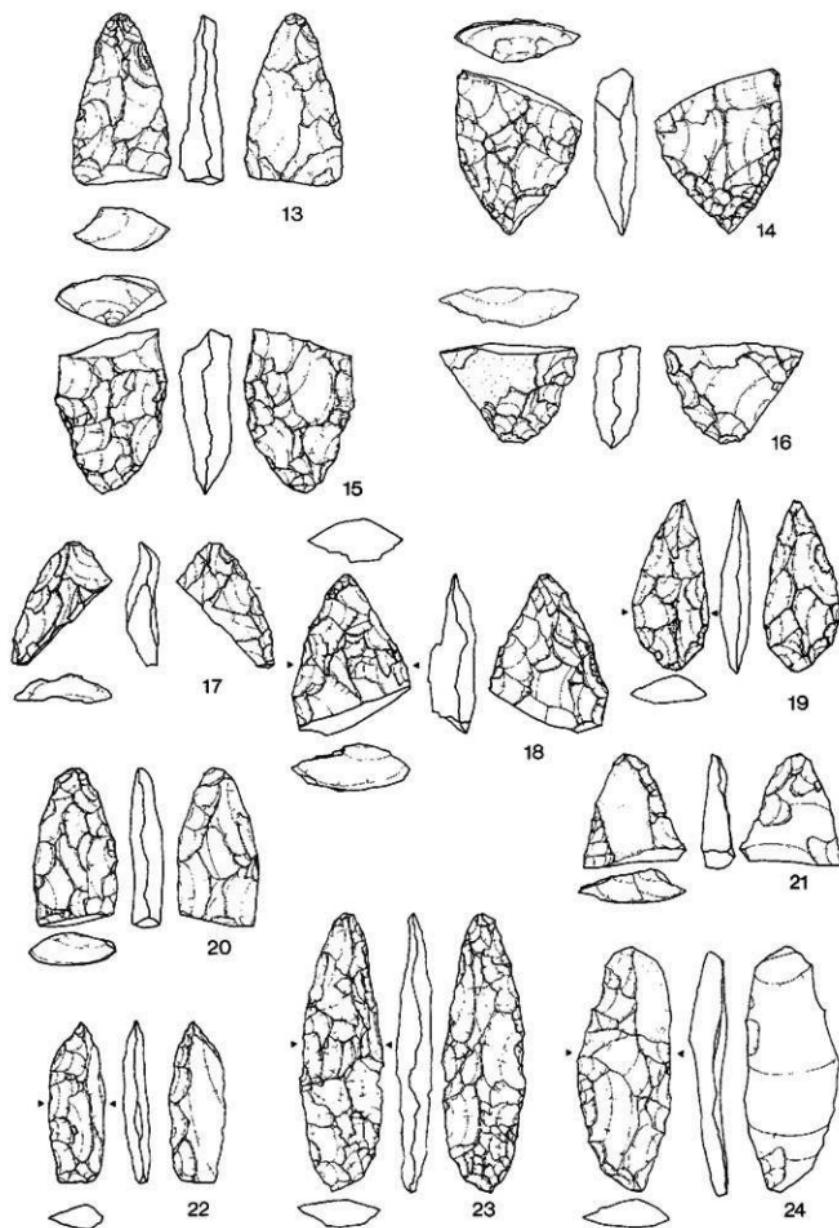
（註） 塩川上流の須玉町江草、増富地内である。山梨文化財研究所横原功一氏の教示により、筆者も知った。横原氏には現地まで案内していただいた。記して感謝したい。

## 引用参考文献

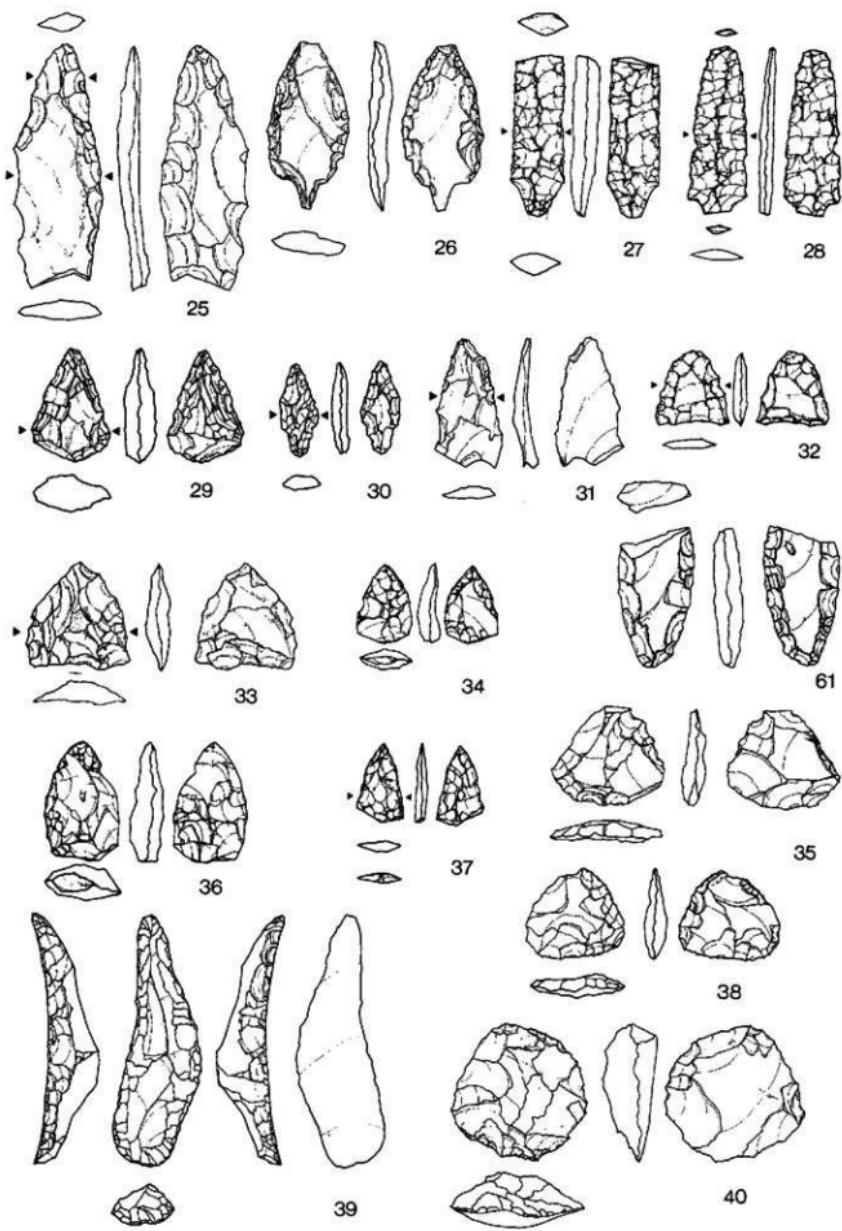
- 麻生順司 1993 「先土器時代終末期から縄文時代草創期初頭にかけての尖頭器文化」『考古論叢神奈川』 2
- 柴島義明 1984 「有茎尖頭器の形式変遷とその伝播」『畿台史学』 62
- 埼玉県教育委員会 1985 「大林 I・II、宮林、下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第50集
- 桜井準也 小林謙一 1992 「湘南藤沢キャンバス内遺跡」第2巻縄文時代I部 延喜義雄藤沢校地埋蔵文化財調査室
- 佐野 隆 加藤博文 小宮山隆 1993 「明野村神取遺跡出土の縄文時代草創期の遺物について」『山梨県考古学協会誌』 6 山梨県考古学協会
- 白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について(1)」『考古学ジャーナル』 126 ニューサイエンス社
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』 東京大学出版会
- 新谷和孝 1993 「長野県お宮の森裏遺跡の縄文時代の集落」『考古学ジャーナル』 362 ニューサイエンス社
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大日本文化研究報告』 第2集
- 戸田哲也 相原俊夫 1984 「月見野上野遺跡第2地点」 月見野上野遺跡調査団
- 中東耕志 1985 「土器出現期における局部磨製石斧の一様相」『群馬県立歴史博物館紀要』 6
- 長野県教育委員会 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1 一岡谷市内」
- 橋口美子 1985 「縄文時代草創期の尖頭器製作について」『東京考古』 3 東京考古談話会
- 森野次史 1991 「土器出現期における槍先形尖頭器製作技術」『先史考古学論集』
- 保坂康夫 1990 「丘の公園第5遺跡」 山梨県教育委員会
- 森嶋 稔 1986 「本州中央部の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』 258 ニューサイエンス社
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X



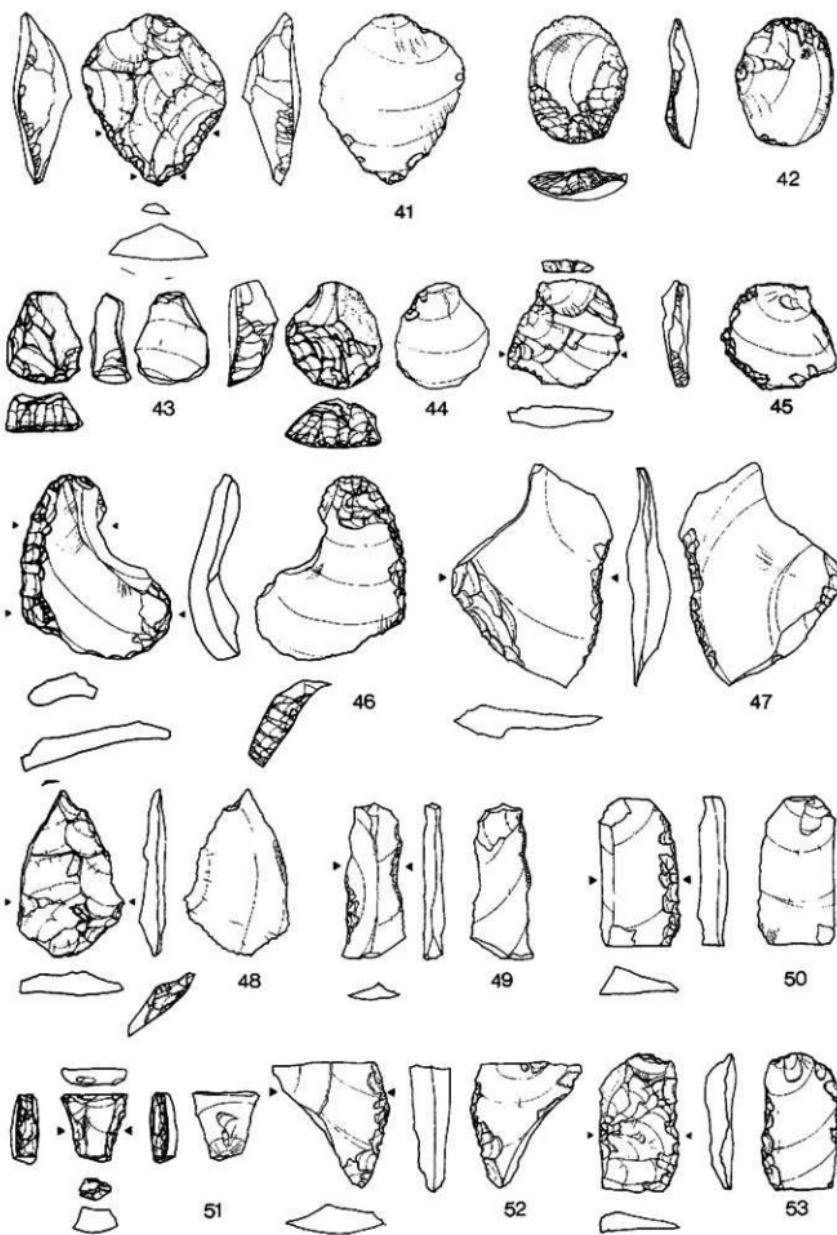
第7図 草創期の石器 (2/3)



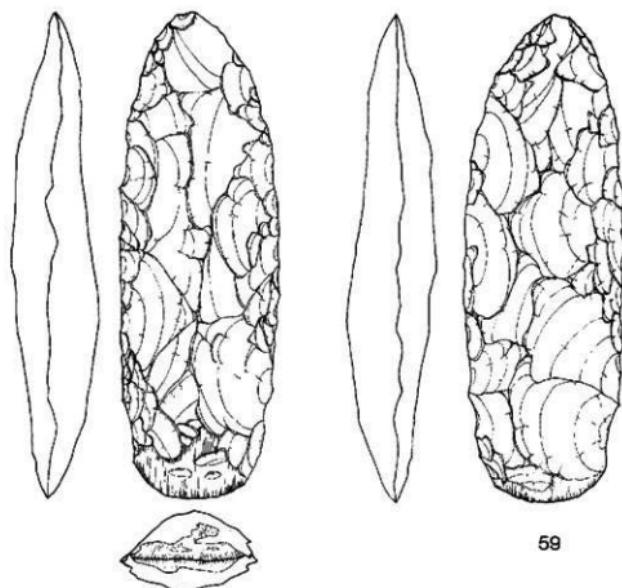
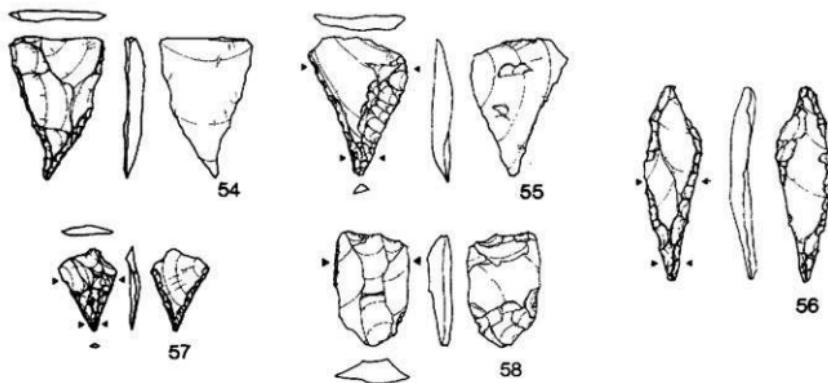
第8図 草創期の石器 (2/3)



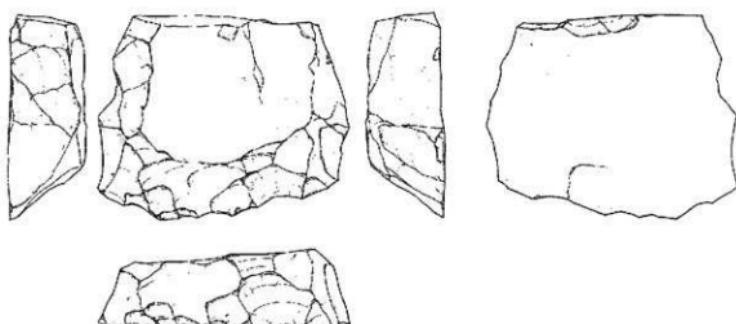
第9図 草創期の石器 (2/3)



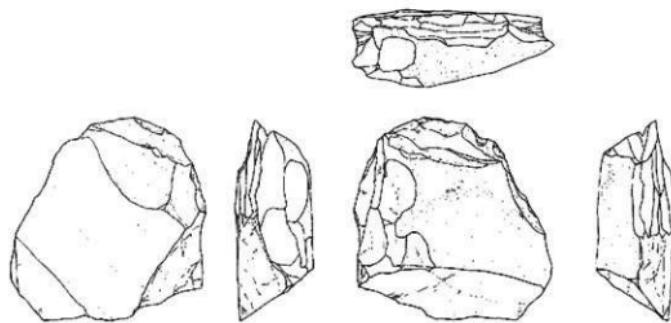
第10図 草創期の石器 (2/3)



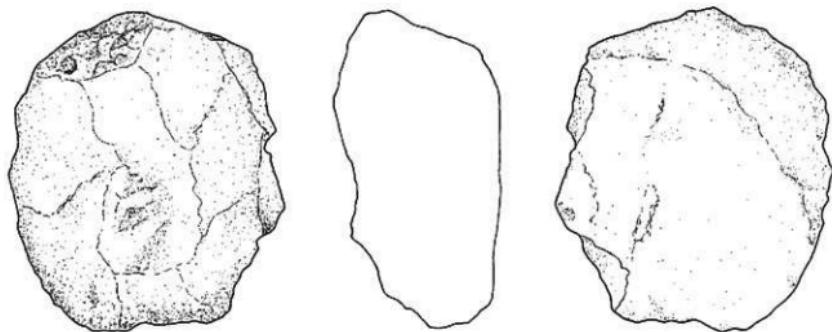
第11図 草創期の石器 (2/3)



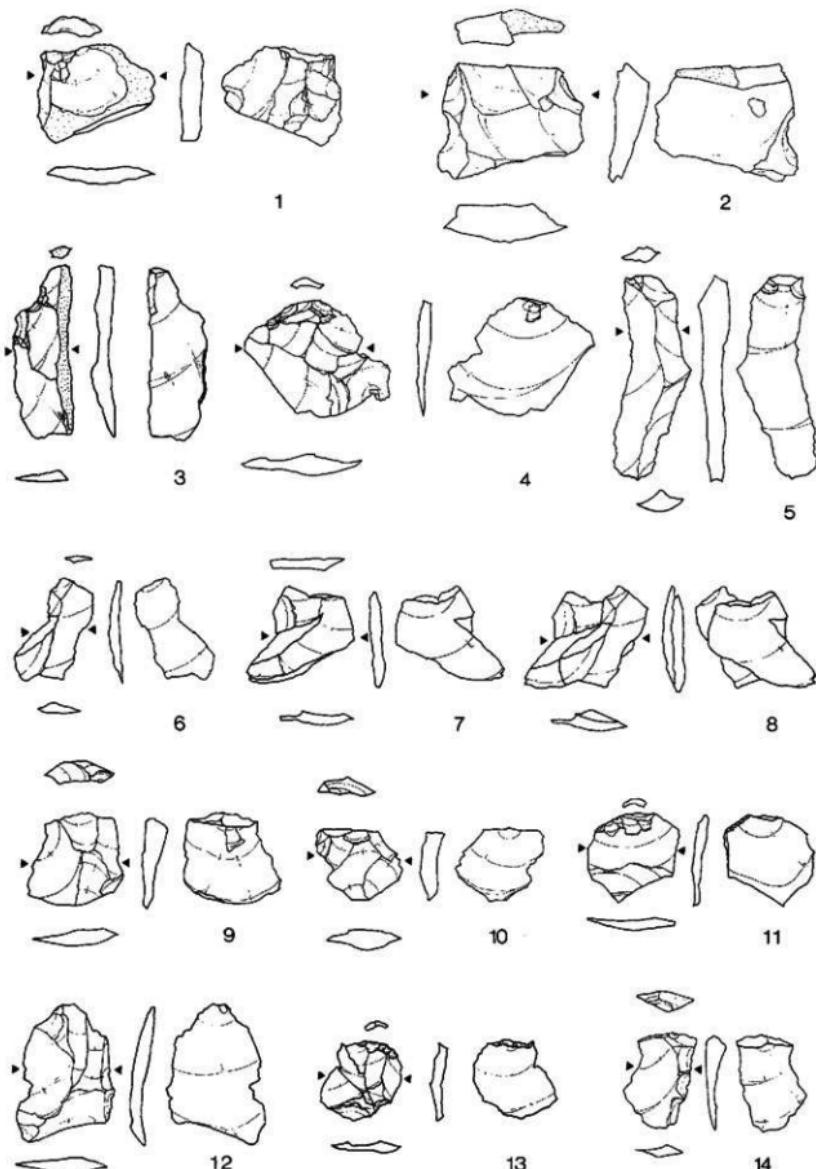
第12図 草創期の石器 (1/2)



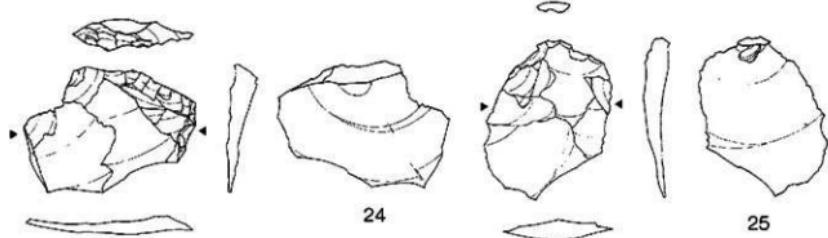
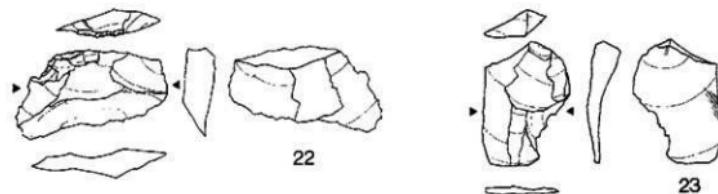
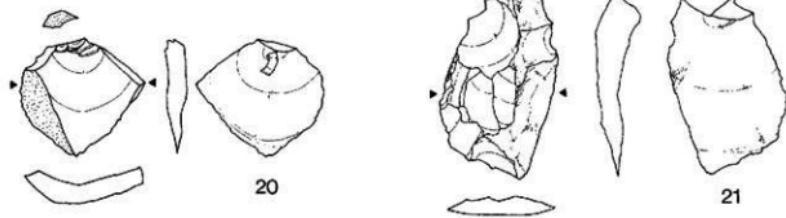
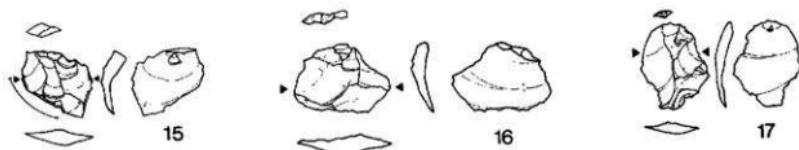
第13図 草創期の石器 (1/2)



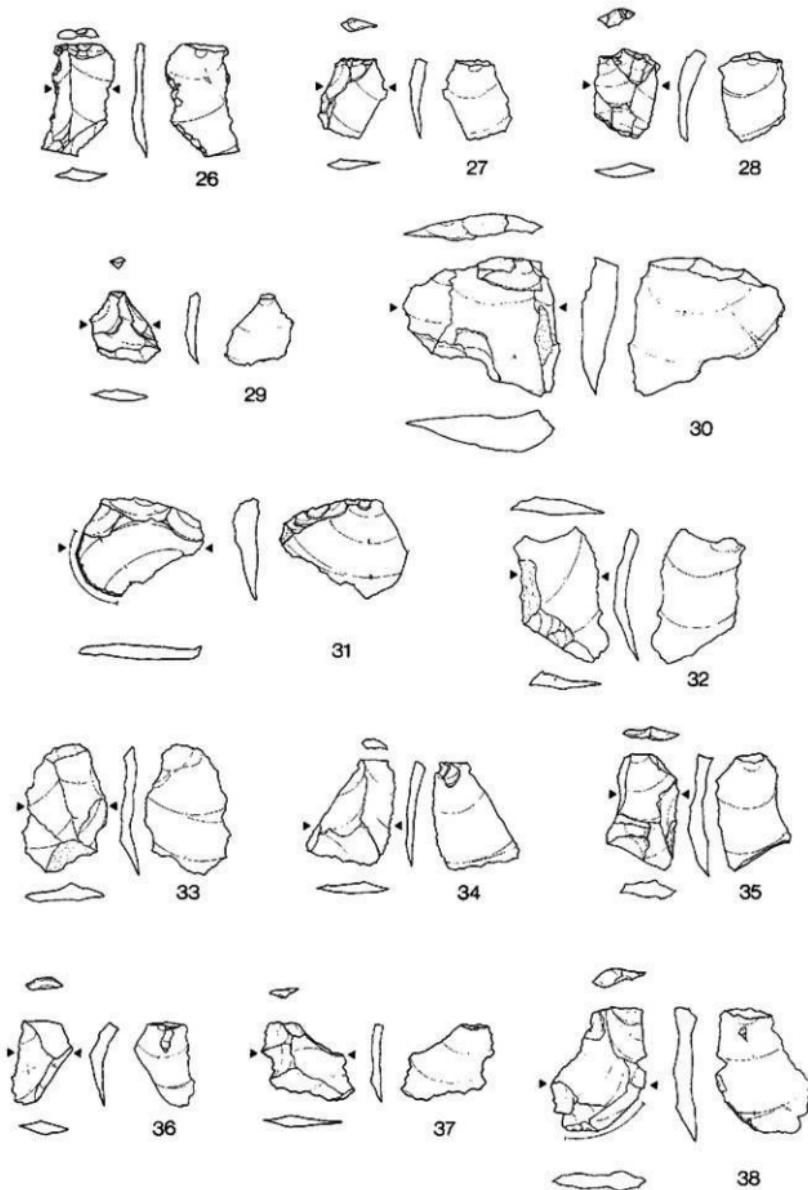
第14図 草創期の石器 (4/5)



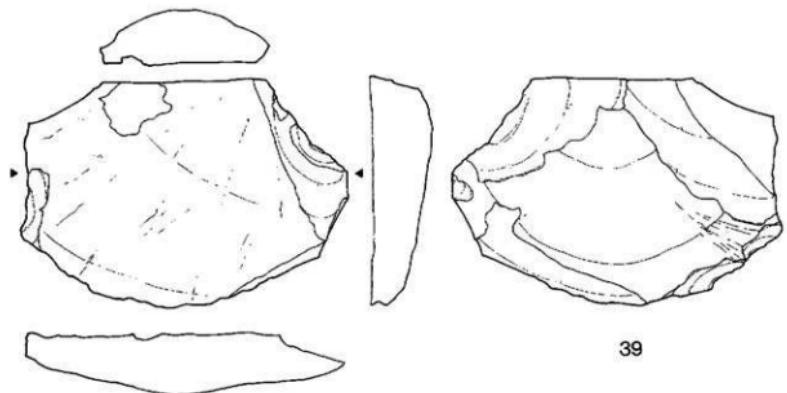
第15図 母岩別資料No. 2 剥片 (2/3)



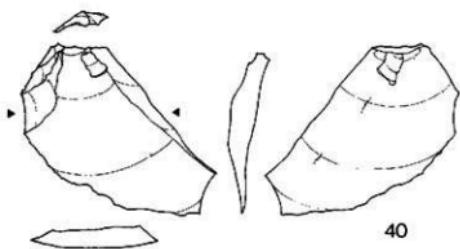
第16図 母岩別資料No.5 剥片 (2/3)



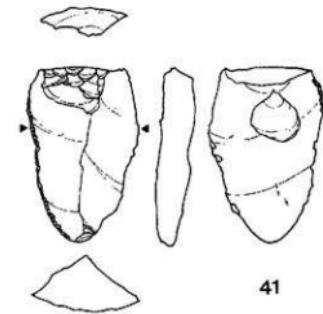
第17図 母岩別資料No.10 剥片 (2/3)



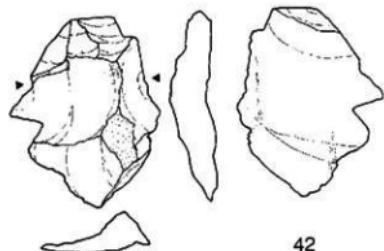
39



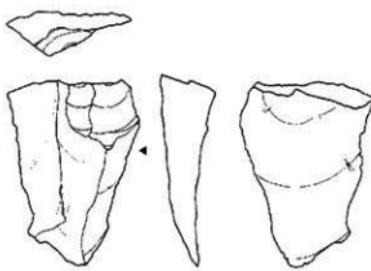
40



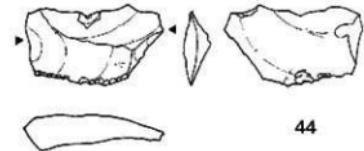
41



42

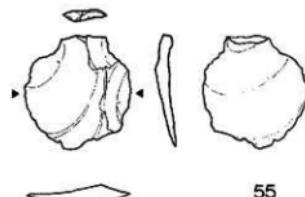
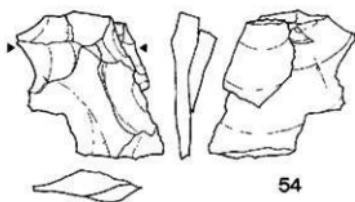
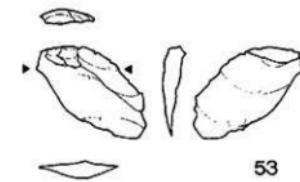
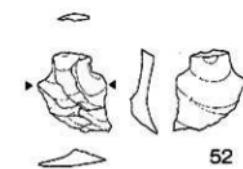
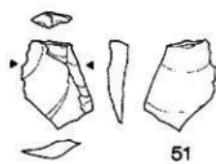
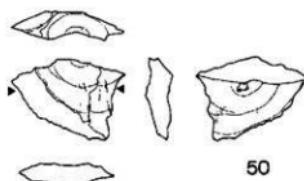
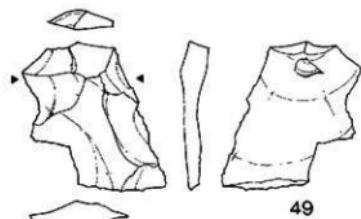
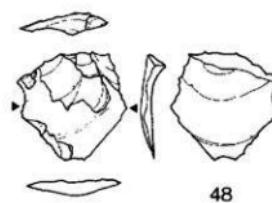
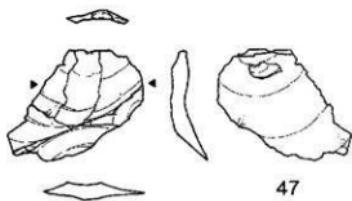
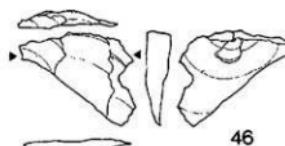
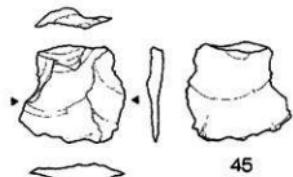


43

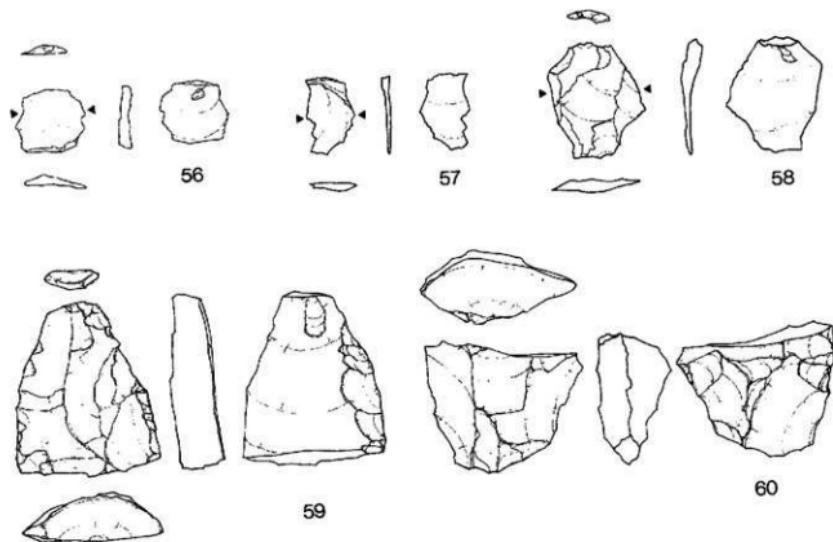


44

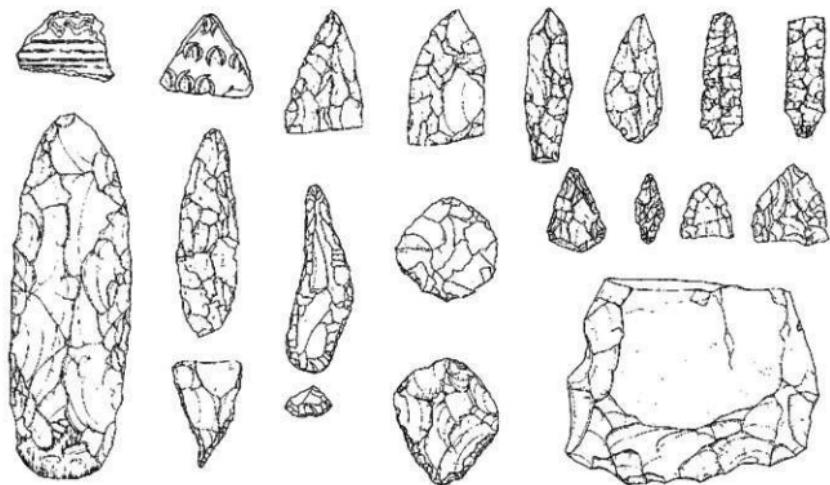
第18図 母岩別資料No.11 削片 (2/3)



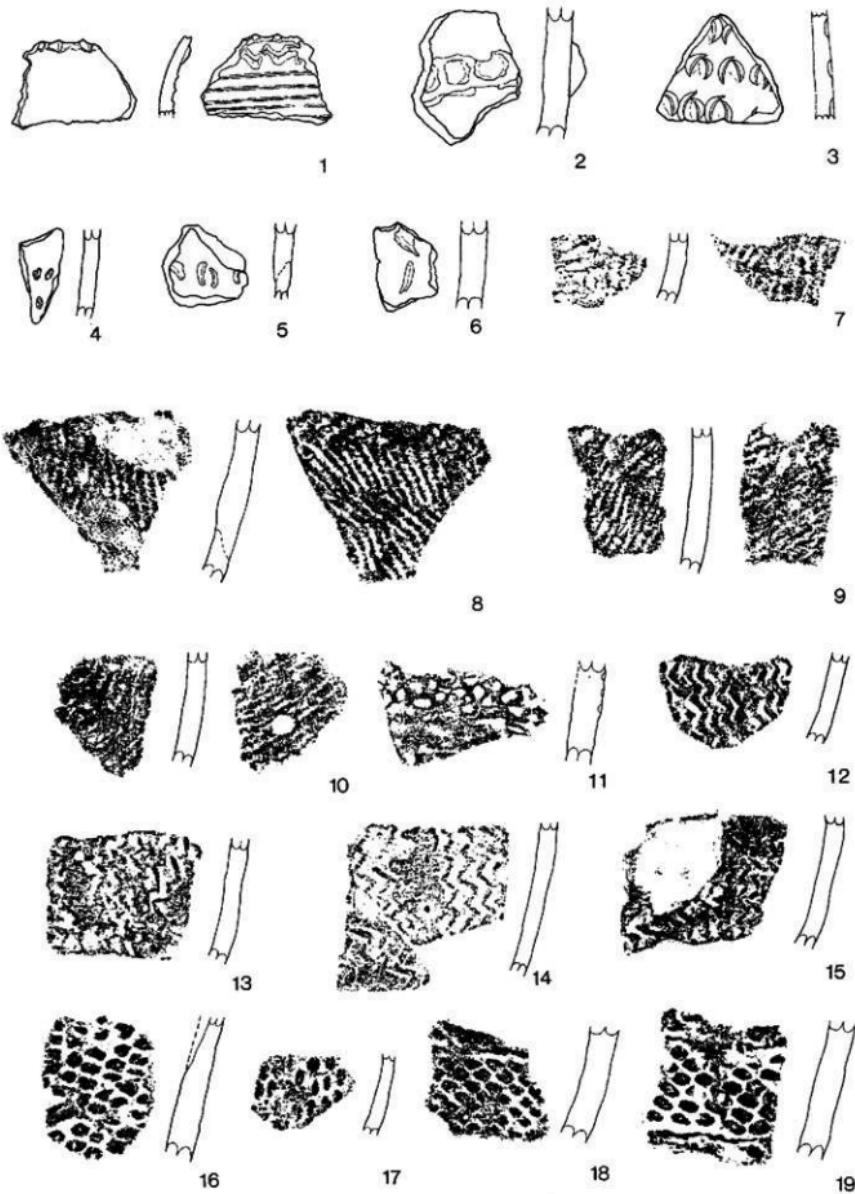
第19図 母岩別資料No.15 剥片 (2/3)



第20図 母岩別資料No.18 剥片 (2/3)



第21図 草創期中葉と想定される遺物群



第22図 草創期～早期の土器 (2/3)

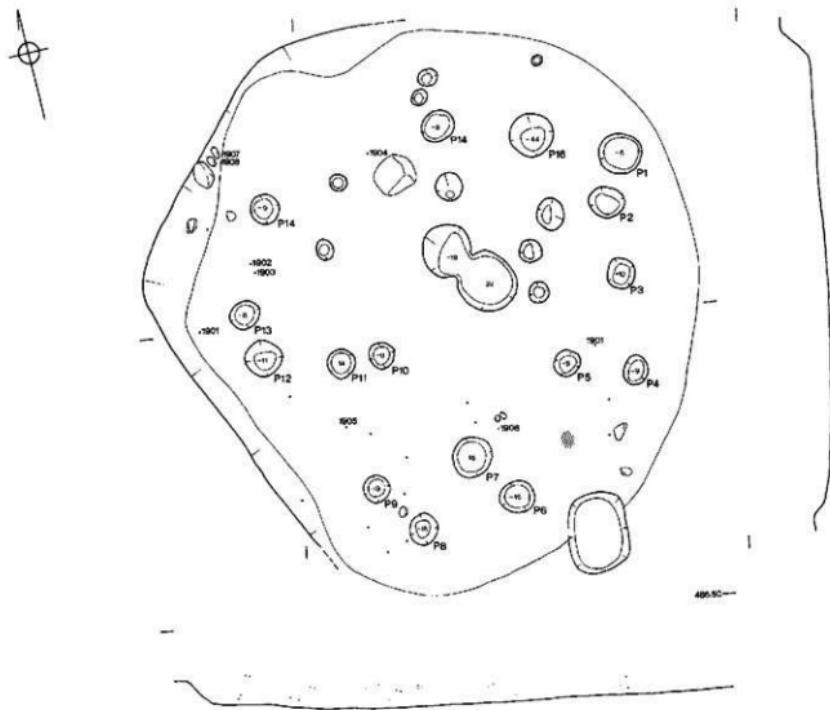
## 第4章 繩文時代の遺構と遺物

本遺跡では草創期の遺物のほかに早期から晩期にいたる遺構、遺物が出土している。ここでは草創期の遺物を除くこれら縄文時代の遺構と遺物を報告する。

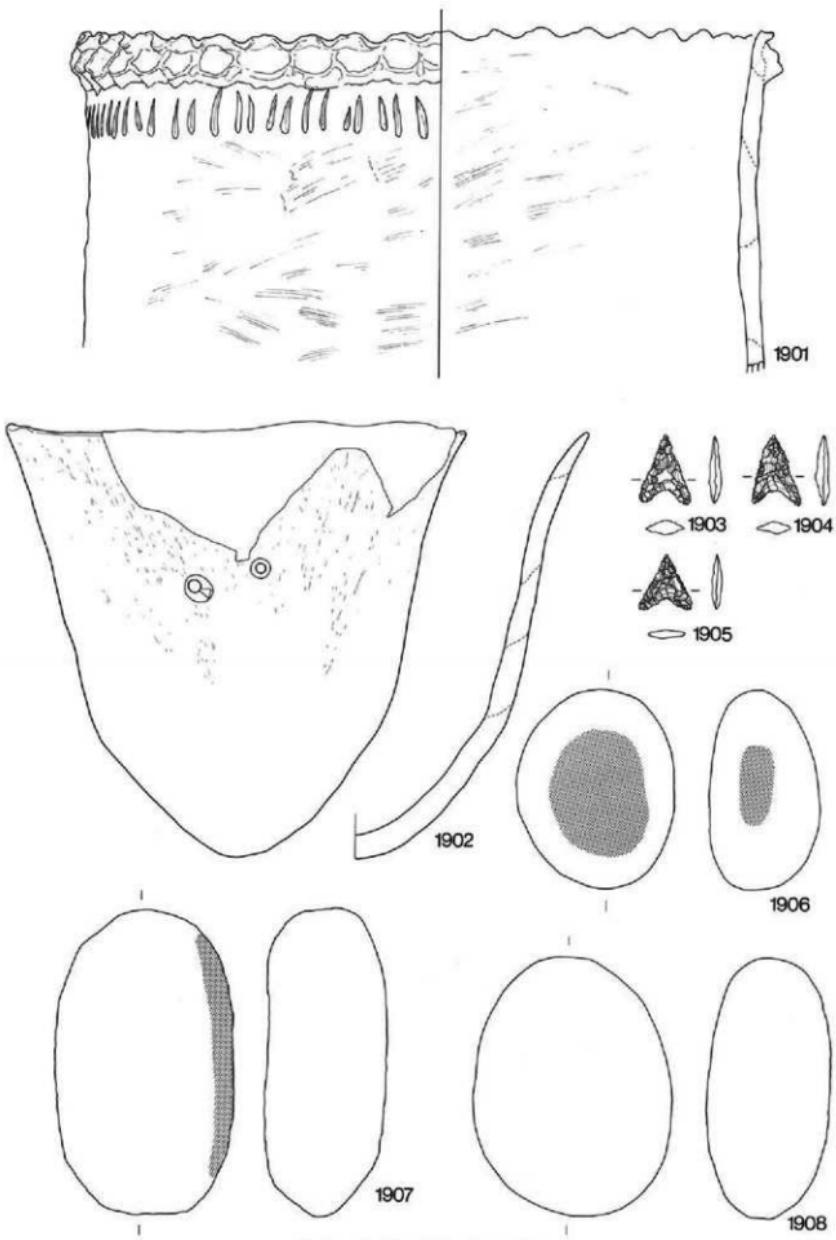
### 1. 縄文時代早期の遺構と遺物

#### 19号居住跡（第23図、第24図、図版10）

遺構の位置と規模 I-11グリッド。4.7m×4.5mの楕円形プラン。遺構の特徴 焼土、床面は検出されなかつた。掘り方は平ではなく、壁沿いに向かって高くなる。多くのピットが検出されたが、主柱穴は位置関係からP



第23図 19号住居跡



第24図 19号住居跡出土遺物 (1/2)

2-P4-P6-P9-P12-P14 P15の7本と思われる。出土遺物 遺物は出土状況から床面と思われる高さを想定して取り上げた。1902は西壁寄りで横倒しになって出土した尖底深鉢で、口径18.8cm、器高17.8cm。右英粒子が混じるざらついた胎土で、纖維が混入している。焼成は不良で土器断面が黒く炭化している。口唇部がとがる不規則な波状口縁で、器面は擦痕がみられる。補修孔が2カ所にある。1901は居住跡内に散在して出土した深鉢で、底部は失われているが底底と思われる。上器上端は指頭圧による細かい波状口縁で、口縁直下には上下から指頭で押された太い隆筋が貼り付けられる。さらにその下には尖った棒状工具による刻みが施される。器面には指およびヘラ状工具による擦痕がみられる。補修孔が残る器片もある。胎土には纖維が多く混入するが、きめが揃った良質胎土で、器面はなめらかである。色調は明黄褐色。1907、1908は居住跡西端で並んで出土した丸石で1908には擦痕はみられないが、片面には全面に敲打痕がみられる。1906は擦石である。1906、1907には擦痕がある（図中アミ目部分）。1903、1904、1905は黒曜石製石器である。1903は1902の尖底深鉢と並んで出土した。このほか19号居住跡からは黒曜石、珪質貝岩の剝片、チップ類が出土している。造構の時期 1901は東海系上の山式ないし入海I式に比定されると思われることから早期木葉と推測される。

#### 遺構外出土遺物（第22図、第25図～第27図、図版11）

19号居住跡があるI-11グリッドを中心として縄文時代早期と思われる土器片が多数出土している。早期沈線文系土器と思われる器片はIII層からも2点出土している。

#### 押型文土器（第22図12～19）

12～15は金色雲母粒子が目だつ胎土で、色調は赤褐色。焼成はやや不良で、山形押型文が縦位に施文される。13、14は胎土質及び原体から同一個体と思われる。16から19は指円押型文が施文される。金色雲母粒子が目だつ胎土で、色調は赤褐色。焼成はやや不良である。16と19は胎土質及び押型文から同一個体と思われる。

#### 沈線文系土器（第26図36～43）

36は口縁部器片で口唇上端および口唇部上面には刺穴による刻みが入る。雲母、長石粒子が混じるざらついた胎土で、色調は暗赤褐色。焼成はやや不良である。37は口縁部器片で、口唇部直下に6本の沈線がめぐりその下には格子状の沈線が施される。やや大きめの長石粒子が目だつ胎土で、器面はなめらかである。色調は黒褐色で、焼成は普通。38は胎土質から37と同一個体と思われる。39には2mm幅の沈線が平行して横走する上を斜めの沈線が施されている。長石粒子が混じる胎土で、色調は暗黄褐色。焼成はやや不良である。40は胎土質から39と同一個体と思われる。41は19号居住跡内床面想定より低い位置で出土した器片で、大きめの長石粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。焼成は普通である。42は多条の細沈線が横走する上に縦方向の幅広沈線が施される。雲母、長石粒子が若干混じる胎土で、色調は暗黄褐色。焼成は普通である。43も42に類似した文様を施される。雲母、長石粒子が目だつざらついた胎土で、色調は暗赤褐色。焼成はやや不良である。以上は文様の特徴、胎土質から早期前半、沈線文系土器群の三戸式に比定されるものと思われる。

#### 条痕文系土器（第25図20～27、第26図31～35）

20は波状口縁の土器片で、口唇上端に刻みが施される。器外面は竹管状工具による押し引きと円形刺突が施される。色調は明黄褐色である。早期条痕文系熱ヶ島台式に比定されると思われる。23から26はいずれも表裏に条痕がみられる土器片で、纖維が含まれる胎土である。26は19号居住跡内床面想定より低い位置から出土した器片で、器外面にLR半節繩文が縦位に施文され、内面に条痕がみられる。いずれも早期条痕文系土器、茅山式に比

定される土器と思われる。31は波状口縁の器片で器外面上には口縁の波状に平行して爪形の刻みが一条めぐり、内面には二条の刻みがめぐる。纖維を多く含み、長石粒子が若干混じる胎土で、色調は灰褐色。焼成は不良である。33は先端を欠いているが口縁部と思われる器片で、器面には条痕があり爪形の刻みが横走する。纖維を若干含み、長石粒子が目だつ胎土で、色調は暗黄褐色。焼成は不良である。器内面に条痕はみられない。32、33は文様の特徴から早期東海系条痕文土器、柏畑式に比定されると思われる。35も爪形の刻みが横走する器片で、纖維を多く含み、長石、石英粒子が目だつ胎土である。色調は暗黄褐色、焼成は不良である。

#### 隆帯文系（第25図25～30）

25は口縁部器片で、口唇上端及び上面に棒状工具を押しつけた刻みが施される。器外面上にはくの字状に貼り付けた2mm幅の細隆線と押し引きによる隆線が施される。器内面は条痕がみられる。纖維を若干含み、鉱物粒子はほとんどみられない胎土で、色調は暗赤褐色。焼成は普通である。28も口縁部器片で1.2mmの幅広隆線を縦に深く刻んだ装飾が口唇直下に施される。纖維を含まず、雲母、長石粒子が混じる胎土で、色調は乳白色。焼成は普通である。器面は磨いたようになめらかである。III層より出土している。30は波状口縁の器片で口唇上端部には爪によると思われる刻みがはいる。波状の口縁に平行するように隆帯が施される。早期隆帯文系神之木台式に比定されると思われる。

#### 無文土器（第26図44～46、第27図47～51）

46から51は早期と思われる無文土器片である。口唇上端が小さな波状になるものが多く、45、46、47のように棒状の工具の先端を押しつけて凹形のくぼみを施したものもある。胎土に纖維を混入するものとそうでないものとがあるが、混入する纖維の量はそう多くない。47は口唇直下に数条の、押し引きによる細い隆線が横走する。同一個体と思われる土器片数点が出土している。以上のお他、L無節縄文の施文を2度繰り返し格子状の文様を施した器片が出土している（第26図44）。纖維は含まれず、長石粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。焼成は普通である。第27図47に似て、纖維を含む条痕文系の上器片と比べると器面がなめらかな良質の胎土である。胎土質から早期の土器片と思われる。

## 2 縄文時代前期～晩期の遺物

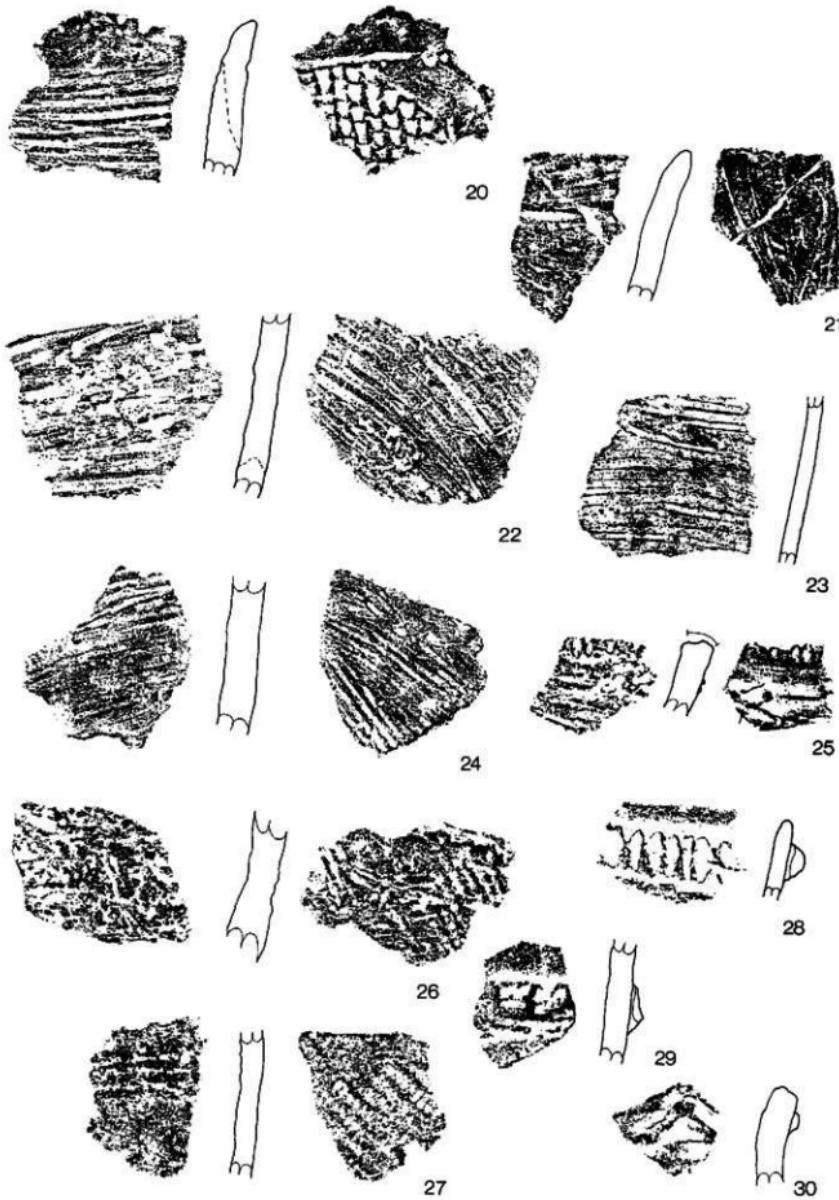
縄文時代前期から晩期にかけての遺構は検出されなかったが、遺物が前期で2点、中期で8点、後期で8点、晩期で3点出土している。

#### 前期（第27図52、53）

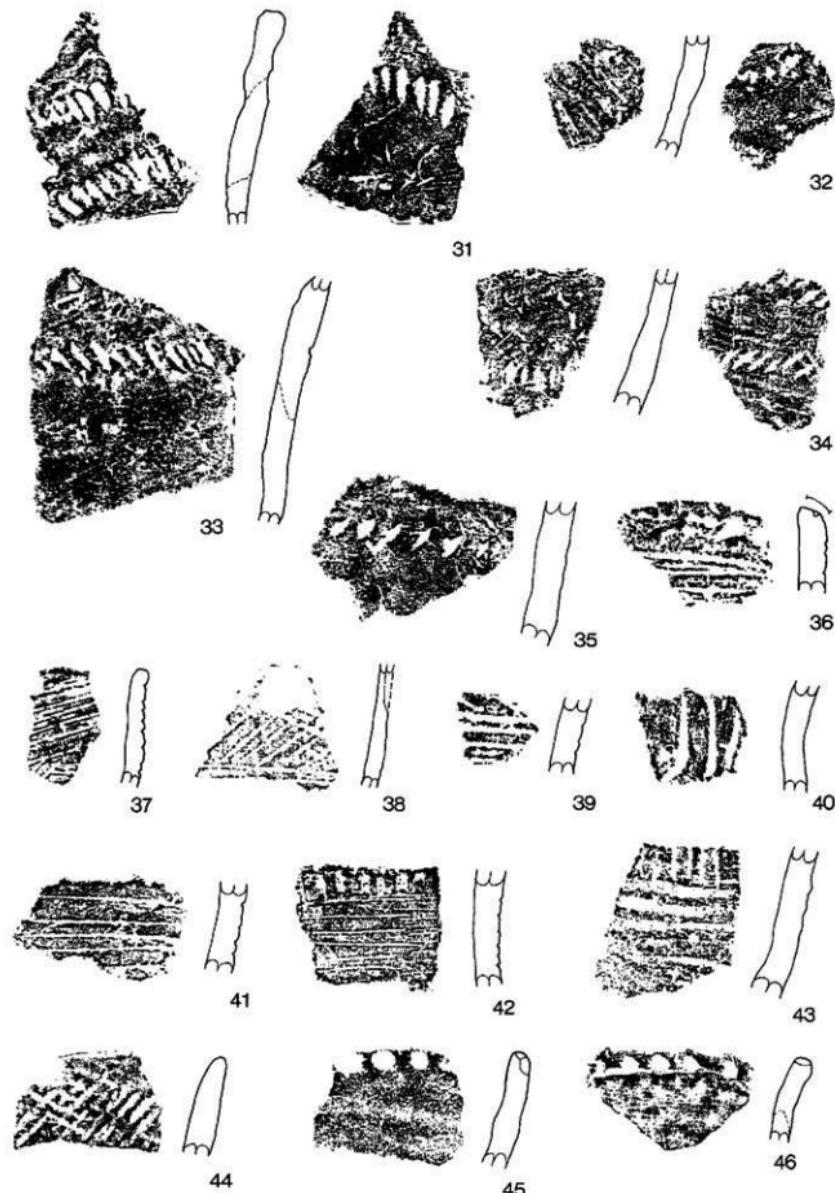
52は波状口縁の土器片で、口唇上面（図中I部）に○形の粘土紐を貼付けた装飾がある。口唇直下の器面には浮縫文が施されている。金色雲母、長石、石英粒子が多く混じるざらついた胎土で、色調は暗赤褐色。焼成は普通。前期後半諸縄文式に比定される。53は羽状沈線にボタン状貼付け文が施される器片で、長石、雲母粒子が混じる胎土。色調は黄褐色、焼成は普通である。前期後半諸縄文式に比定される。

#### 中期（第27図54～60、第28図）

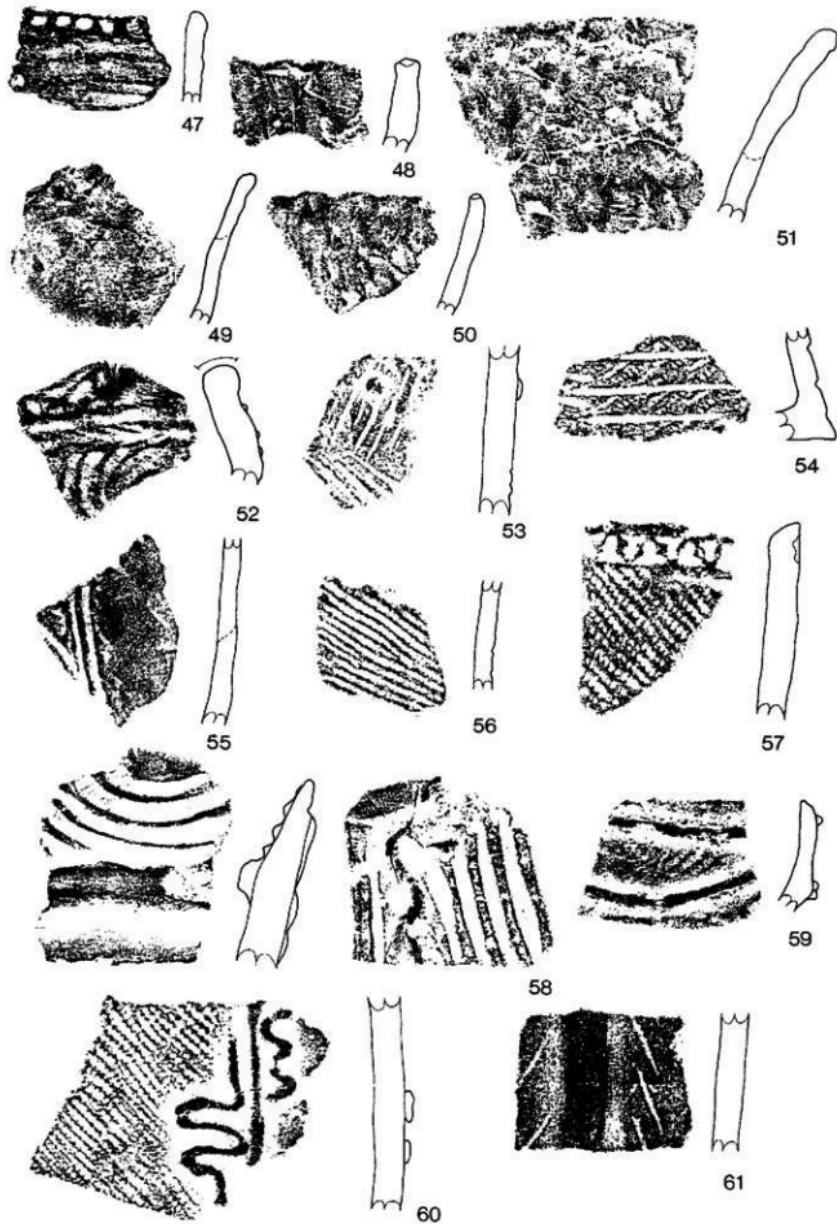
54は底部器片で、RL単節縄文を施文したあと沈線をめぐらせており。金色雲母、長石、石英粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。焼成は普通である。55は金色雲母粒子がよく目だつ胎土質の器片で、沈線による文様が施さ



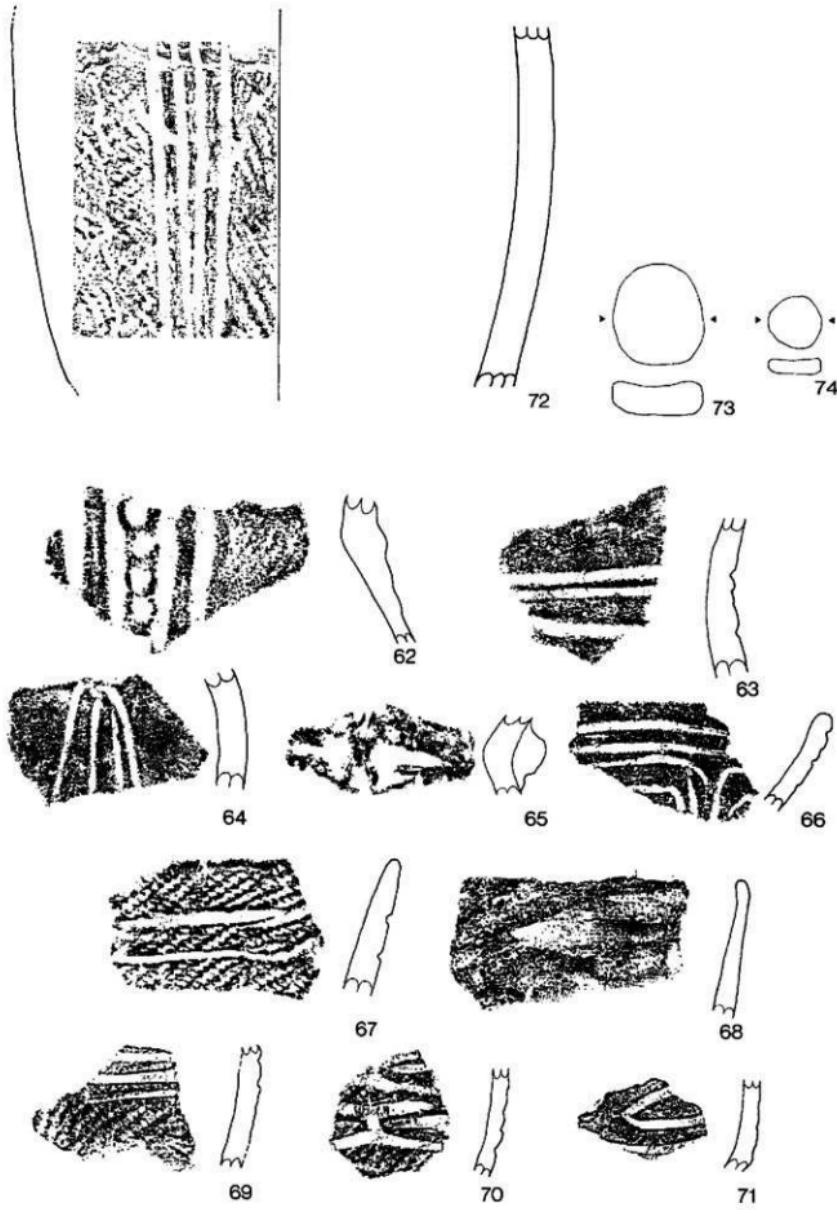
第25図 早期の土器 (2/3)



第26図 早期の土器 (2/3)



第27図 早期～中期の土器 (2/3)



第28図 中期～晩期の土器 (2/3)

れる。色調は暗赤褐色、焼成は普通である。56はRL単節縄文を横位に施文した器片で、長石、金色雲母の微細な粒子が混じる胎土である。色調は暗赤褐色で、焼成は普通。54から56は胎土質、文様から中期初頭五領ヶ台式に比定されると思われる。57は口縁部器片で、口縁部上端にはT字状のスタンプ文が横位に施されている。長石粒子を多く含む胎土で、色調は赤褐色。焼成はやや不良。中期中葉の上器片と思われる。58から60および第28図72は中期後半曾利式の土器片である。そのほか中期と思われる土製円盤2点が出土している（第28図73、74）。

#### 後期（第28図62～68）

62と63は胎土質から同一個体と思われる上器片である。沈線と竹箒の押し引きが施される。砂粒が混じるざらついた胎土で、色調は黄褐色、焼成はやや不良である。65は頸部の器片で、8の字状の把手がつく。ざらついた胎土で、色調は黒褐色。焼成は普通である。64は胎土質から65と同一個体と思われる器片である。幅広で浅い沈線が施される。66は口縁部器片で沈線による文様が施される。砂が混じるざらついた胎土で、色調は黄褐色。焼成は普通である。器面は赤彩されていたようである。67はRL単節縄文を縱位施文した土器片で、長石粒子が混じる胎土質である。色調は暗黄褐色、焼成は普通である。68は無地上器の口縁部器片である。長石粒子を多く含む胎土で、色調は暗褐色。焼成は普通。62から66は後期前半期之内I式、68も後期前半に属するものと思われる。（註）

#### 晩期（第28図69～71）

69はRL単節縄文を縱位施文した地文に幅広の沈線が施された器片で、器面は磨かれている。砂粒が混じる胎土で、色調は暗黄褐色。焼成は普通である。70はRL単節縄文を縱位施文した地文に変形L字状の沈線を施した器片で、胎土質から69と同一個体と思われる。器面は風化が進んでいるが、磨かれているらしい。71は幅広沈線による文様が施された器片で、砂が混じる胎土質である。色調は暗黄灰色だが、器面裏面に赤彩が施される。いずれも小器片であるため判断し難いが、晩期末葉に属すると思われる。

### 3 縄文時代の石器類

ここでは母岩別分類が困難な黒曜石製石器についてまとめて報告する。形態上、草創期に含めてもよいと思われる石鏃、搔器などもあるが、出土状態の制約からここではあえて草創期に分類しなかった。

#### 石 鏃（第29図1～第31図102）

出土した石鏃は102点である。剥離の状態から製品と未製品とに分類し、さらに形態から有茎石鏃、平基無茎石鏃、深く抉れる凹基無茎石鏃、尖頭器先端部の可能性があるものなどを分け図示した。1から43までが製品、44から102までが未製品である。分類の基準は厳密ではなく観察の印象にすぎず、取り違えもあるため表中観察所見で訂正した。

#### 石鏃一覧表

番号	寸法(現行及、軸 径、重さ) 基本形	観察所見・出土位置	寸法(現行及、軸 径、重さ) 基本形		観察所見・出土位置
			基	軸	
1	25.17.4.5.1.4	有茎石鏃 草創期の有茎尖頭器か H-5グリッド	8	15.14.2.0.0.3	平基無茎石鏃 L-1グリッド
2	26.13.4.0.1.0	有茎石鏃 1と同様、草創期小形有茎尖頭器か 21号茎先端	9	18.16.5.0.0.8	平基無茎石鏃 E-6グリッド
3	16.11.3.0.0.4	先端部分で基部は欠損 出土位置不明	10	16.16.5.0.0.9	平基無茎石鏃 17号茎先端上
4	19.13.6.0.1.0	平基無茎石鏃 F-5グリッド	11	19.15.7.0.1.5	平基無茎石鏃 出1:住處-小明
5	18.12.4.0.0.7	先端部分で基部は欠損 H-5グリッド	12	20.15.5.0.1.4	平基無茎石鏃 田園
6	13.9.1.0.0.2	先端部分で基部は欠損 H-7斜面不規	13	22.12.5.8.1.0	T型基無茎石鏃 G-8グリッド
7	13.9.5.3.0.0.3	先端部分で基部は欠損 H-8斜面不規	14	14.11.2.5.0.3	圓底基無茎石鏃 田園
			15	11.13.3.0.0.4	圓底基無茎石鏃 E-1グリッド
			16	11.12.3.0.0.4	圓底基無茎石鏃 G-7グリッド

14.	14.5.3.5.0.5	基盤無塗布板	R-グリッド
17.	15.4.5.0.6.5	基盤無塗布板	10号仕様
19.	15.4.5.3.6.0.5	基盤無塗布板	34号仕様
20.	15.4.5.6.0.6.5	基盤無塗布板	出荷位置不明
21.	15.5.6.1.1.0	基盤無塗布板	3号仕様
22.	20.4.5.4.3.3	基盤無塗布板	10号仕様
23.	15.5.6.0.4.4	基盤無塗布板	10号仕様
24.	15.5.5.3.5.5.5	基盤無塗布板	法1仕様不明
25.	17.14.9.4.9.5	基盤無塗布板	F-グリッド
26.	17.13.4.8.0.5	基盤無塗布板	出荷位置不明
27.	21.13.3.3.0.6	基盤無塗布板	12号仕様
28.	8.9.5.3.0.0.4	基盤無塗布板基盤	C-グリッド
29.	15.14.5.4.0.0.8	基盤無塗布板	10号仕様
30.	22.13.3.5.0.7	基盤無塗布板	G-グリッド
31.	15.13.4.4.0.4	基盤無塗布板	F-グリッド
32.	15.13.4.4.0.4	基盤無塗布板	F-グリッド
33.	20.13.5.4.0.6.8	基盤無塗布板	I-12グリッド
34.	19.15.6.0.4.6.8	基盤無塗布板	I-12グリッド
35.	18.14.3.6.0.6.4	基盤無塗布板	G-6グリッド
36.	21.14.4.0.0.8	基盤無塗布板	E-グリッド
37.	23.12.4.5.0.8	基盤無塗布板	G-6グリッド
38.	20.13.4.9.0.5	基盤無塗布板	G-7グリッド
39.	1.16.5.4.0.9.0.5	回路基板高密度	7グリッド
40.	22.14.4.4.0.9.9	回路基板高密度	W-グリッド
41.	15.13.4.4.0.4	回路基板高密度	W-グリッド
42.	11.7.2.9.0.2	光沢部	ナラ仕様
43.	18.10.4.0.0.4	光沢部	ナラ仕様
44.	14.30.5.1.0.0.4	光沢部	G-6グリッド
45.	17.13.5.3.5.0.5	光沢部	1-9グリッド
46.	14.13.3.0.0.5	光沢部	基盤無塗布板と思われる
47.	14.16.5.5.5.1.1	光沢部	F-グリッド
48.	23.13.5.5.6.0.9	基盤無塗布板	H-8グリッド
49.	16.15.3.0.0.7	基盤無塗布板	H-8グリッド
50.	9.15.20.0.0.5	基盤無塗布板	E-グリッド
51.	15.17.3.5.5.9	印刷	上位位置不明
52.	19.11.6.5.1.8	印刷	移転部に黒い点がある
53.	22.14.5.0.1.1	印刷	ナラ仕様
54.	18.17.4.5.1.1	印刷	ナラ仕様
55.	20.11.5.5.1.1	印刷	ナラ仕様
56.	21.15.6.0.1.4	基盤部	ナラ仕様
57.	21.18.4.5.1.5	石墨製品	離型保護シート
58.	24.17.5.0.1.4	石墨製品	E-6グリッド
59.	22.19.5.6.0.2.2	石墨製品	離型保護シート
60.	20.26.7.5.0.2.2	石墨製品	E-7グリッド
61.	23.19.7.5.0.2.2	石墨製品	離型保護シート
62.	23.17.5.5.4	石墨製品	E-6グリッド
63.	36.25.20.0.2.5	石墨製品	G-6グリッド

61	28,21,8,0,3,3	右脇基盤か 基盤穴公差 小野軒アルマの可能性あり 12分位数上
65	21,13,4,5,0,2	左基盤無し時 製品のみ回路測定が終わっている C-2リード
66	17,15,6,0,1,2	半基盤無し左基盤品か F-11グリッド
67	16,15,6,0,1,2	半基盤無し左基盤品か 3号位数上
68	14,15,5,0,1,2	半基盤無し左基盤品か F-6グリッド
69	22,18,5,0,9,9	半基盤無し左基盤品 H-9グリッド
70	18,16,5,0,1,0	半基盤無し左基盤品 出位不良不規
71	19,11,3,0,0,5	左基盤無し左基盤品か
72	16,14,4,0,0,7	かなり薄いのでたぶん成膜と思われる 半基盤無し左基盤品 F-7グリッド
73	21,16,5,3,1,5	半基盤無し左基盤品
74	20,16,5,3,1,5	半基盤無し左基盤品 H-12グリッド
75	22,16,5,0,1,1	半基盤無し左基盤品 H-13グリッド
76	22,16,5,3,0,9	半基盤無し左基盤品 D-10グリッド
77	22,17,5,6,5,2,3	半基盤無し左基盤品 14号位数上
78	18,20,7,7,2,4	半基盤無し左基盤品 I-8グリッド
79	11,23,3,C,6,5	半基盤無し左基盤品 残端欠陥
80	11,23,4,0,1,1	成膜品の状態と思われる 11号位数
81	18,15,6,0,1,3	半基盤無し左基盤品 残端欠陥
82	26,19,5,5,0,0	成膜品の状態か 12号位数上
83	18,5,5,6,4,5,1,1	基盤無し左基盤品 出位不良不明
84	19,15,6,0,1,6	左基盤無し左基盤品 出位不良不明
85	17,17,5,0,1,6	半基盤無し左基盤品 離部欠陥 H-12グリッド
86	22,17,5,8,5,2,5	左基盤無し左基盤品 残端欠陥 I-11グリッド
87	27,16,5,4,0,9	左基盤無し左基盤品 F-7グリッド
88	26,19,17,7,5,3,0	左基盤無し左基盤品 H-10グリッド
89	22,25,20,3,0,0,9	左基盤無し左基盤品 A-6グリッド
90	26,19,3,5,1,8	左基盤無し左基盤品 調整がまだ早い F-7
91	28,21,10,4,5	右離部未品か 小形化成膜の可能性あり J-9号
92	11,14,3,5,0,4	左基盤無し左基盤品 部品部欠
93	9,13,3,0,0,4	成膜品と思われる F-7グリッド
94	14,16,3,0,3,C,3	基盤無し左基盤品 離部欠陥
95	14,9,2,5,0,3	成膜品と思われる C-3グリッド
97	17,5,12,2,5,0,4	左基盤無し左基盤品 残端品 G-6グリッド
93	23,13,4,0,1,0	半基盤無し左基盤品 成膜品と思われる
95	23,16,8,0,1,16	左基盤無し左基盤品 F-7グリッド
99	31,19,5,5,1,7	左基盤無し左基盤品 ショートのため成膜品と思われる 出位不良無
100	21,19,5,4,5,0,9	左基盤無し左基盤品 G-6グリッド
101	17,5,16,5,0,0,7	左基盤無し左基盤品 G-6グリッド
102	23,25,5,9,0,3,8	早期割れや変形などにともなう可能性あり 21号位数上

103 17.9.7.5.2.4 小鳥の海胆状様  
うものと思われ

164	20,23,4.5.1.3	古材を残す、 リビングリッド
165	17,15.8.6.1.7	小型専用の折掛式 車輪式充電式土器 なども利用があると思われる 形状が空っぽでないのが特徴と思われる
166	18.5,10.5,4.0.4.0	鉄筋封頭に壁板を加えた割合が多いと思われる リビングリッド
167	20,19.8.6.2.6	鉄筋封頭などと思われる リビングリッド
168	23,19.8.3.3	鉄筋封頭 リビングリッド
169	19,14.4.0.1.3	木造構造 リビングリッド

113	20.3, 22.5, 0.1, 7	後部 G-7グリッド
114	22.5, 5.5, 1.2	前部 G-7グリッド
115	-7.16, 3.5, 0.9	前部 D-2グリッド
116	24.17, 6.0, 1.9	後部 G-7グリッド
117	19.47, 6.5, 1.1	前部 G-7グリッド 上部車体不明
118	22.5, 5.5, 1.0	前部 G-7グリッド
119	27.20, 3.5, 0.9	前部 22号機底
20	30.14, 6.0, 1.9	前部 33号機上
21	34.14, 5.5, 2.0	前部 1号床正面 I.

22 28.13.1.0.1.1 石峰

#### 使用率のある例片（第22回124—142）

126 | 30.17.20.25

126	25, 23, -0, 4, 4	取り一ダグリッド 取り一ダグリッド
127	33, 3, 19, 10, 4, 3	吸盤に簡便による剥離がある H-8ダグリッド
128	42, 27, 8, 6, 5, 8	部器として使用されると思われる 脱離は不規則
129	22, 17, 3, 0, 1, 2	不規則な剥離感と思われる剥離が全周にみられる 山岳侵食不規則
130	25, 15, 10, 32, 2, 7	8分作面山岳
131	25, 21, 7, 0, 3, 9	吸盤による簡便がある 両端に小規則剥離が みられる    6ダグリッド

135	23.5,3.1,3.1,1.8	土成 石成木製品のような別物がある F-6グリッド
136	19.18,5.6,6.1,2	右側かもしない F-6グリッド
137	21.5,30.5,5.1,1	左側かも知れぬ F-6グリッド
138	14.15,5.1,5.5,0.4	左側かも知れぬ F-6グリッド
139	25.20,9.5,5.3	左側かも知れぬ F-6グリッド
140	8.22,5.5,1.6	左側かも知れぬ F-6グリッド
141	22.15,5.0,5.8	左側かも知れぬ F-6グリッド
142	14.19,4.5,1.0	左側かも知れぬ F-6グリッド

### その他の石器（第34図1～7、第35図）

1は砂岩製の敲き石で、両先端部には僅かだが、敲打痕がみられる（図中H部）。長さ15.1cm、幅4.3cm、厚さ2.3cmである。I-11グリッド出土。2は粘板岩製の縦長2.6cm、幅6.9cm、厚さ0.5cm。背面右端には擦痕がみられる。上端は欠損している。出土位置不明。3は珪質頁岩製で、母岩別資料NO.2、1段階の剥片を素材としている。背面には節理による割れ面がある。石材は、草創期の尖頭器製作の際の剥片であるが、石器自体は形態から早期ないし前期に属すると思われる。縦長3.5cm、幅4.7cm、厚さ0.6cm。出土位置不明。4は安山岩製で、縦長2.9cm、幅5.6cm、厚さ0.7cm。出土位置不明。5は砂岩質ホルンフェルス製の打製石斧で、長さ12.6cm、幅4.7cm、厚さ2.6cm。出土位置不明。6は粘板岩製の靴べら形石器で、長さ7.7cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。両面は研磨されたような擦痕がみられる。7は小型の磨製石斧で、砂岩製と思われる。長さ4.4cm、最大幅2.8cm、厚さ1.5cm。H-6グリッド出土。厚手で、所属する時期は縄文時代ではない可能性もあるが、ここに報告する。

第35図は石錐である。1は幅4.1cm、扶部長は3.9cm、厚さ1.1cm。軽石製である。F-6グリッド出土。2は安山岩製で幅4cm、扶部長は3.9cm、厚さ1.6cm。出土位置不明。两者とも縄文時代に属するものか定かでないが、ここに報告する。

## 4まとめ

本遺跡には縄文時代早期前半押型文土器期から晩期までの土器片と石器が出土している。それぞれの時期によりその活動内容は異なるであろうが、打製石斧1点、石匙3点などを別にすれば石錐と剥片石器が主体であり、住居跡がある早期木葉を除くと基本的に狩猟の際の一時的な住居地として利用された土地と思われる。

出土石器のうち、拇指状搔器は草創期に特徴的な形態の石器であり、小型のものは表裏縄文土器にともなう可能性が高いと思われる。石錐については早期押型文土器にともなう特徴的な長脚の凹基無茎石錐（第29図34）、草創期から早期前半によくみられる三角形の無茎石錐（第29図8など）などがある。ここではこまかなる形態分類を行わなかったが、大きさ、形態の分類によりある程度の時期推定が可能と思われる。

本県では糸田堂遺跡で早期末葉から前期初頭の集落が調査されているが、それ以前の住居跡はあまり知られていない。山梨県内では早期木葉の条痕文系土器期に竪穴住居跡をともなう定着的な生活様式が普及してくることを反映しているのであろう。本遺跡でも19号住居跡が検出されており、早期末葉の土器片は他の時期と比較して多い。そのことから推測すると早期末葉以外の時期は、遺構を残すような遺跡利用の形態ではなかったということもなろう。

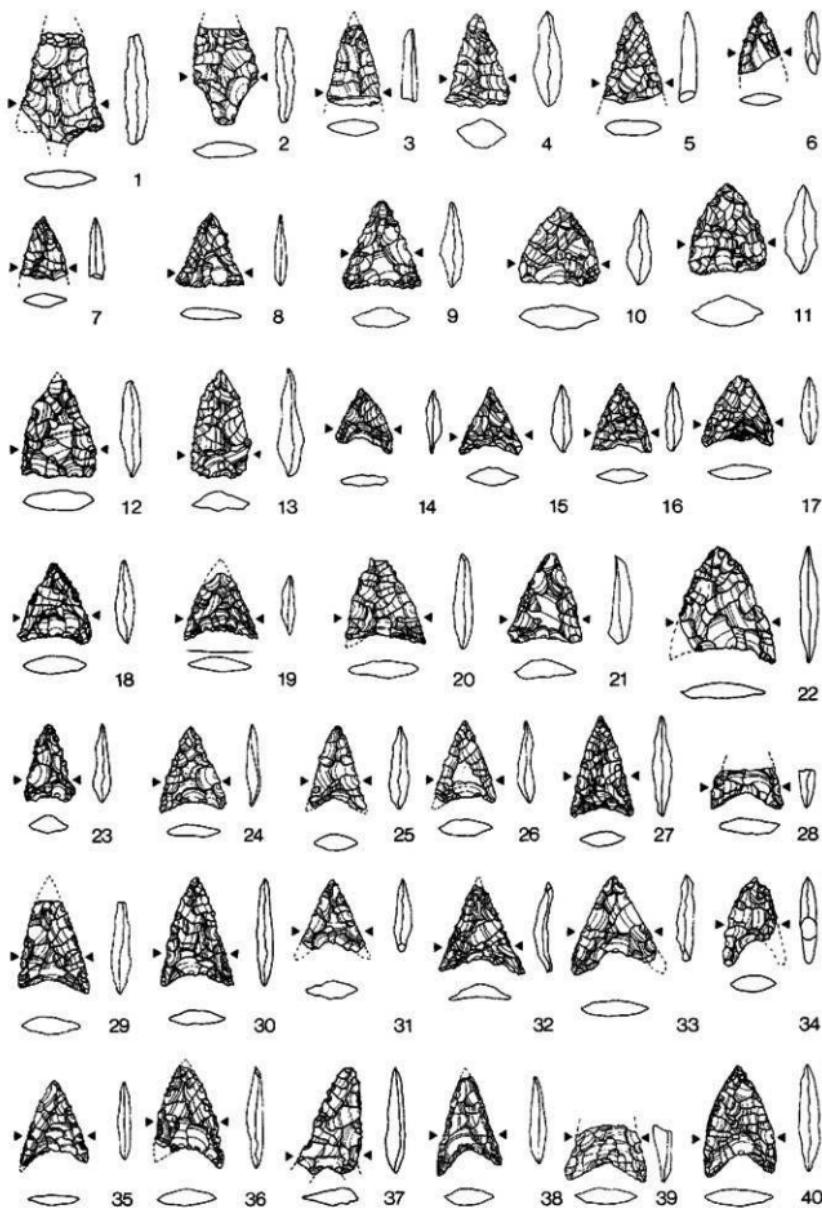
出土遺物で注意すべきは第34図3の石匙である。形態から早期もしくは前期のものと思われるが、使用している石材は草創期後半縄文土器にともなうと思われる尖頭器製作の剥片である。時期を超えたこのような素材転用は注意されることが少ないが、本遺跡ではそれが明確に確認できる。石器組成などを考える際に考慮されるべき点であろう。早期前半の沈縫文系土器が少数ながらも出土していることも注目される。本遺跡では層位的に押型文土器との共伴関係は確認できないが、県内では上野原町穴沢遺跡（小西1992）、牧丘町奥豊原遺跡（瀬山1992）など県東部で出土例があり、県北西部ではこれまで発見例が少なかっただけに貴重な資料となろう。

（註） 67は柳原功一氏により、前期初頭の可能性があるかも知ないと指摘を受けた。

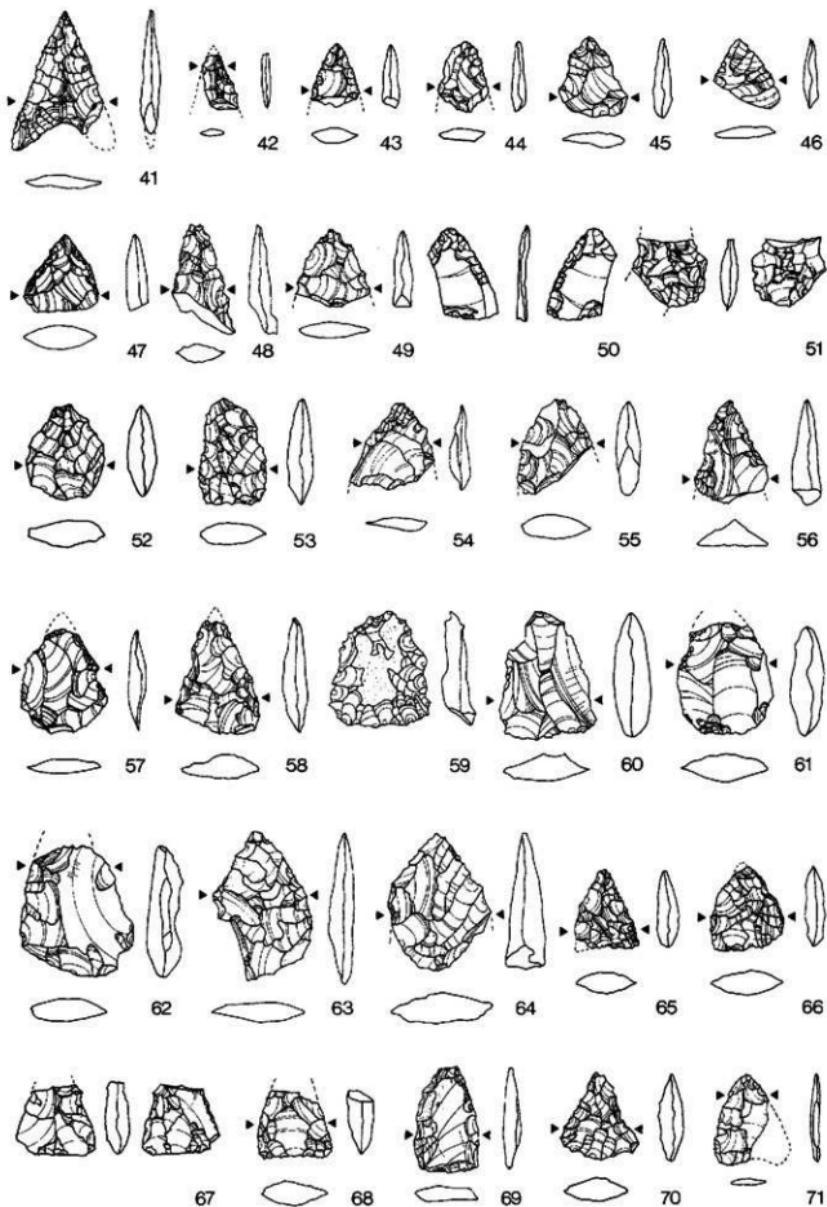
## 引用参考文献

小西直樹 1992 「穴沢遺跡・カイル遺跡」 上野原町教育委員会

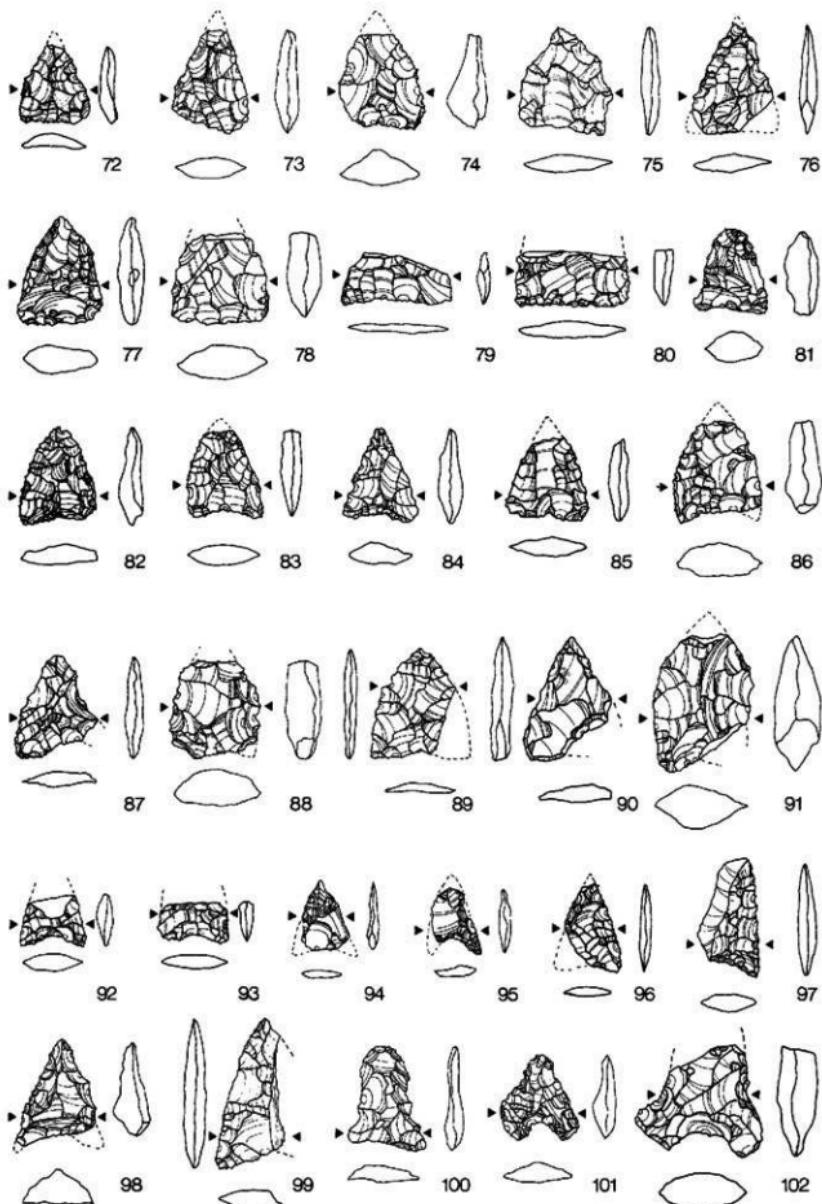
瀬山正明 1992 「縄文世界の形成」 粟田堂遺跡博物館第4回特別展示図録 組合立糸田堂遺跡博物館



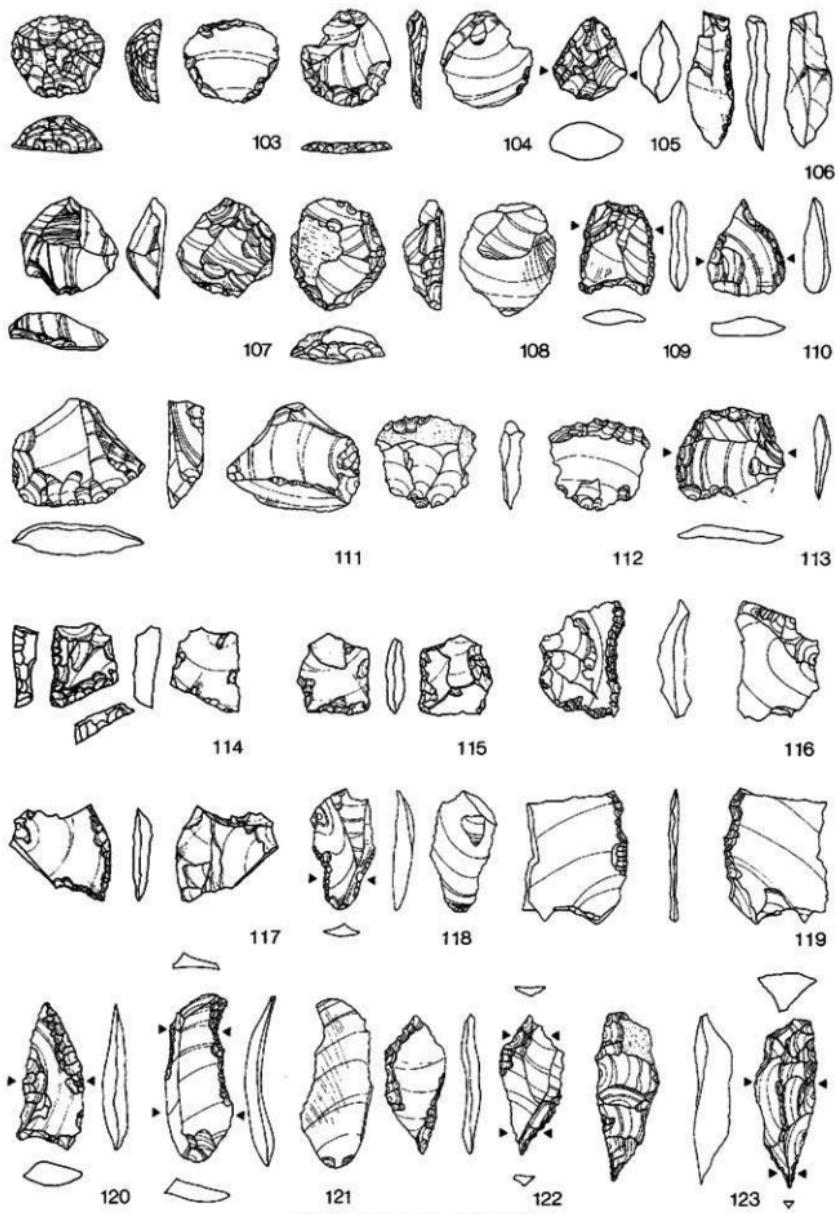
第29図 石蠑 (1/1)



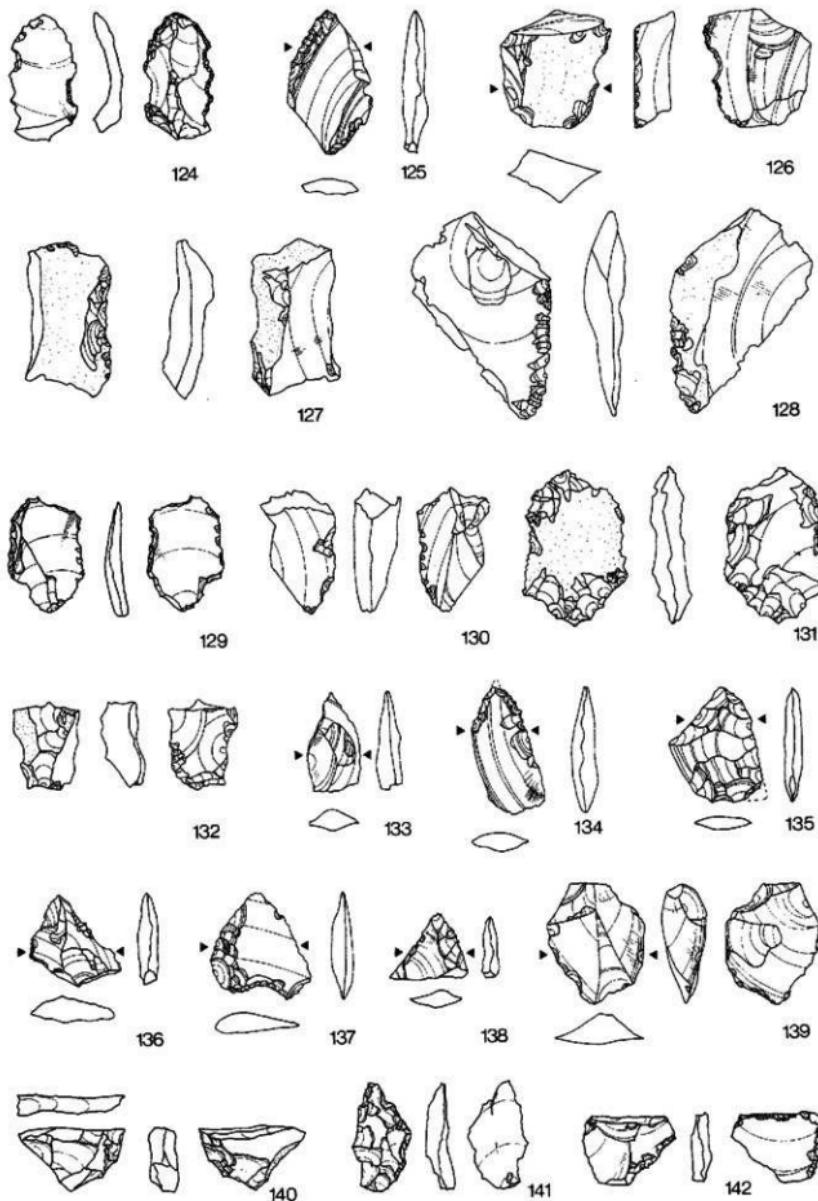
第30図 石器 (1/1)



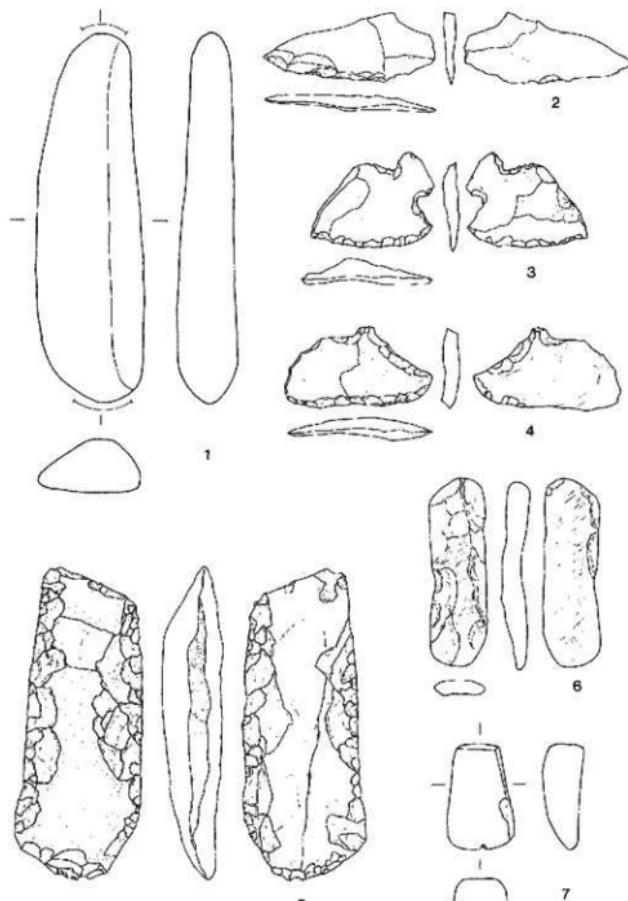
第31図 石器 (1/1)



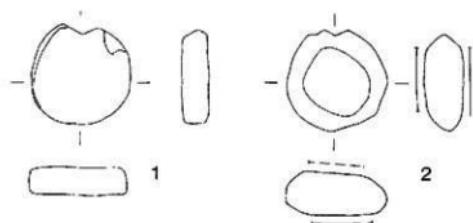
第32図 搗器・削器・石錐 (1/1)



第33図 使用痕のある黒曜石剥片 (1/1)



第34図 その他の石器 (1/2)



第35図 石鎚 (1/2)

## 第5章 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居跡8軒と上坑がA区で検出された。遺構の時期は出土遺物の特徴からほとんどが古墳時代前期五領式と思われる。B区では遺構、遺物とも検出されていない。

### 2号住居跡、17号住居跡（第36図、第37図、図版15）

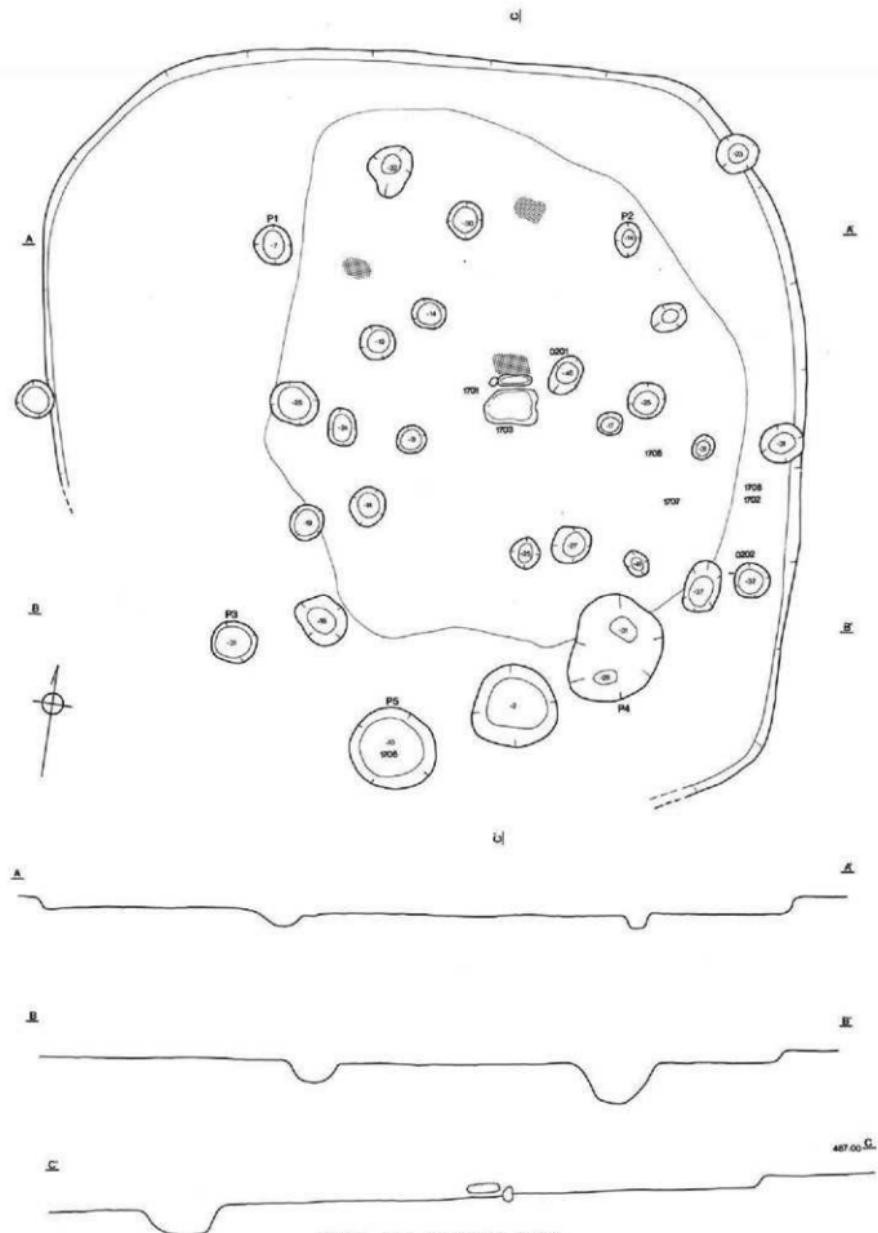
**遺構の位置と規模** E-6グリッド。東西6.1m×南北推定6.4mの隅丸方形プラン。  
**遺構の特徴** 住居跡中央よりやや東寄りに、平らな石とともに炭混じりの焼土が検出された。ここが地床炉と思われる。数cmほどの差で上下2枚の床面が確認され、上床面を2号住居跡、下床面を17号住居跡とした。上床面の遺存状態はよくなかった。主柱穴はP1-P4と思われる。上下2枚の床面の張り替えで、プラン、柱穴、地床が位置の変更はなかったようである。上面の地床炉のわきからは小型壺が出土した。出土遺物 出土遺物は上下2枚の床面高で取り上げたが、遺物の多くは小器片で上下床面間で接合するものもある。ここに報告する遺物のうち上床面高で取り上げたものは0201と0202である。0201は地床がわきから出土した小型壺で、口径8.1cm、器高10.3cm、肩部最大径9.9cm、底径4.8cm。長石粒子、雲母粒子が混じる胎土で、色調は黄褐色。器外面は磨かれており、胴上半部と下半部は別個につくられた後、接合されている。内面はハケメ調整がみられる。0202は単純口縁の壺で、推定口径15cm。器外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメで調整される。鉱物粒子が見えないキメの細かい胎土で、色調は明赤褐色。1701は台付小型壺で、長石、石英、雲母粒子が目だつ、砂っぽい胎土である。色調は赤褐色。1702は小型器台で、長石粒子が非常に目だち、黒色雲母粒子も若干混じる胎土である。胎土のきめは粗くなりざらついた手触りである。色調は墨褐色。脚部は3カ所に穿孔されている。1703は小型壺で、粒子がほとんどみられないきめの細かい胎土で、色調は黒褐色。1704は壺口縁部で、口縁上端の平坦面に2重の波状櫛描文がめぐる。口唇部に刻みはみられない。赤色粒子、長石粒子が若干混じる、きめの揃った胎土で、ややざらついている。色調は明赤褐色。1705は壺口縁部で、赤色粒子、長石粒子がやや混じるきめの揃った胎土で、色調は乳白色。1706は住居跡南端のピット(P5)から出土した小型壺の口縁部で、赤色粒子、長石粒子が若干混じる、ややざらついた手触りの胎土である。色調は明赤褐色。1707は器外面はよく磨かれた壺で、長石、石英粒子が目だつ胎土である。色調は明赤褐色。器内面は輸積痕がみられる。1708は口縁部が屈曲せずに立ちあがる壺で、赤色粒子、雲母粒子が若干混じる、きめの揃った胎土で、色調は明赤褐色。  
**遺構の時期** 古墳時代前期五領式期と思われる。

### 6号住居跡（第38図）

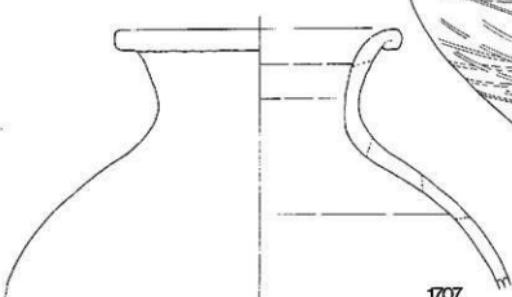
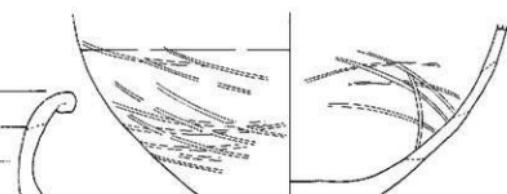
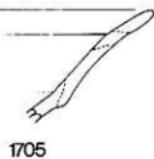
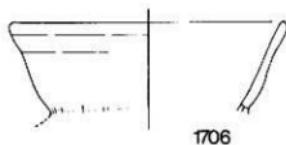
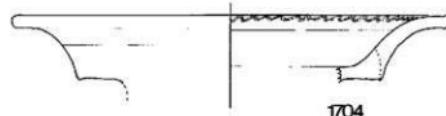
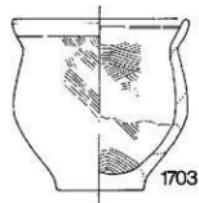
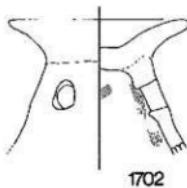
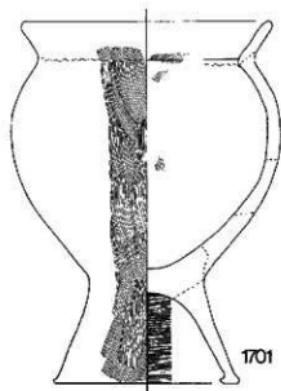
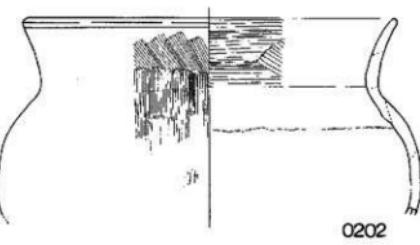
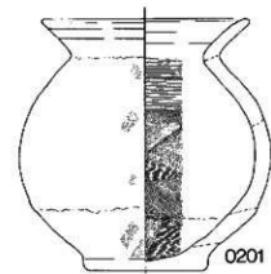
**遺構の位置と規模** E-6グリッド。遺構規模は不明。  
**遺構の特徴** 7号住居跡と8号住居跡にはさまれるように切られている。床面が一部だが良好に残っていた。焼土は検出されず、出土遺物もなかった。  
**遺構の時期** 7号住居跡、8号住居跡に切られていることから古墳時代前期の遺構と思われる。

### 7号住居跡（第38図、第39図）

**遺構の位置と規模** E-6グリッド。東西4.6m×南北5.2mの方形プラン。  
**遺構の特徴** 6号住居跡を切る。後世の土坑が住居跡内にあり、地床炉、床面などは検出されなかった。6～9号住居跡の辺りは最近の耕作などによる搅乱がひどく、7号住居跡では床面推定面でゲームセンターのコインが出土している。出土遺物 0701はS字口縁台付壺で、推定口径16.2cm。黒色雲母粒子、赤色粒子が多く混じる胎土である。色調は灰褐色。器外面



第36圖 2號、17號住居跡 (1/40)



第37図 2号、17号住居跡出土遺物 (1/2)

は縦方向のハケメで調整される。0702はS字口縁台付窓で、推定口徑14.4cm。0701とは別個体で、肩部の張りが弱いようであるが、整形技法は0701と変わらない。胎上は0701より長石粒子、黒色雲母粒子が少ない。色調は灰褐色。0703は鉄製品である。リベット状の丸い部分が4カ所みられる。第73図1は砾石である。この住居跡に属するものか出土状況からは定かではなかったため、平安時代の遺構外出土遺物として第73図に掲載した。

遺構の時期 古墳時代前期五頭式期と思われる。

#### 8号住居跡（第38図、第39図、図版16）

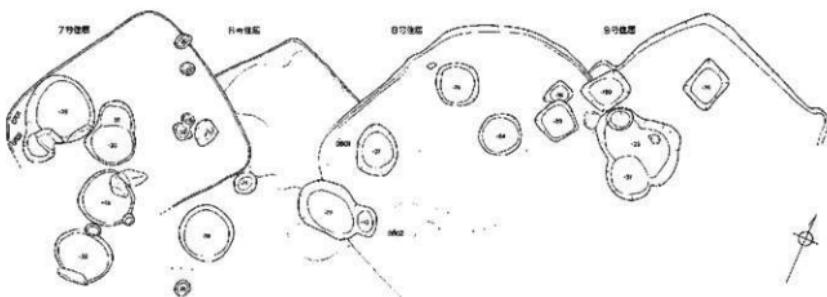
遺構の位置と規模 D-6。遺構規模は不明。遺構の特徴 6号住居跡を切る。一部に床面が検出された。9号住居跡とも切り合っているが、両住居跡の境に後世の土坑が埋り込まれているため、切り合関係は確認できなかった。出土遺物 0801は高环で、环部は内面に放射状の磨き痕がみられる。脚部は下へおおきく広がり、3カ所に丸孔がある。長石粒子、赤色粒子が混じる、きめの揃った良質の胎土で、色調は明赤褐色。0802は壺の口縁部で、器外表面は磨かれ、内面は横方向のハケメで調整される。口縁部は折り返しがない単純口縁である。長石、赤色粒子、黒色雲母粒子が若干混じる、きめの揃った胎土で、色調は明褐色。0803は高环环部である。环部は椀形で、赤彩してある。器内外面ともよく磨かれている。長石粒子が若干混じるきめの揃った胎土で、色調は明赤褐色。0804は刀子先端のような鉄製品であるが、形状ははっきりしない。

遺構の時期 古墳時代前期五頭式期と思われる。

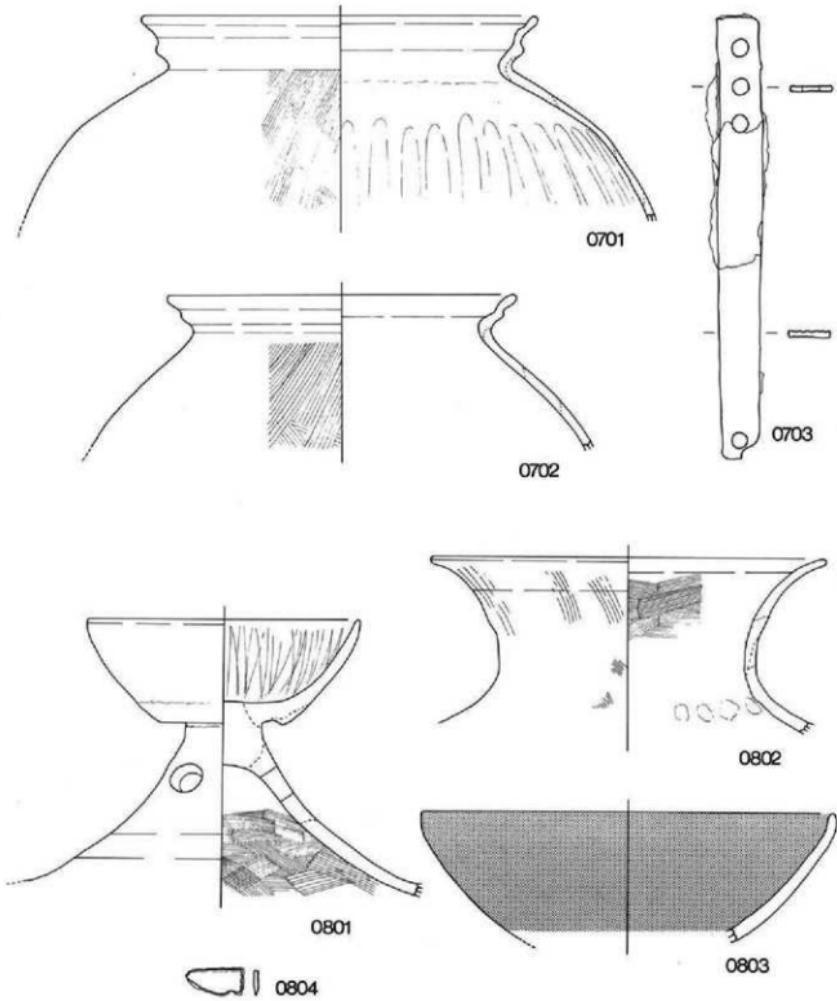
#### 9号住居跡（第38図、図版16）

遺構の位置と規模 D-6グリッド。遺構規模は不明。遺構の特徴 後世の土坑が埋込まれている。床面、焼土は検出されなかった。8号住居跡と接しているが、切り合関係は不明である。出土遺物 土器小片が十数点出土したのみである。若干の鉄製品が出土しているが、いずれも断片である。

遺構の時期 古墳時代前期五頭式期と思われる。



第38図 6号、7号、8号、9号住居跡 (1/120)

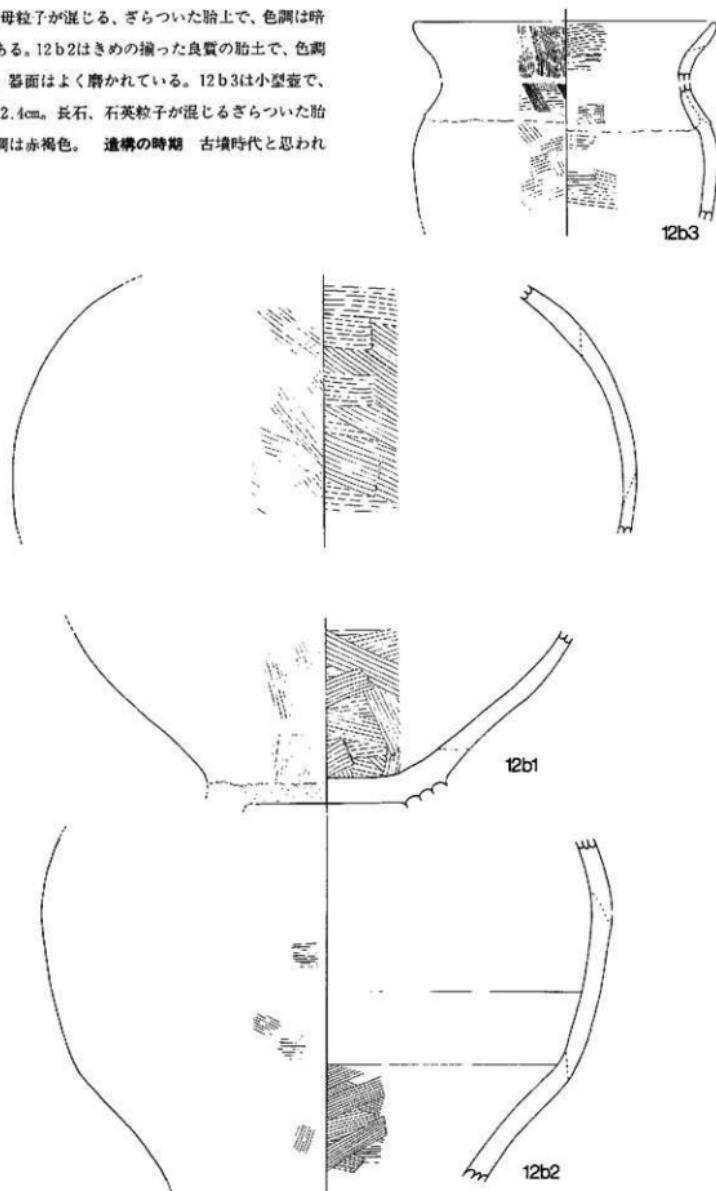


第39図 7号、8号住居跡出土遺物 (1/2)

#### 12b号住居跡 (第40図)

造構の位置と規模 I-11グリッド。造構規模は不明。 造構の特徴 平安時代と思われる12a号住居跡を調査中に検出された。プラン南端部分が僅かに検出されただけである。 出土遺物 親および壺が12a号住居跡の推定床面高の下より出土した。12b01は底部周辺が割れ口状になっており、おそらくは台付壺であろうと思われる。

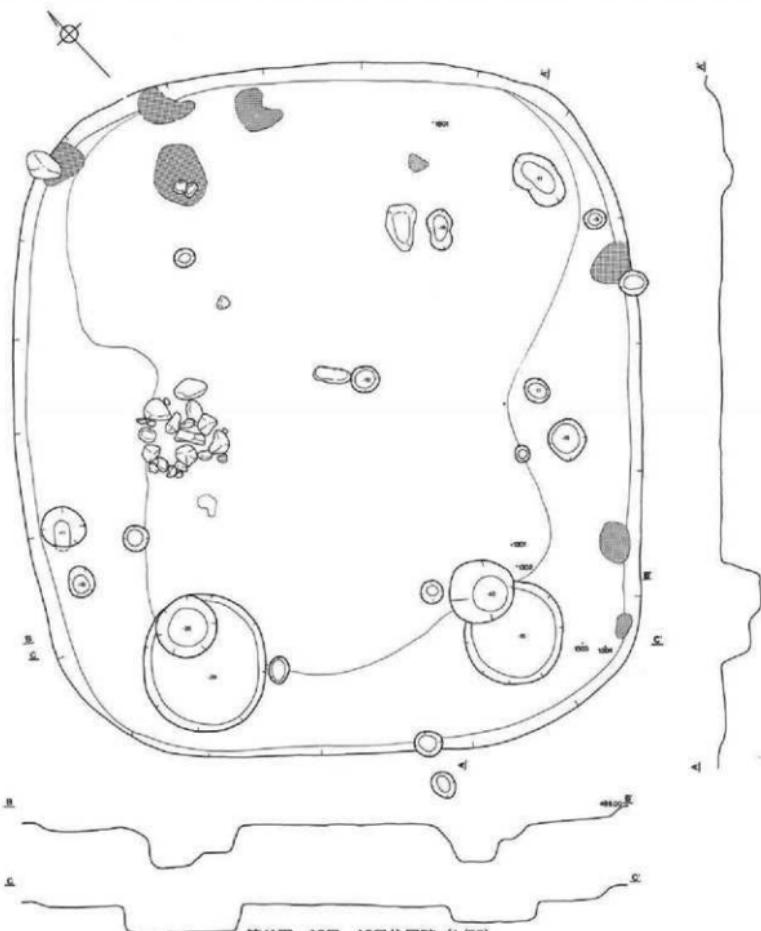
12b1は雲母粒子が混じる、さらついた胎土で、色調は暗黄褐色である。12b2はきめの揃った良質の胎土で、色調は赤褐色。器面はよく磨かれている。12b3は小型壺で、推定口径12.4cm。長石、石英粒子が混じるさらついた胎土で、色調は赤褐色。造構の時期 古墳時代と思われる。



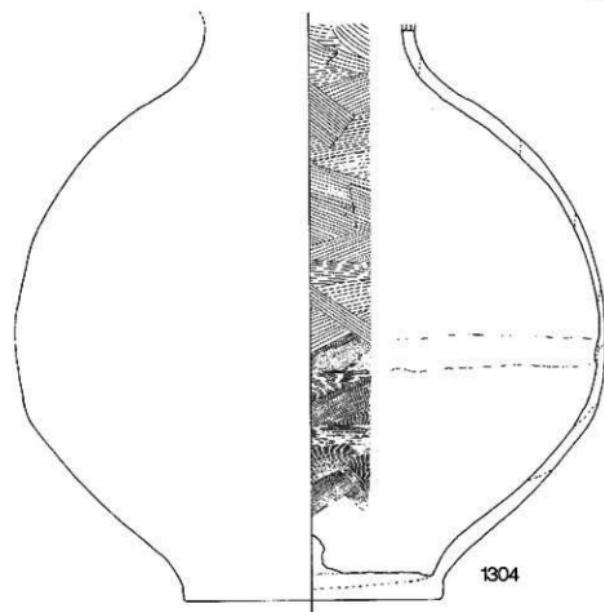
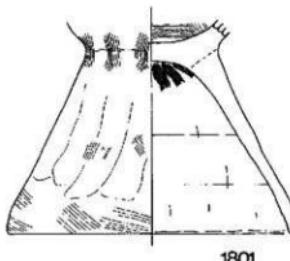
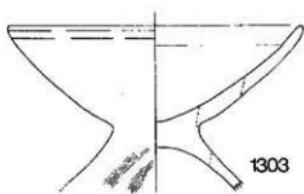
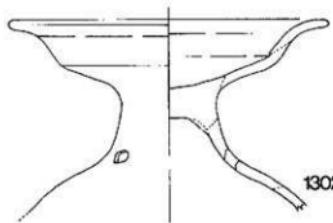
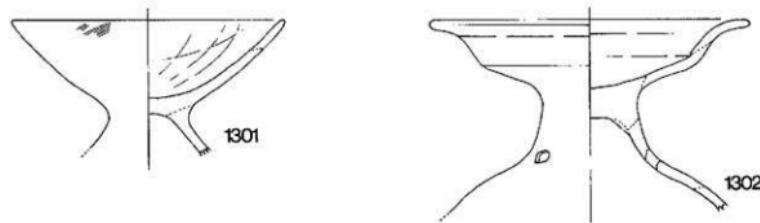
第40図 12b号住居跡出土遺物 (1/2)

13号住居跡、18号住居跡（第41図、第42図、図版16、17）

遺構の位置と規模 H-11グリッド。東西6.4m×南北7.1m。 遺構の特徴 床面が上下2枚確認され、上床面を13号住居跡、下床面を18号住居跡としたが、両者は同一の住居プラン内で床を張り替えただけのことであろう。地床炉の確実な位置はわからない。南側には2基の土坑が検出された。主柱穴位置は確認できなかった。炭混じりの焼土が住居跡壁沿いに多く検出されたが、建築部材の炭化材は検出されなかった。 出土遺物 上下床面高でそれぞれ遺物を取り上げた。下床面の遺物は1801のみである。1301は高环で、長石、石英粒子が多く混じる胎土で、色調は暗赤褐色。東南の土坑のわきから出土した。1302は1301とともに出土した高环で、胎土も1301、1302と同様である。脚部には3つの小孔があるが、いびつである。1303は住居跡南東隅で出土した高环で、胎土は1301、1302と同様である。1304は1303と同じ位置で出土した壺で、口縁部が失われている。長石粒子、石英粒子が混じ



第41図 13号、18号住居跡 (1/50)

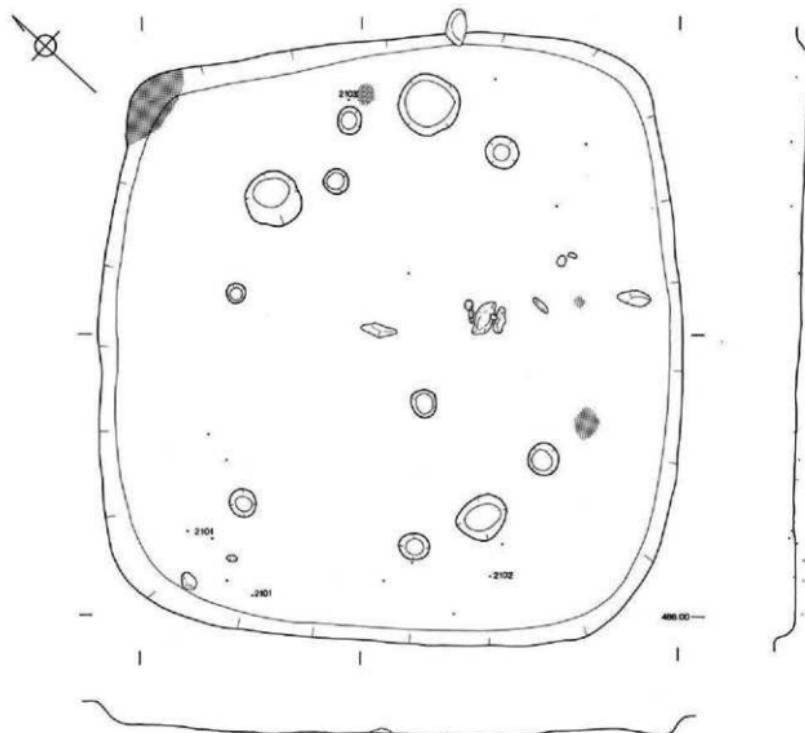


第42図 13号、18号住居跡出土遺物 (1/2)

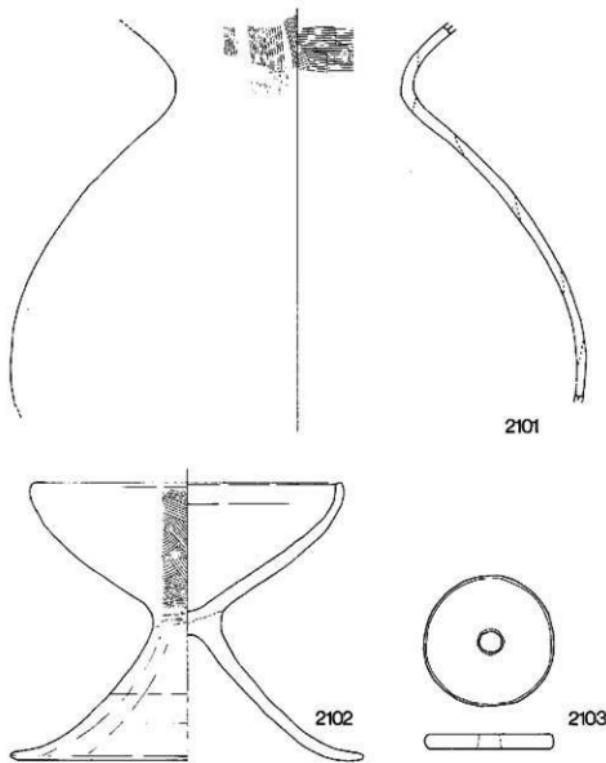
る胎土で、色調は赤褐色。器外面はよく磨かれている。2101は北壁近くで出土した高環の脚部と思われる。胎土は1301、1302などとよく似ている。 造構の時期 古墳時代前期五頭式期と思われる。上下床面は時期差をさほどおかず張り替えられたものと思われる。

#### 21号住居跡（第43図、第44図、図版18）

造構の位置と規模 E-9グリッド。4.9m×4.7mの隅丸方形プラン。 造構の特徴 床面が良好に検出されたほかは、黒色土中で水が湧いてくるため柱穴などの確認は充分にできなかった。住居跡全面に炭化木の小片が散在したが、まとまった建築部材のような炭化木材はみられなかった。 出土遺物 2101は住居跡南半に散在して出土した壺上部で、器面はよく磨かれている。内面は輪積痕がみられる。長石粒子が若干混じるきめの揃った良質の胎土で、色調は黄褐色。2102は高環である。環部は楕円形で、脚部に穿孔はない。長石粒子がめだつ砂っぽい胎土で、色調は明赤褐色。2103は石製防錐車で、石質は粘板岩と思われる。 造構の時期 古墳時代前期五頭式期



第43図 21号住居跡 (1/40)



第44図 21号住居跡出土遺物 (1/2)

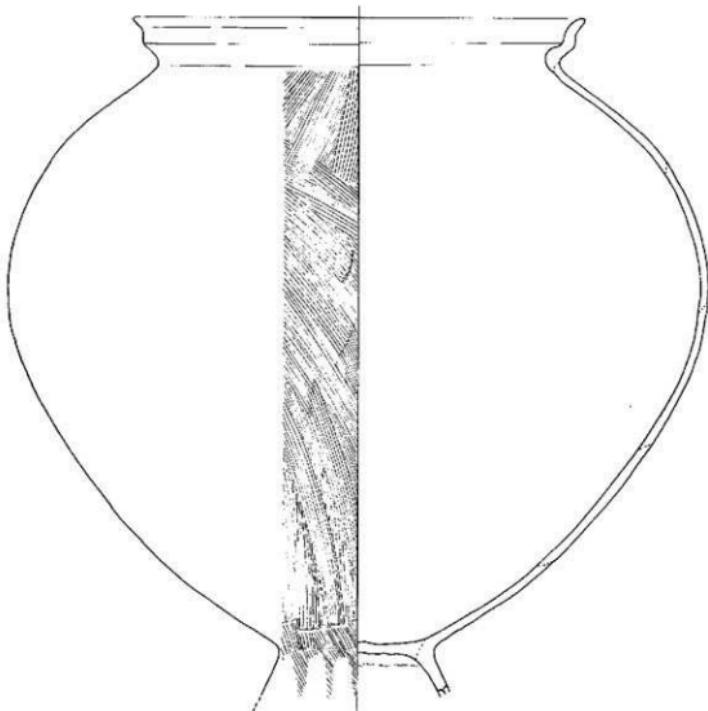
#### 4号土坑群(添図遺構全体図、図版19)

**遺構の位置と規模** H-8グリッドを中心として散在する。 遺構の特徴 径50cmから1.5m、深さ60cmほどの土坑が30基ほど散在している。中世と思われる1号、2号、3号土坑群ほど土坑が集中せず、上坑間があいている。4号土坑群の土坑1基からは古墳時代前期のS字口縁台付甕が1個体掘って出土しており(第45図、図版19①)、これらのことから4号土坑群の多くは古墳時代前期の土坑と推測した。しかし、ほとんどの土坑は遺物が出土せず、積極的に時期を特定する根拠はない。

**出土遺物** 1801はS字口縁台付甕で、脚部下半部を欠いている。土坑より正位の状態では原形を保って出土した。口径18.4cm、胴部の最大径28.5cm。器外面はハケメ整形、脚部はハケメ整形痕を縱方向のナデで擦り消している。長石の微小粒子が混じる、キメの描った良質の胎土で、色調は暗赤褐色である。

#### 遺構外出土遺物(第46図～第52図、図版19)

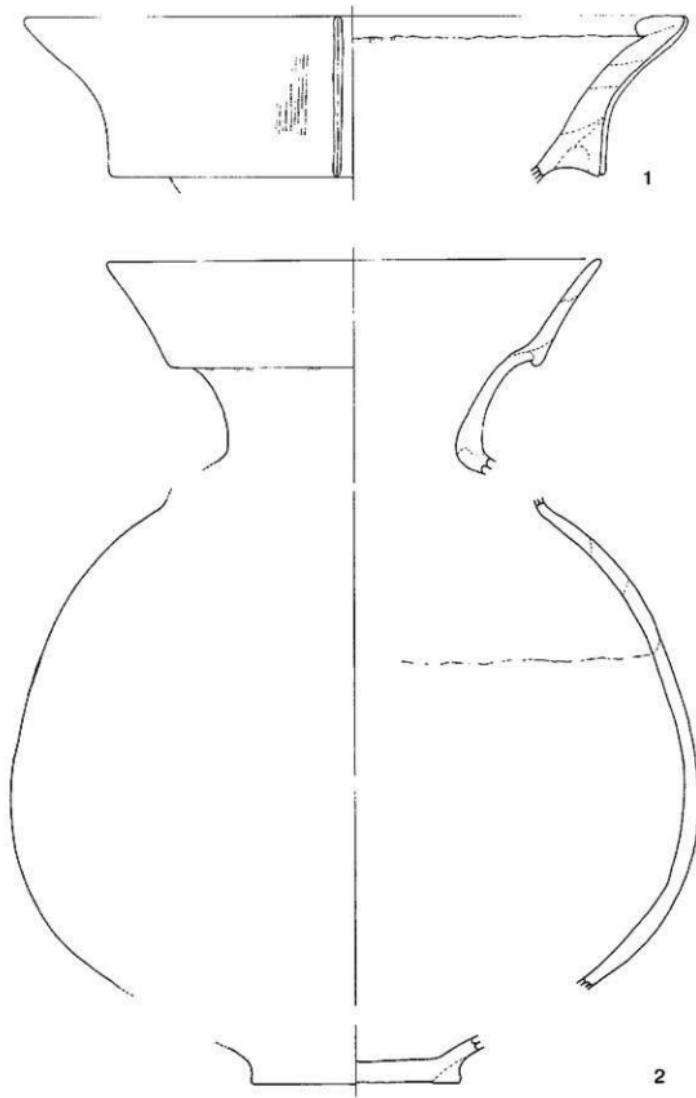
試掘調査の際にE-9グリッドから古墳時代前期の遺物がまとまって出土している。E-9グリッドには21号住居跡があるが、試掘坑は住居跡内には設定されていない。おそらく21号住居跡の遺物が削平などにより若干移



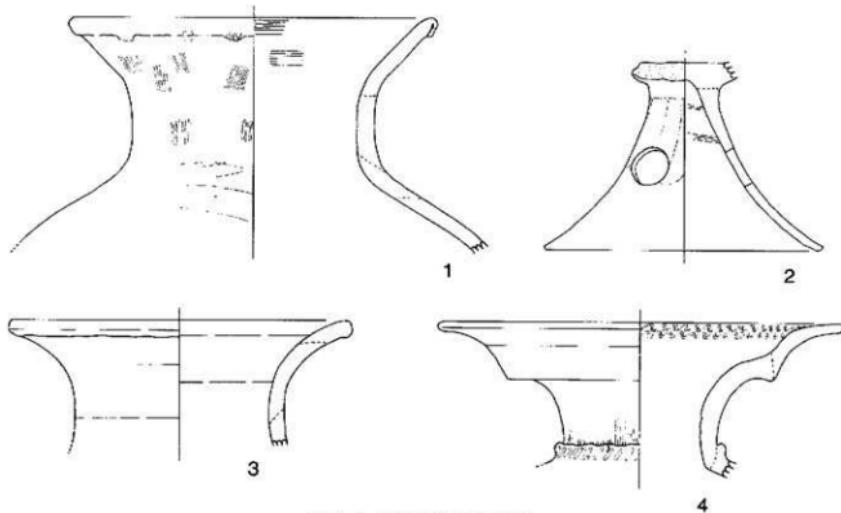
第45図 土坑出土遺物 (1/2)

動したか、あるいは東へ下がる傾斜面を西側のグリッドから遺物が流れおちている可能性が考えられるが、遺物が大きな器片で接合するものも多いことから前者の可能性が高いと思われる。さらにE-9グリッドに設けた試掘坑出土のこれらの遺物は、B区南側の試掘坑出土の器片と接合するもの多かった。しかし、B区南側では試掘調査の際、遺構が発見されず、この2カ所の試掘坑以外から古墳時代前期の遺物が出土することもなかった。そのためB区南側は重機により表土を剥いたものの精査は行わなかった。おそらく造田の際にE-9グリッドからB区南側へ土を移動し、その際に上器片とともに運搬されたと判断した。

第47図1は壺上部で、赤色粒子、長石、雲母粒子が多く混じる、キメの粗いざらついた胎土で、色調は淡乳白色。器内外面は風化が激しいがハケメ整形痕がみられる。口唇部は僅かに折り返している。2は器台脚部と思われる。3カ所に穿孔があり、外面は縦方向のナテ整形、内面は横方向のナテ整形がみられる。赤色粒子、長石粒子が僅かに混じる胎土で、色調は赤褐色。3は壺口縁部で赤色粒子、長石粒子が目立つ、ややざらついた胎土で、色調は明黄褐色。4は口唇部上面の平坦部に2重の波状模様を施した壺口縁部である。17号仕居跡で形状、胎土質がよく似たものが出土している。赤色粒子、長石、雲母粒子が混じるキメの細かい胎土で、色調は明赤褐色。焼成は良好である。



第46図 遺構外出土遺物 (1/2)

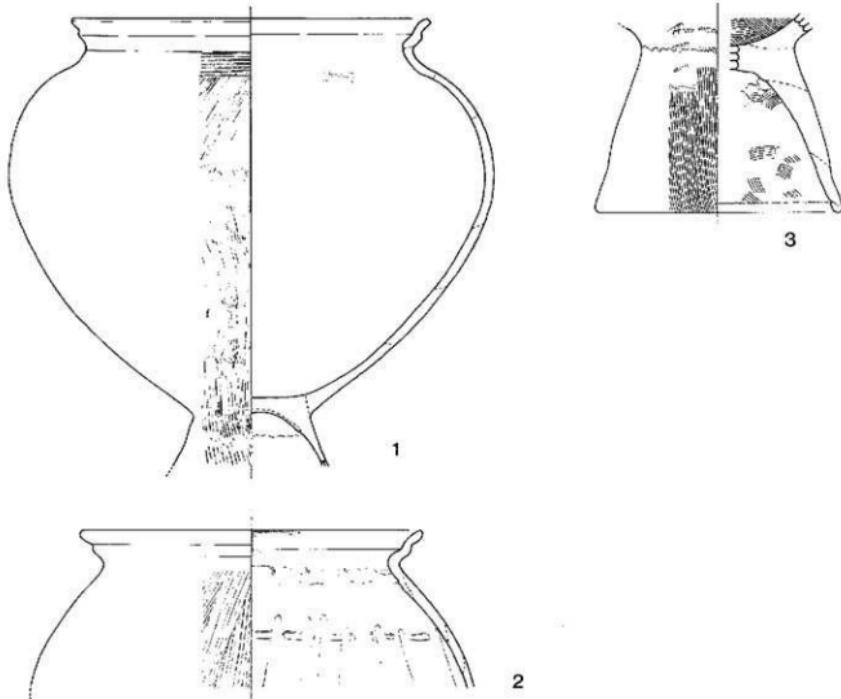


第47図 遺構外出土遺物 (1/2)

第46図1は第47図1と同様の胎上質の壺口様部で、縦方向の粘土紐貼り付けがある。粘土紐の本数は現存する器片では1本しかみられないが、複数本の可能性もある。2の壺は推定口径20cm、胸部最大径27.8cm、推定器高34cm前後。赤色粒子、長石粒子が若干混じる、非常にキメの細かい胎土で、色調は明赤褐色。焼成は良好である。

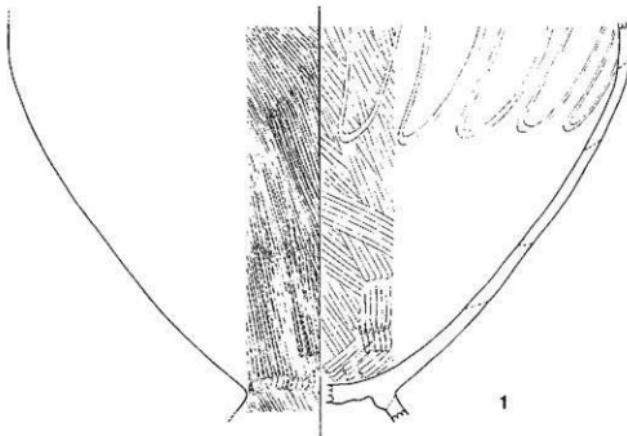
第48図、第49図にはS字口縁台付壺を集めた。第48図1はG-6グリッドとG-7グリッドから出土したものと図面上で復元したもののである。推定口径は14.6cm、胸部最大径は19.7cm。器外面肩部には横方向のハケメ整形が入る。長石、雲母粒子がめだつ、ややざらついた胎土で、色調は赤褐色。焼成は良好である。2はH-6グリッドで出土した。推定口径14cm、器外面はハケメ整形、内面は縦方向のナテ底と工具によると思われる押痕がみられる。雲母、長石粒子が僅かに混じるキメの揃った胎土で、色調は明黄褐色。焼成は良好である。G-6グリッドからG-7グリッドにかけて古墳時代の上器片が、小器片ながらまとまって出土しており、遺構は削平のため検出されなかったが古墳時代の住居跡があったものと思われる。3は出土位置不明、S字口縁台付壺とと思われる。器外面はハケメ整形される。長石が若干混じるややざらついた胎土で、色調は明赤褐色。焼成は良好である。第49図2はI-9グリッドから出土した。胸部上半を欠いているため定かではないが、S字口縁台付壺として報告する。本遺跡で出土しているほかのS字口縁台付壺と比較するとやや厚手である。器外面はハケメ整形されるが、ほかの同種類と較べるとやや整形が雑である。胸部最大径もやや下半に下がってきている感じがする。長石粒子がかなり目立つざらついた胎土で、色調は暗赤褐色。焼成は普通。1はG-7グリッド出土。器内外面はハケメ整形、内面には波状のミガキ痕がある。長石粒子が混じるややざらついた胎土で、色調は暗黄褐色。焼成は良好。

第50図1、2は壺の口縁部と底部で、胎土質から同一個体とみられる。口径は14.6cm、器面はよく磨かれ、器内面はハケメ整形される。長石粒子が混じる胎土で、色調は黄褐色。3、4は壺底部で、3は器面が磨かれ、内面はハケメ整形される。4は試掘の際、I-11グリッドに相当するテストピットで出土したもので、器外面は磨かれている。底部に擦痕が2ヶ所にみられる。

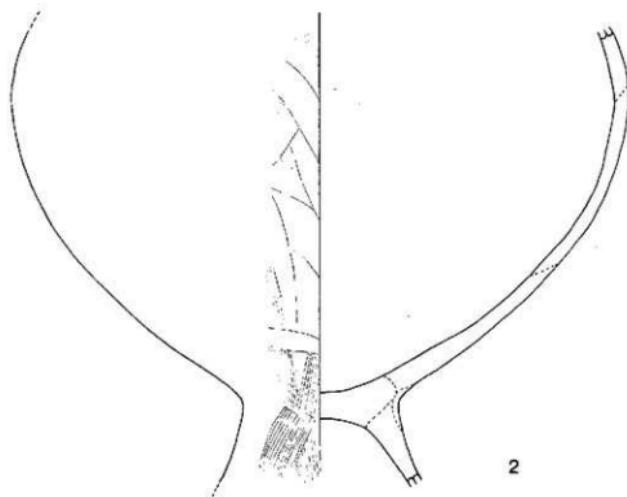


第48図 遺構外出土遺物 (1/2)

第51図1は小型器台で口径6.4cm、長石粒子が若干混じる胎土で、色調は灰白色。2、3は器台脚部と思われる。両者とも小器片であるため、穿孔の有無は不明である。両者とも赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。4はF-5グリッドで出土、器外面はヘラナデ、内面は斜め方向のヘラミガキとハケメ調整が施される。推定口径は15.2cm、器高は6.1cm。キメの揃った良質の胎土で、色調は黒褐色。焼成は良好。5はG-7グリッドで出土、器外面は磨かれており、内面はヘラミガキが施される。赤色粒子が若干混じるキメの揃った胎土で、色調は赤褐色。焼成は良好である。6は5とは同形と思われる。赤色粒子が若干混じるややざらついた胎土で、色調は明赤褐色。5とも小器片であるため断定できないが、同一個体の可能性もある。7は高环坏部と思われる。器外面はヘラミガキ、内面は粗密2種類のハケメを用いて調整される。赤色粒子、長石粒子が混じるキメの揃った胎土で、色調は暗褐色。焼成は良好である。第52図1、2は波状模様文が施された土器片で、1は暗褐色のやや粗い胎土質、2は赤褐色の僅かに砂が混じる胎土質である。3は底部片で、板压痕がみられる。胎土質より古墳時代のものと思われる。

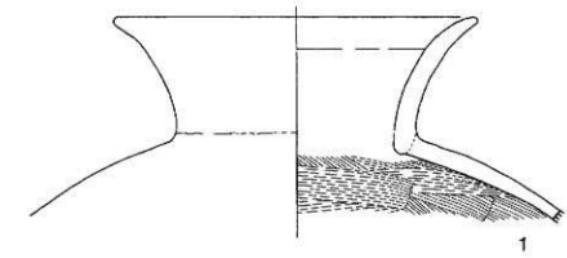


1

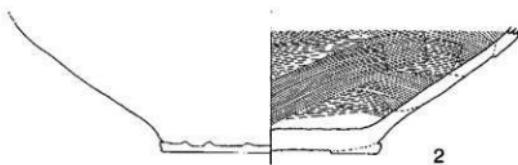


2

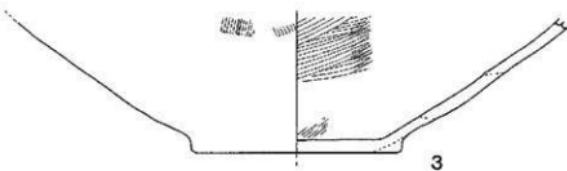
第49図 遺構外出土遺物 (1/2)



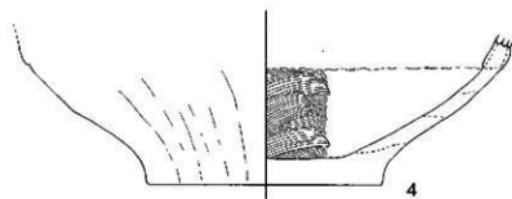
1



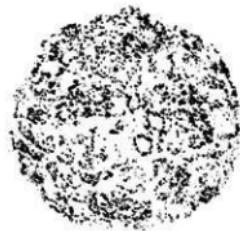
2



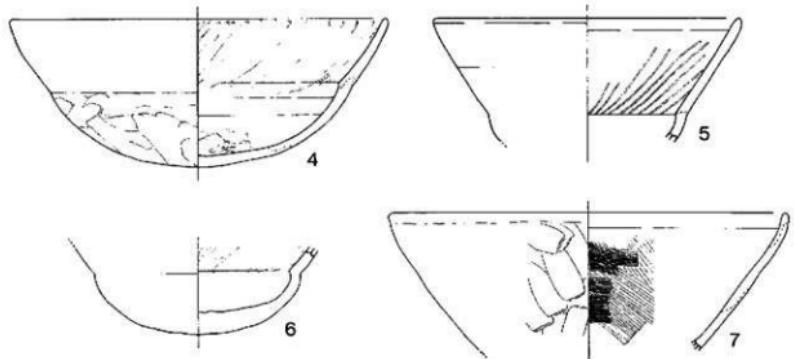
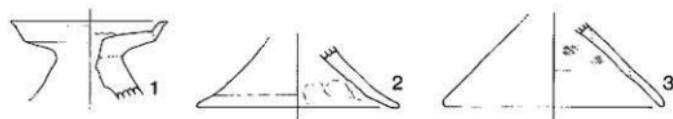
3



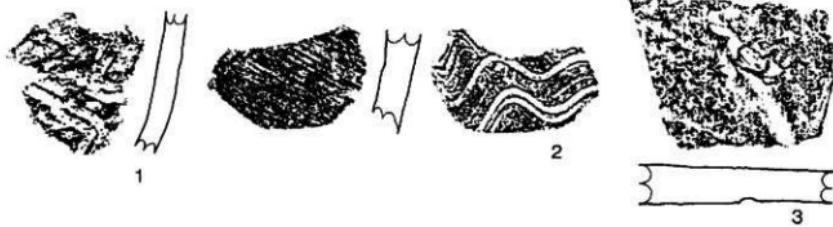
4



第50図 遺構外出土遺物 (1/2)



第51図 遺構外出土遺物 (1/2)



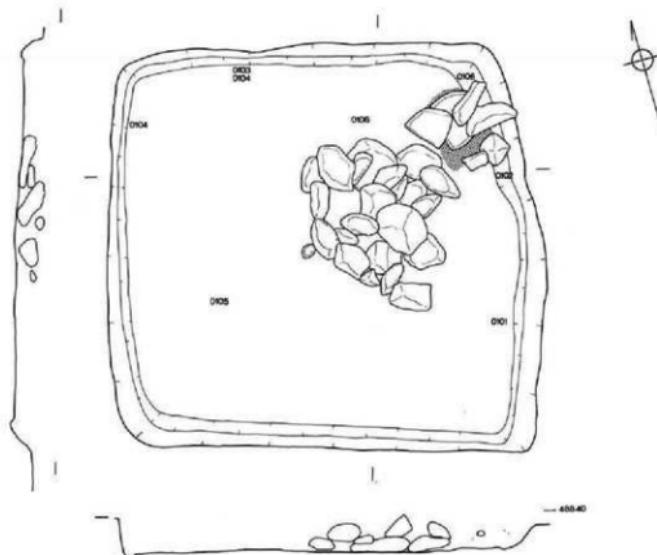
第52図 遺構外出土遺物 (1/1)

## 第6章 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構では住居跡が12軒検出された。以下にそれぞれの住居跡を報告するが、出土土器の時期については甲斐型土器研究グループ1992「甲斐型土器—その編年と年代—」山梨県考古学協会の編年に従った。

### 1号住居跡（第53図、第54図、図版20）

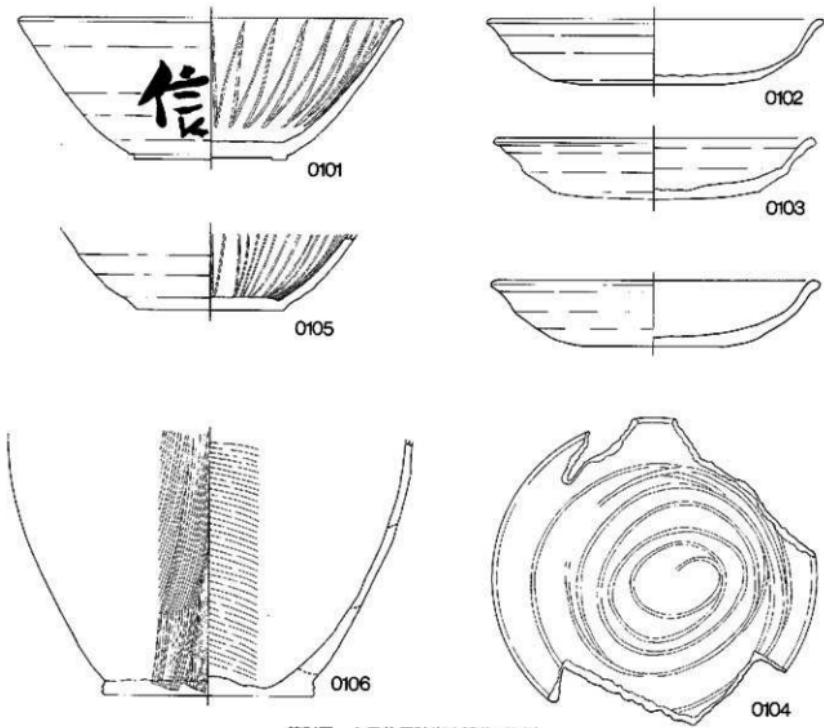
遺構の位置と規模 C-2グリッド 東西3.4m、南北3.4m。 カマド位置と特徴 東壁北寄りに位置する。構築石材の残りは悪い。カマド掘り込みからは焼土が検出された。カマドの西側には石が積まれており、石の下からも焼土と土師器裏片が出土した。これらの積み石は一部に被熱したものもあることからカマドを構築した石材を含むと思われる。 遺構の特徴 周溝、床面が良好に検出された。柱穴は検出されなかった。遺物が北壁沿いに集中して出土する箇所があり、日常の什器を収納する施設がそこにあったのかもしれない。 出土遺物 0101は東壁沿いで出土した土師器環で、「椎」の墨書きがみられる。口径は15.6cm、器高が5.8cm、底径6.2cm。赤色粒子



第53図 1号住居跡 (1/40)

が混じる胎上で、色調は赤褐色。器外面はナデに下半部はヘラケズリ、内面はナデに放射状暗文が施される。底部は削り出し高台である。0102は北壁際で出土した土師器皿で口径13.6cm、器高2.7cm、底径5.5cm。赤色粒子が混じる胎上で、赤褐色。器外面は、底部から下半部にかけて回転ヘラケズリ、上半部はナデ整形。内面はナデ調整のみである。0103は北壁際で出土した土師器皿で、口径は13cm、器高2.5cm、底径5.5cm。赤色粒子が混じる胎土で色調は赤褐色。器外面の底部から下半部にかけてはヘラケズリ、内面はナデ調整。大きさ、整形技法とともに0102と共通する。0104は北壁際で出土した土師器皿で口径13.2cm、器高2.6cm、底径6cm。赤色粒子が混じる胎土で色調は赤褐色。器面調整は前2者と共通するが、内面に渦巻状暗文がみられる。0105は西壁際で出土した土師器皿で上半部が欠けている。底径は6cm。赤色粒子が混じる胎土で色調は赤褐色。器外面の底部から下半部にかけてヘラケズリ、上半部はナデ整形。内面はナデ整形に放射状暗文がみられる。大きさ、整形技法から0101と同様のと思われる。0106はカマド内およびカマド西側の積み石下から出土した土師器皿で、底径8.6cm。底部には木葉痕がみられる。金色の雲母が混じるざらついた胎土で、色調は褐色。口縁部は薄口縁型。この土師器皿と同一個体と思われる甕の破片はカマド周辺で数多く出土しているが、完形には復せない。

造構の時期 出土遺物の特徴からX期頃と思われる。



第54図 1号住居跡出土遺物 (1/2)

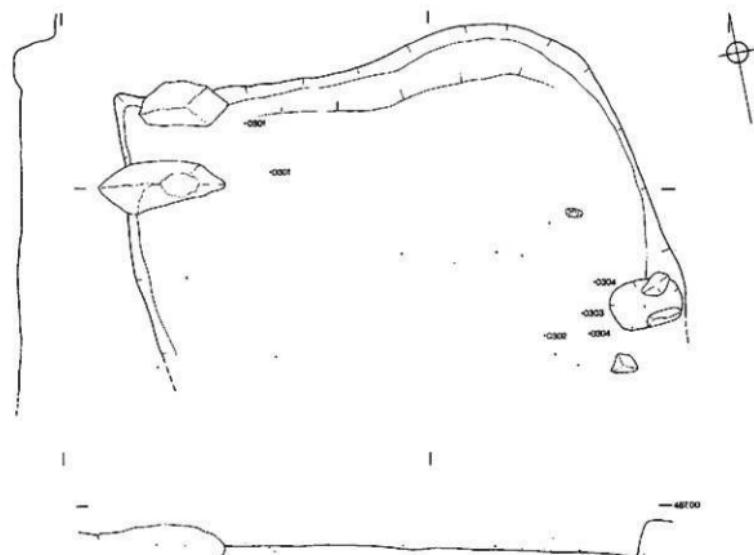
**3号住居跡 (第55図、第56図、図版21)**

**遺構の位置と規模** F-7グリッド。東西4.3m、南北長は削平により不明。 カマド位置と特徴 東壁やや南寄りに位置する。構築石材はあまり残っていない。焼上が検出されたが微量であった。カマド周辺の遺物量はさほど多くない。

**遺構の特徴** 2号住居跡南壁を切っている。南半分は造田により削平されている。西壁側には地山の大きな石が露出している。この石の上面は平に削られているが、造田の際に削られたのか、住居跡構築に際して削られたのかは不明である。

**出土遺物** 0301は土師器環片で、推定口径16.6cm。器内外面はナテ調整のみ。内面は黒色処理されている。長石、石英、雲母粒子が混じるややキメの粗い胎土で、色調は黄褐色。0302から0304はカマド周辺で出土した土師器要片で0302、0303が薄口縁型、0304が厚口縁型である。推定口径はそれぞれ、28cm、32cm、32cmである。0305は擦り石である。

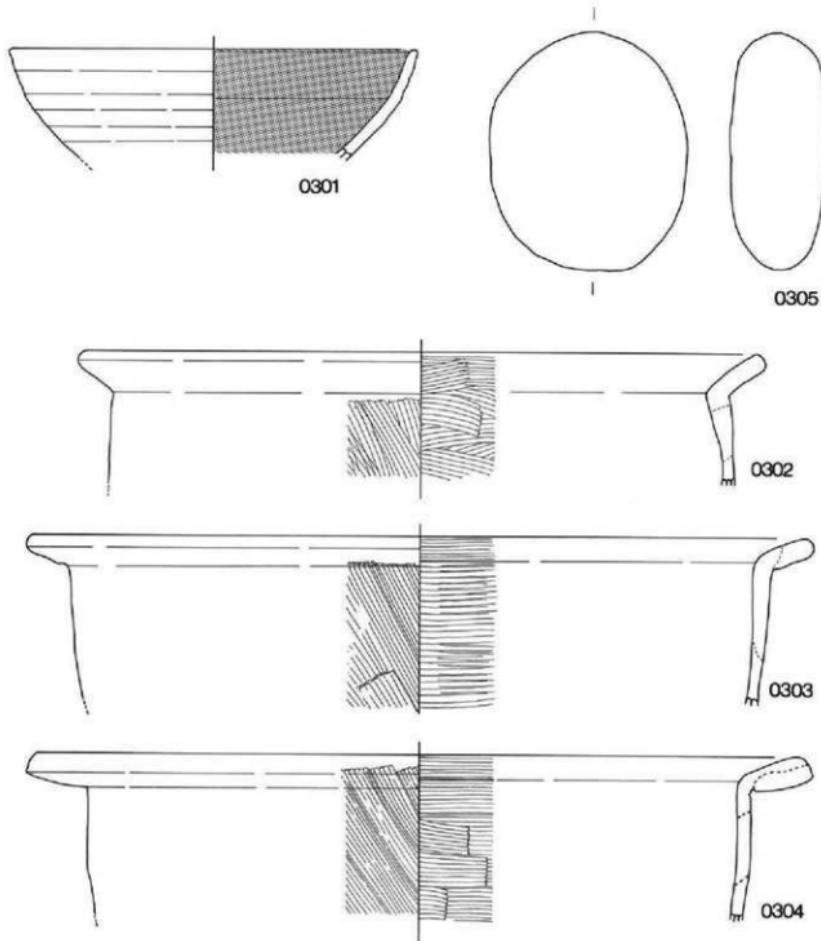
**遺構の時期** 出土遺物が少なく、断片的であるため推定が困難であるが、甕の特徴からはX-XⅠ期頃と考えられる。



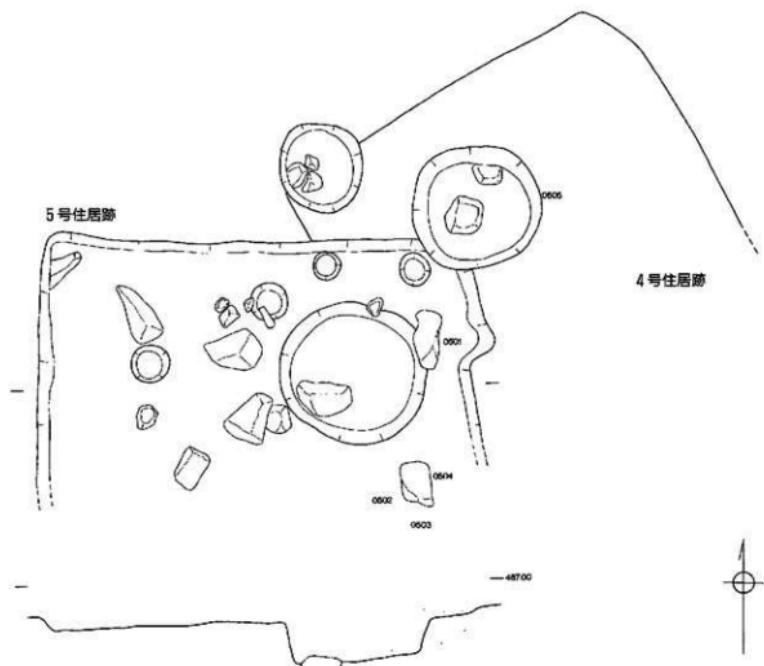
第55図 3号住居跡 (1/40)

#### 4号住居跡（第57図、図版21）

**造構の位置と規模** E-7グリッド。東西3.1m、南北長は削平により不明。**カマド位置と特徴** 東壁中央から南寄りに位置していたものと推測される。焼土が東壁中央でわずかに検出された。**造構の特徴** 南半は造田のため削平されている。5号住居跡と重なっているが、覆土観察による切り合い関係の確認はできなかった。住居跡内の土坑は住居跡に直接属するものではない。周溝、床面、柱穴は検出されなかった。**出土遺物** 遺物は全く出土しなかった。**造構の時期** 出土遺物がないため不明だが、後述する5号住居跡内の砾の出土状態から5号住居跡に切られていると推測した。本住居跡の形状と併せて平安時代に属するものと考えられる。



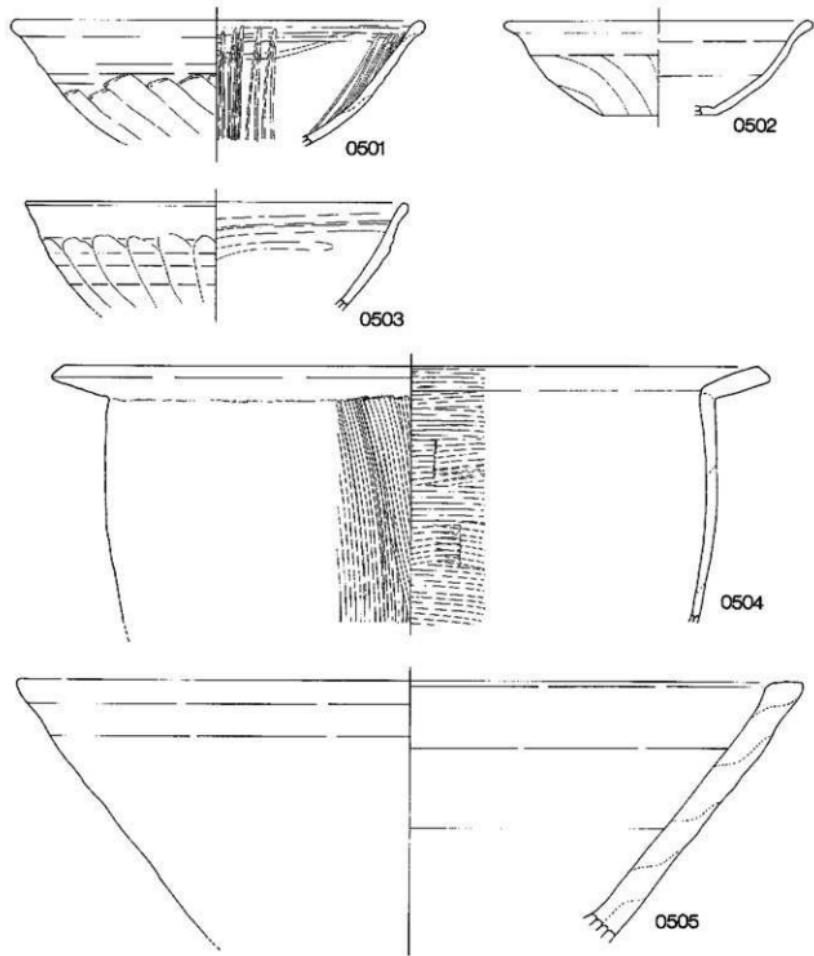
第56図 3号住居跡出土遺物 (1/2)



第57図 4号、5号住居跡 (1/40)

### 5号住居跡（第57図、第58図、図版22）

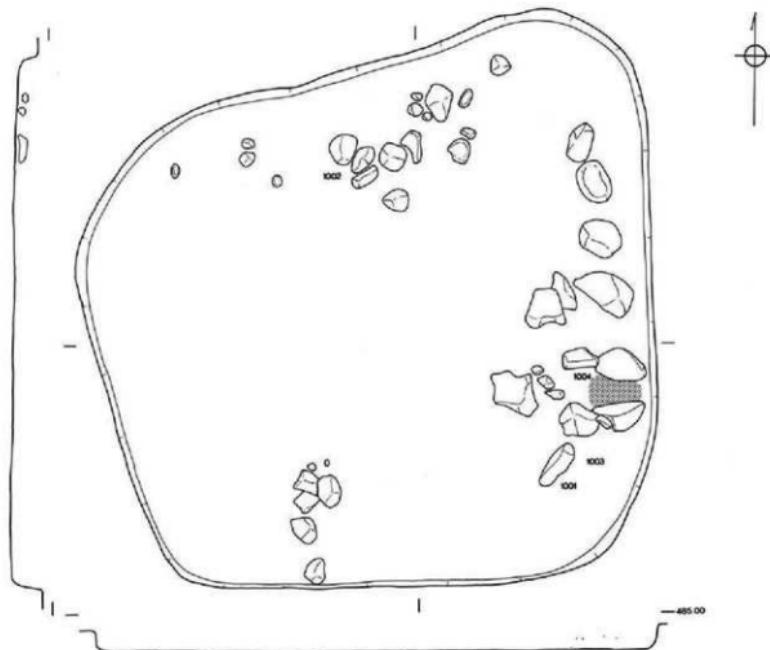
**遺構の位置と規模** E-7グリッド。東西3.5m、南北は削平のため不明。カマド位置と特徴 東壁北寄りにカマドを構築した石材と思われる石があるが焼土が検出されていない。東壁南寄りには後世の土坑があり、カマドの位置は不明である。遺物は東壁南寄りに特に目だつことから南寄りにカマドがあったと推測される。**遺構の特徴** 周溝、柱穴、床面は検出されなかった。住居跡中央部に礎が散在するが、礎は床面推定高より数cmほど浮いている。これらの礎の出土状態から5号住居跡が4号住居跡を切っているものと推測した。**出土遺物** 0501は東壁沿いで出土した土師器環で、口径16.8cm、下半部は欠けている。赤色粒子の混じる胎土で、色調は赤褐色。器外表面は上半がナデ、下半が斜めヘラケズリ、内面はナデに放射状暗文がみられる。0502は東壁寄りで床面高から5cmほど浮いて出土した土師器環で、口径、器高、底径は推定でそれぞれ12.5cm、3.8cm、4.9cmである。赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。器外表面は底部から上半部にかけてヘラケズリ、上半部はナデ。内面はナデ調整のみ。0503は東壁寄りで出土した土師器環で、推定口径15.6cm。赤色粒子が混じる胎土で色調は赤褐色。0504は床面高より数cm浮いて出土した土師器盤で、推定口径29cm。長石粒子、雲母粒子が混じる胎土で、色調は暗赤褐色。器面はハケ調整されている。口縁は薄口縁型。0505は覆土から出土した土師質の鉢で、推定口径は32cm。長石粒子、赤色粒子が目だつ、さらついた胎土で、色調は明赤褐色。II-13グリッドのピット出土の土器片と接合した。5号住居跡に直接属する遺物ではないと思われる。**遺構の時期** 出土遺物は断片的で、確実に床面推定高から出土した資料はないため、推定は困難で平安時代に属するとだけ報告しておく。



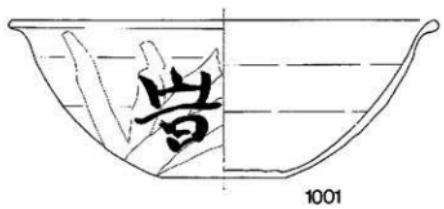
第58図 5号住居跡出土遺物 (1/2)

10号住居跡（第59図、第60図、図版22、23）

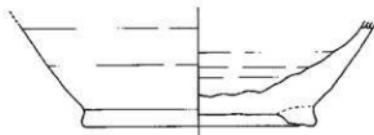
**遺構の位置と規模** H-11グリッド。4.5m×4.6m。カマド位置と特徴 東壁南寄り。カマドを構築した石材が残り、焼土も検出された。**遺構の特徴** 周溝、柱穴は検出されなかった。遺構覆土には拳大から人頭大の礫が多く含まれている。11号住居跡と近接する。**出土遺物** 1001はカマドのすぐ南側で、床面より数cm浮いた状態で出土した土師器環で、「塔」の墨書きがある。赤色粒子の混じるきめの揃った良質の胎土で色調は赤褐色。口径は17.1cm、器高6.4cm、底径5.1cm。1003はカマド内および周辺から出土した土師器窯で、下半部は失われている。器内面は指頭による調整のみである。厚口縁型。1004もカマド内から出土した土師器窯底部であるが、1003とは器外面のハケ幅、内面の調整法が異なる。底部にはほぼ丸く穴があき、上端の割れ口も平であることから、意図的にこのような形状にしたとも考えられる。窯のような用途が想定されるが、器外面には使用に際してついたと思われるような擦痕はみられない。1002は常滑焼のような陶器底部であるが、後世の混入品であろう。H-11～H-12グリッドにはこのような陶器片が散在している。1005は鉄製品で、ピンもしくは釘のようなものと思われるが形状ははっきりしない。**遺構の時期** カマド周辺の出土遺物からXII期頃と推測される。



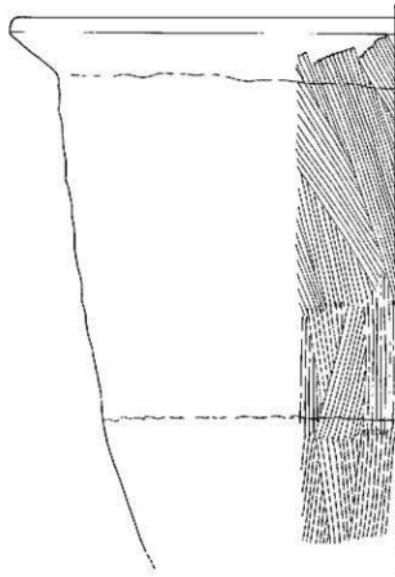
第59図 10号住居跡 (1/40)



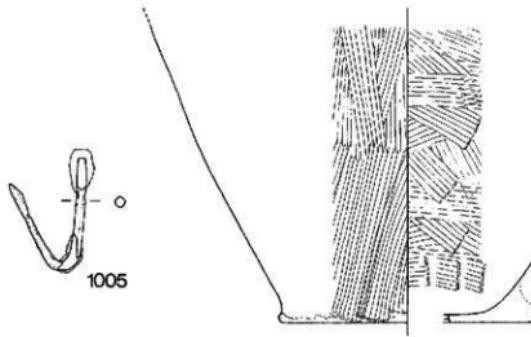
1001



1002



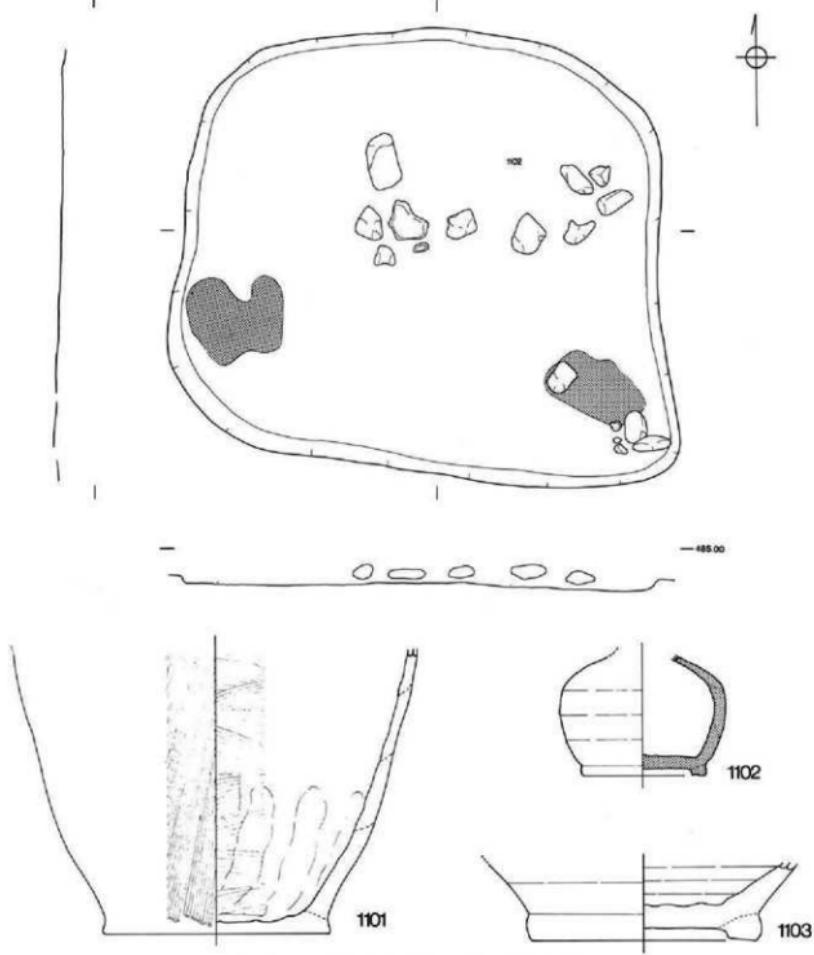
1003



1004

1005

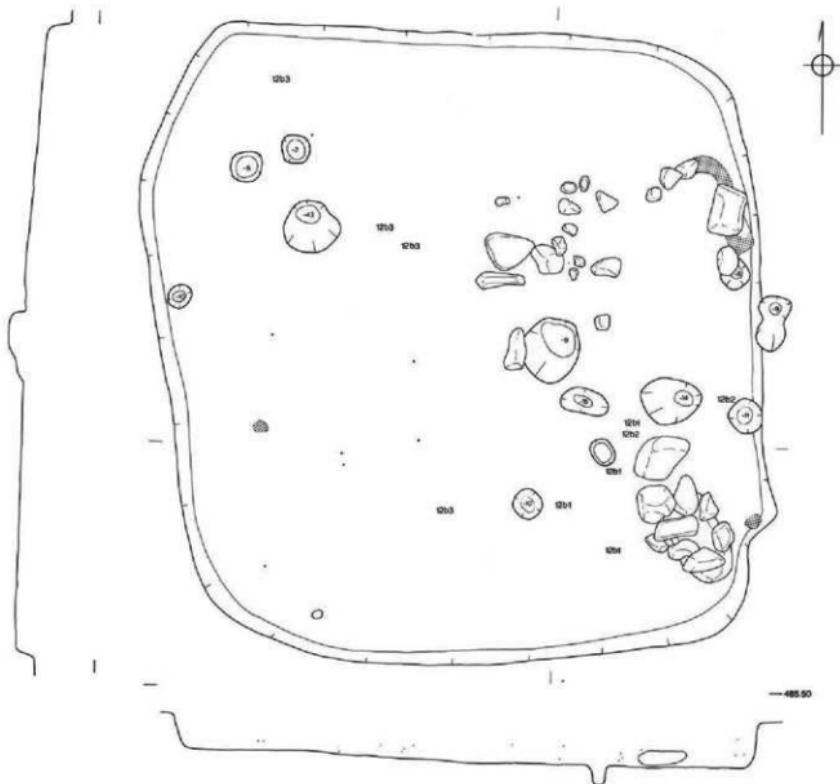
第60図 10号住居跡出土遺物 (1/2)



第61図 11号住居跡 (1/40) 及び出土遺物 (1/2)

### 11号住居跡 (第61図、図版23)

**遺構の位置と規模** H-12グリッド。東西3.9m×南北3.7m。 カマド位置と特徴 東壁南端。カマドの構築石材が残り、焼土が検出された。 遺構の特徴 周溝、柱穴は検出されなかった。遺構の南西隅にも炭が混じった焼土が検出された。 出土遺物 1101はカマドと東壁のあいだで出土した土師器底底部片で、推定径は9.4cm。1102は遺構の北東隅寄りで出土した須恵器小型長頸壺で、頸部より上は失われている。1103は10号住居跡出土の1002とよく似た常滑焼らしい陶器の底部である。後世の混入品と思われる。 遺構の時期 出土遺物が少なく、推測が困難である。平安時代に属することは確かであろう。また、10号住居跡と近接していることから両者が並存していたとは考えにくい。



第62図 12a号住居跡 (1/40)

### 12a号住居跡 (第62図、図版24)

**遺構の位置と規模** I-11グリッド。12a号住居跡は東西4.8m×南北5.1m。カマド位置と特徴 東壁南隅に位置する。カマドを構築したと思われる石材、焼土、掘り込みが検出された。また、東壁北寄りにも若干の石材と焼土が検出された。 遺構の特徴 周溝、柱穴、床面は検出されなかった。古墳時代の住居跡をほぼ重なって切っている。遺構は明瞭に確認されたが、出土遺物は小器片が僅かに出土したのみである。調査時点では遺構が重なっていることが確認され、上述のようにカマドらしい施設が2カ所にあることからそれぞれが平安時代の住居跡であると考えたが、遺物を整理したところそのほとんどが古墳時代のものであった。そこで、平安時代の住居跡を12a号住居跡(これも2軒が重複している可能性がある)、古墳時代の住居跡を12b号住居跡として報告しておく。 **出土遺物** 平安時代の出土遺物はいずれも小器片のみであった。カマドらしい施設周辺で須恵器小片が2点ほど出土している。 **遺構の時期** 出土遺物が断片的であるため、推測は困難である。カマドらしい施設の存在から12a号住居跡は平安時代と思われるが、出土遺物からは積極的に支持されない。

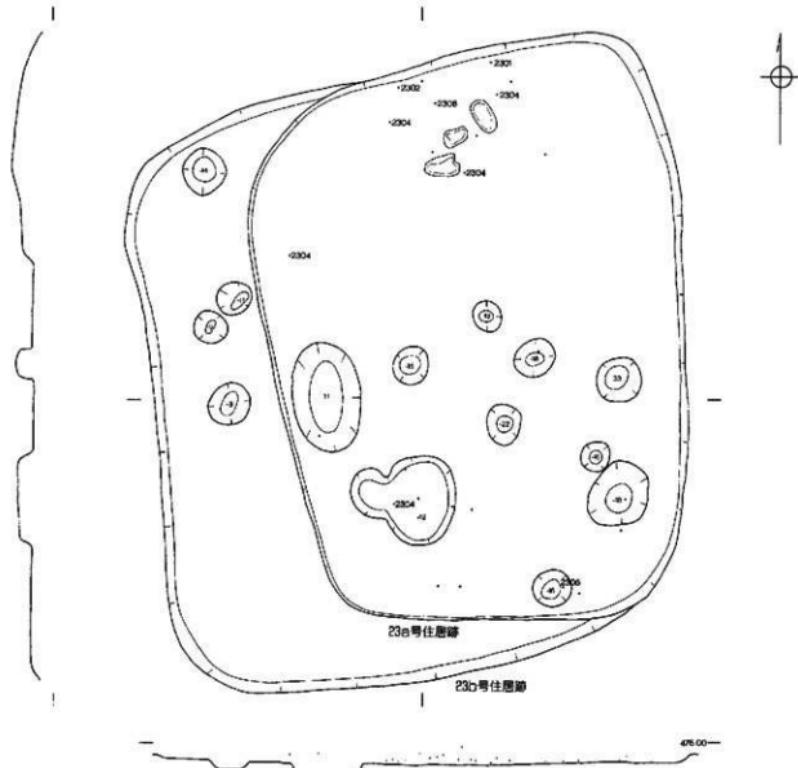
23a、b号住居跡 (第63図、第64図、図版25)

遺構の位置と規模 T-21グリッド。23a号住居跡は東西3.4m×南北4.6m。23b号住居跡は東西4.3m×南北5

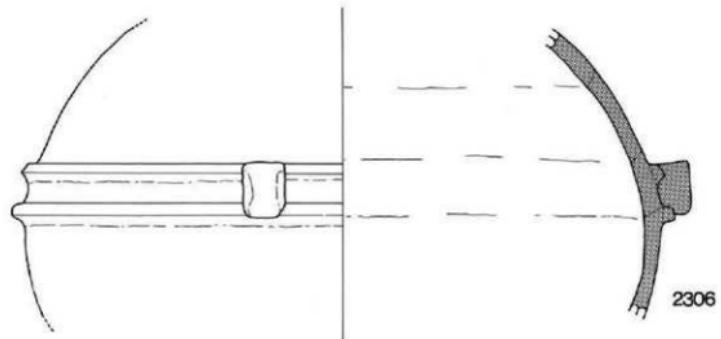
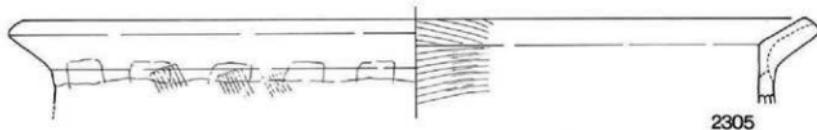
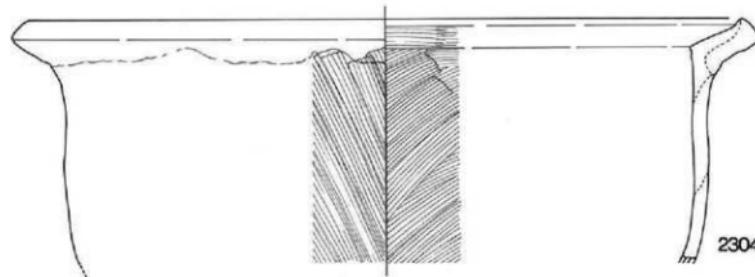
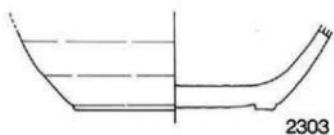
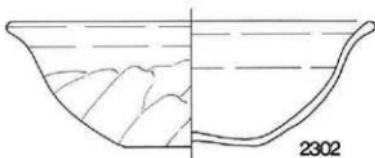
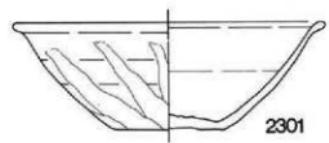
m。 カマド位置と特徴 北壁東寄りに遺物と石が集中するが、焼土は東壁南寄りに掘り込みとともに検出された。

遺構の特徴 2軒の住居跡が重複していると思われる。両住居跡とも遺存状態は非常に悪いが、遺構確認時には23b号住居跡だけが確認されたことから、23b号住居跡が新しいと判断した。カマドについても、北壁沿いの石と遺物の集中箇所が23b号住居跡に属するカマドであり、東壁沿いの焼土と掘り込みが23a号住居跡に属すると判断した。東壁を両住居跡が共有することからカマド位置を変更し、住居を拡張したと考えることもできる。

出土遺物 北壁沿いのカマドらしい施設周辺に遺物が集中して出土したが、遺物はいずれも小器片である。これらはおそらく23b号住居跡に属するものと思われるが、両住居跡ともに床面推定高がほとんど同じであるため、遺物の分離はできなかった。2301は北壁沿いのカマドと北壁のあいだで出土した土師器环片で、底部は全面がヘラケズリされている。赤色粒子が混じるきめの壊れた胎土で、色調は赤褐色。2302は2301と同じ位置で出土した土師器环で、胎土は2301と同様である。底部は全面がヘラケズリされる。2303は北壁沿いのカマド内で出土した土師器环で、内面は黒色処理されているらしく黒い。赤色粒子が混じる。砂っぽい胎土で、色調は乳白色。底部



第63図 23号住居跡 (1/40)



第64図 23号住居跡出土遺物 (1/2)



第65図 24号住居跡 (1/2)

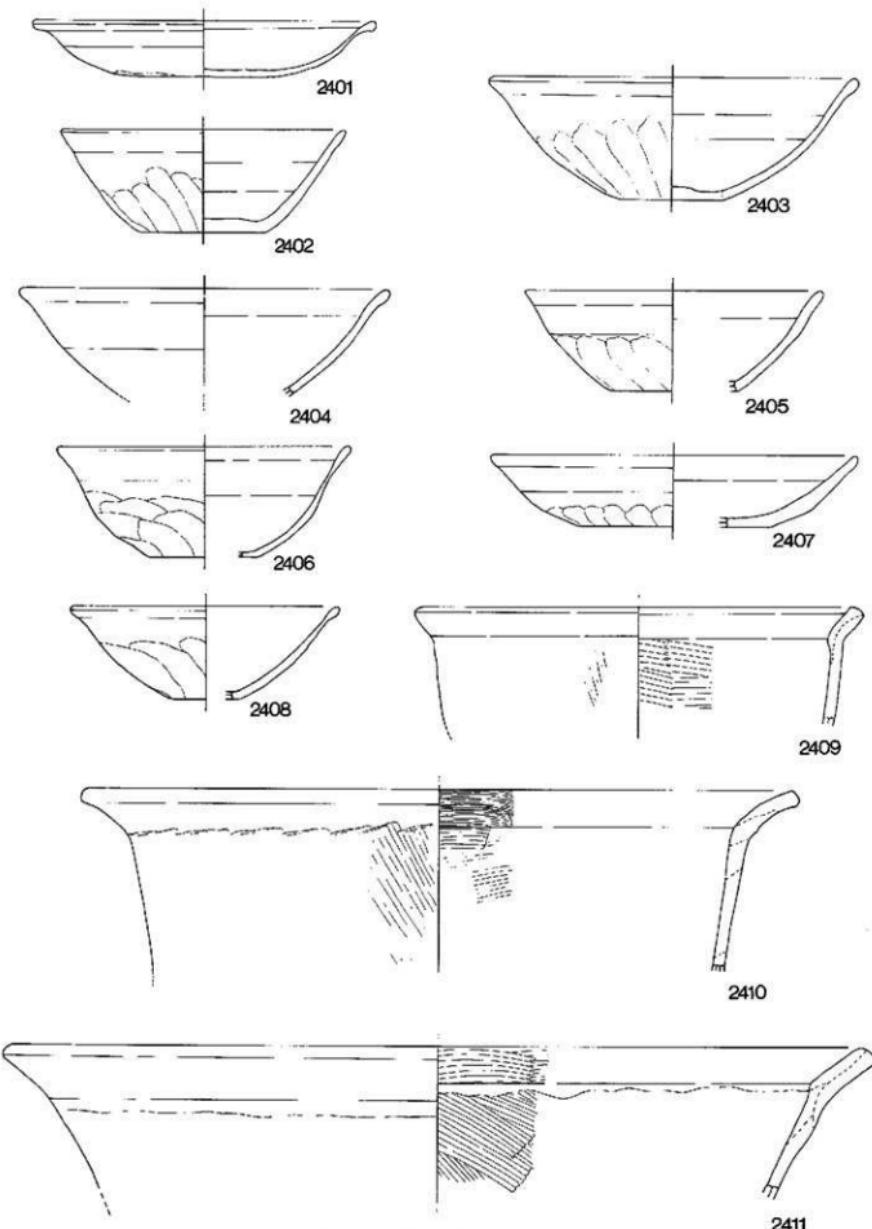
はヘラケズリされ、削りだし高台をもつ。2304は遺構全体に散在して出土した土師器甌で、推定口径30cm。金色の雲母粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。口縁は厚口縁型。2305は南壁沿いで2幕片のみ出土した土師器甌で、推定口径は33cm。長石、石英などの粒子が混じり、金色の雲母粒子はさほどめだたない胎土で、色調は赤褐色。口縁は厚口縁型。2306は北壁沿いで出土した須恵器甌の肩部器片である。器内外面にタタキ整形痕がみられ、器内面には輪積痕が明顯に残る。

**造構の時期** 出土遺物は小器片のみであるが、IX～X二期頃に属すると思われる。

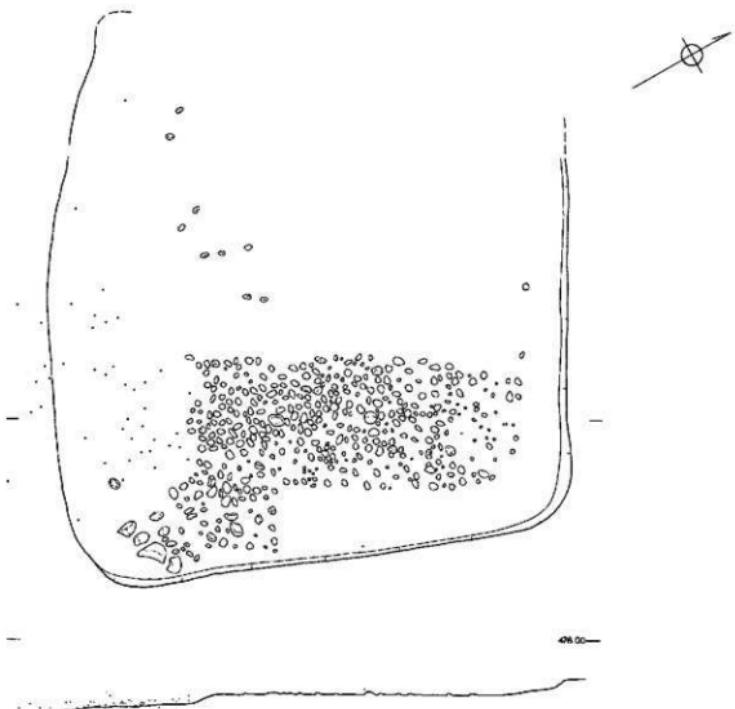
#### 24a, b号住居跡 (第65図、第66図、図版26、27)

**造構の位置と規模** 24a号住居跡は東西3.4m×南北3m。24b号住居跡は東西4.4m×南北3.7m。カマド位置と特徴 東壁南寄りで石が2個出土したが、焼土は検出されなかった。この石の周辺に遺物が集中した。また、北壁沿いには15cmほどの掘り込みがみられたが、焼土は検出されなかった。造構の特徴 23a、23b号住居跡の場合と同様に2軒の住居跡が、おそらく拡張により、重複している。23号と24号住居跡は互いに接するほどに近接しており同時並存は考えにくいか、密接な関係にあったことが推測される。造構確認時に24b号住居跡のみが確認されたことから、この住居跡が新しいと判断した。内住居跡とも、周溝、柱穴は検出されなかった。

**出土遺物** 出土遺物は東壁沿いのカマドと思われる施設周辺に多くみられ、出土した高さは24b号住居跡の床面推定高とほぼ同じである。のことからここに報告する遺物はいずれも24b号住居跡に属するものと思われる。2401は北壁沿いで出土した土師器皿で、口径14cm。底部とその周辺がヘラケズリされている。赤色粒子が混じるきめの揃った良質の胎土で、色調は赤褐色。2402は造構中央部で出土した土師器環で、口径11.5cm、器高4.2cm、底径5cm。赤色粒子、黒色雲母粒子の混じるきめの揃った胎土で色調は赤褐色。底部は全面ヘラケズリされている。2403は東壁沿いで散在していた土師器環で推定口径14.9cm、器高5cm、底径4.1cm。2404は推定口径15cmの土師器環で、器内外面ともナデのみで整形する。赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。2405は推定口径12cmの土師器環で、器外面下半は斜めヘラケズリ整形、赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。2406は推定口径12cm、器高



第66図 24号住居跡出土遺物 (1/2)

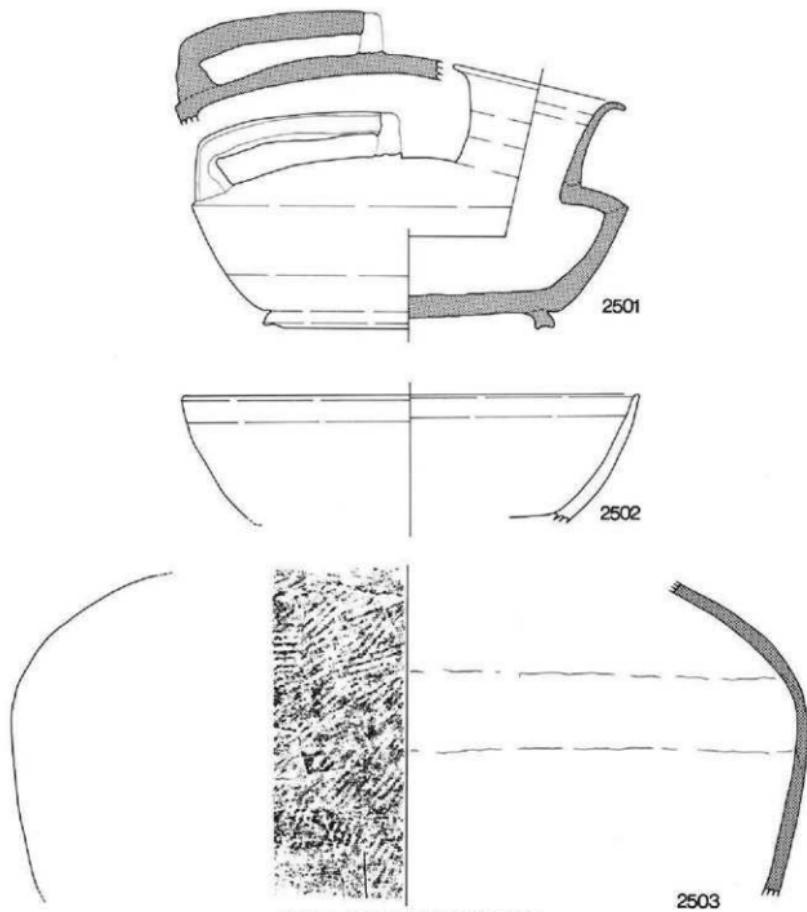


第67図 25号住居跡 (1/40)

4.5cmの土師器杯で、器外面下部は斜めヘラケズリ整形、赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。2407は推定口径14.8cmの土師器皿で、底部から器外面下部にかけてヘラケズリされる。赤色粒子が混じる胎土上で、色調は赤褐色。2408は推定口径10.8cm、器高3.8cmの土師器杯で、器外面は斜めヘラケズリ整形、底部は全面がヘラケズリされる。赤色粒子が混じる胎土で、色調は赤褐色。2409は小形の土師器甕で、推定口径18cm。雲母、長石粒子が混じるややざらついた胎土上で、色調は暗赤褐色。2410、2411は土師器甕で、推定口径はそれぞれ29cm、35.4cm。两者とも金色雲母、長石、石英粒子が混じるざらついた胎土で、色調は暗赤褐色である。 遺構の時期 24 b 号住居跡は出土遺物の特徴より X I ~ X II 期と思われる。また、23号住居跡と24号住居跡とのあいだで接合した遺物はなかった。

#### 25号住居跡 (第67図、第68図、図版28)

遺構の位置と規模 V-20グリッド。遺構規模不明。 遺構の特徴 遺構プランが明瞭に確認できなかつたが、遺物が集中して出土したため、住居跡と判断した。遺構確認面では37号住居跡に切られているように見えた。遺物の出土位置と高さを考慮すると25号住居跡と37号住居跡はここに報告する遺物を有する单一の住居跡である可能性もある。 出土遺物 2501は須恵器平瓶で、灰色の緻密な粘土を胎土とする。2502は土師器鉢と思われる。

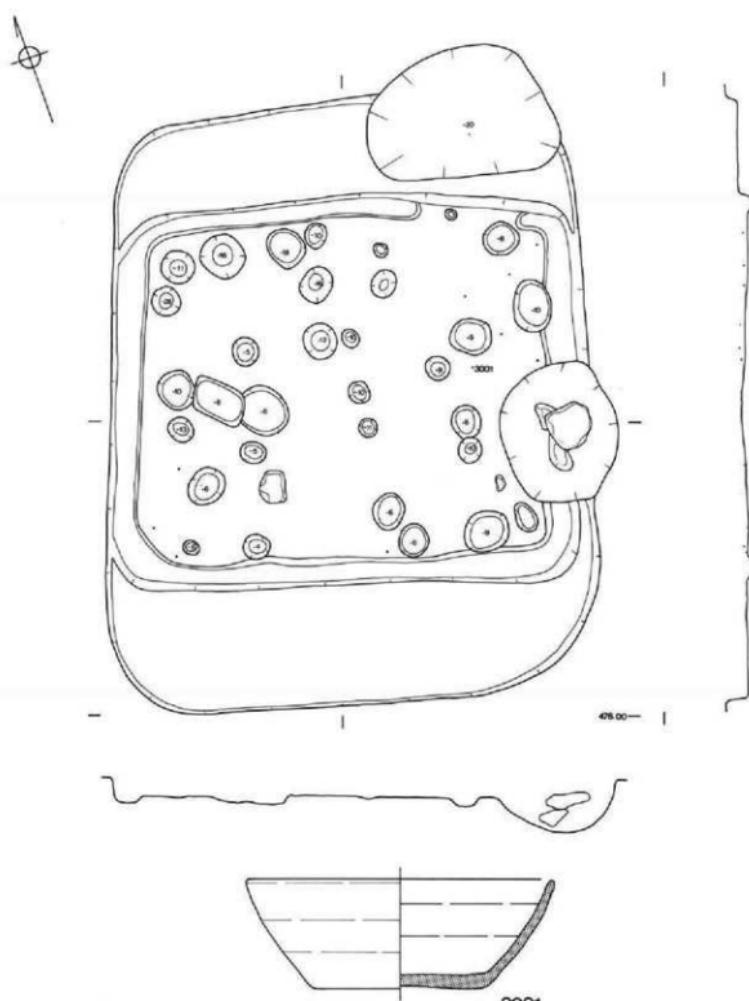


第68図 25号住居跡出土遺物 (1/2)

2503は須恵器壺である。 遺構の時期 出土遺物が限られるため特定し難いが、平安時代と報告しておく。

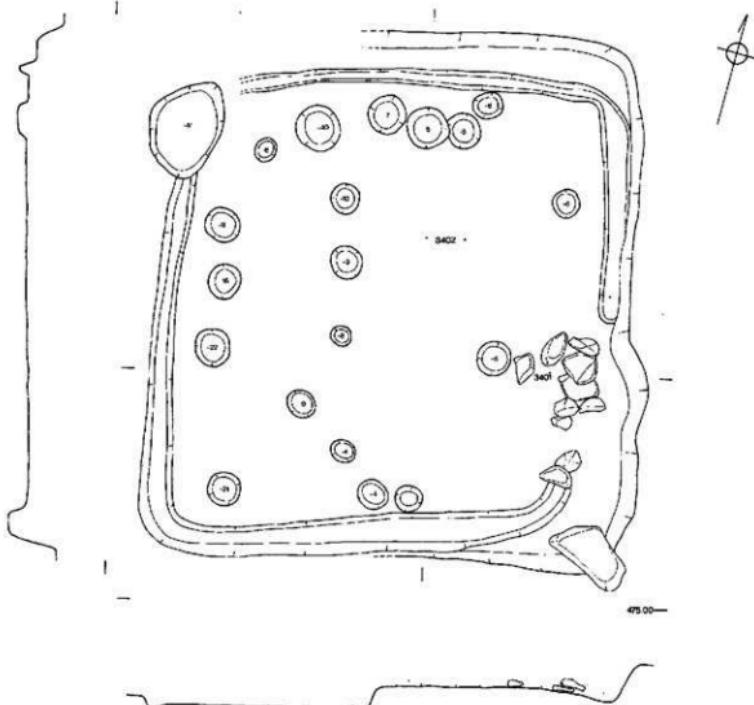
### 30号住居跡 (第69図、図版26、27)

遺構の位置と規模 T-23グリッド。東西3.8m×南北5m。 カマド位置と特徴 カマドらしい施設は検出されず、焼土もなかった。周溝が、北壁東寄りで切れ、遺物がその周辺に集中することから、この辺りにカマドがあったものと思われる。 遺構の特徴 周溝が検出された。南北に掘り込み高さが異なる張り出し部があるが、2軒の住居跡が重複しているのか、張り出し部が住居構造の一部なのか遺構確認面では判断できなかった。23号住居跡、24号住居跡と同じく拡張した新しい住居の竪穴が削平され、結果としてこのような状態で検出されたと考えることもできる。 出土遺物 3001は須恵器壺で、墨書きらしい痕跡がみられるが判読できない。そのほか30号



第69図 30号住居跡 (1/40)、及び出土遺物 (1/2)

住居跡では、土師器甕、环の小片ばかりが50点ほど出土している。 遺構の時期 出土遺物が少なく特定できないが、須恵器环の特徴からⅦ期頃かも知れない。



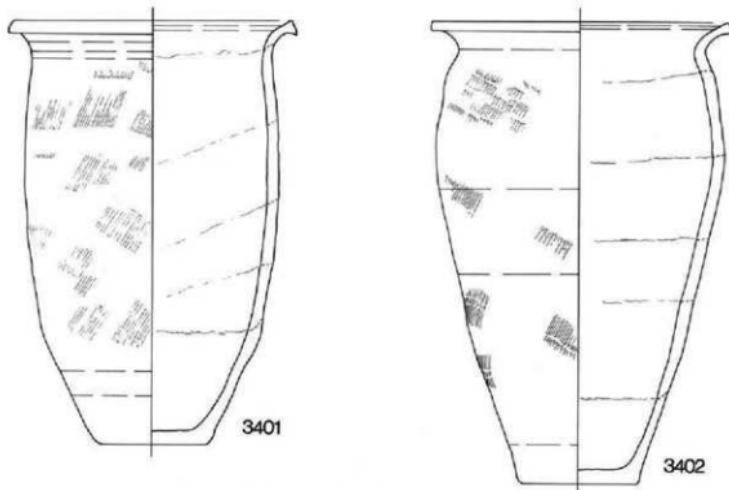
第70図 34号住居跡 (1/40)

#### 34号住居跡 (第70図、第71図、図版27、28)

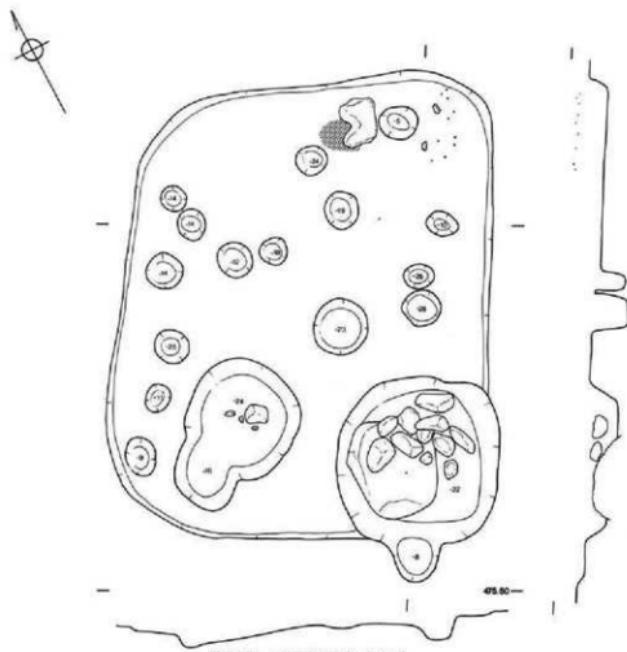
**造構の位置と規模** U-24グリッド。東西3.9m×南北4.3m。  
**カマド位置と特徴** 東壁南寄りにカマドを構築した石材、焼土、掘り込みが検出された。  
**造構の特徴** 周溝が検出された。住居跡の西半分は造田により床面以下まで削平されているが、掘り方と周溝によりプランは確認された。造構内にピットが検出されたが、この造構に直接属するものか確認できなかった。  
**出土遺物** 3401、3402とともにロクロ整形土師器甕で、瓦石紋了、赤色粒子が混じる砂っぽい胎上で、色調は乳白色。両者ともカマド周辺で主に出上した。  
**造構の時期** 時期を特定する材料は2点のロクロ整形土師器甕である。ロクロ整形土師器甕の編年はなお流動的であるが、山梨県韭崎市宮の前遺跡では、ほぼ同じロクロ整形土師器甕が宮の前III～VII期（8世紀第3四半世紀～9世紀第四半世紀）にみられ、ここでは奈良時代末から平安時代前半頃と考えておきたい。

#### 37号住居跡 (第72図)

**造構の位置と規模** V-21グリッド。東西約3m×南北3.8m。  
**カマド位置と特徴** カマドらしい施設は確認されず、焼土も検出されなかった。  
**造構の特徴** 造構確認面では25号住居跡を切っているように見えたが、25号住居跡、37号住居跡ともに明瞭にプランが確認できたわけではなく、単一の住居跡である可能性がある。  
**出土遺物** 遺物は小器片が数点出土したのみであった。  
**造構の時期** 平安時代と思われる。



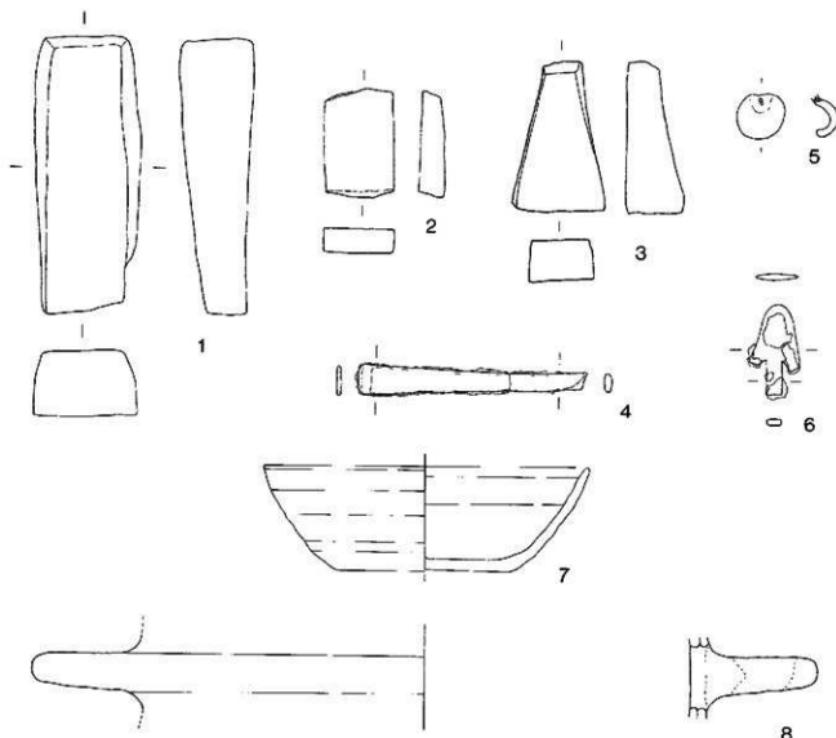
第71図 34号住居跡出土遺物 (1/4)



第72図 37号住居跡 (1/40)

### 遺構外出土遺物（第73図、図版29）

1は古墳時代前期の住居跡（7号住居跡）より出土した砥石である。出土状況からは古墳時代のものか確かではなかったため、ここに実測図を掲載した。2はJ-12グリッド出土、3はR-14グリッド出土の砥石である。5はW-24グリッドから出土した土錐片で、甲斐型土師器壺の胎土によく似た胎土である。大きさは1.85cm。4は刃子状の鉄製品である。6は鐵鎌で、I-12グリッドより出土した。7はT-23グリッドから出土した生焼けの須恵器壺で、推定口径13.2cm、器高4.3cm、底径7.2cm。雲母、長石、石英粒子を含む胎土で、色調は乳白色。T-23グリッドで検出された30号住居跡からほぼ同形の須恵器壺が出土している。8はT-21グリッドから出土した羽釜片で、推定銅部口径は32cm。金色雲母、長石、石英粒子が混じるざらついた胎土で、色調は暗赤褐色。



第73図 遺構外出土遺物 (1/2)

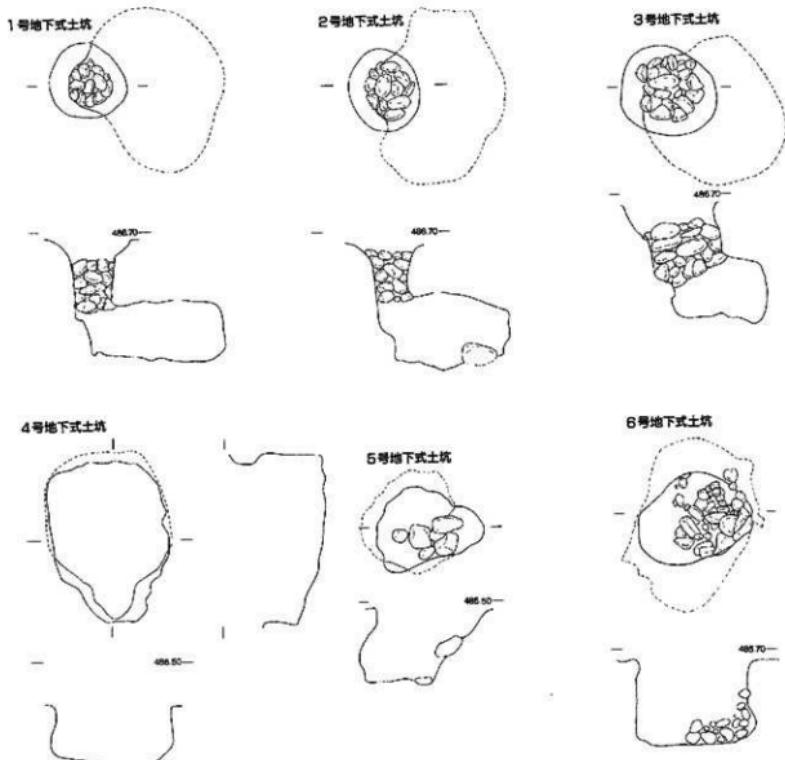
## 第7章 中世～近世の遺構と遺物

### 1号地下式土坑（第74図、第75図）

遺構の位置と規模 H-7グリッド。入口縦穴部は径1.2m、地下式土坑部は $2.6m \times 2m \times 0.9m$ 。遺構の特徴 入口縦穴部は人頭大の石で塞がれている。これらの石の中には壊れた石臼片（第75図3、5）も含まれている。土坑内から遺物は出土しなかったが、中世の地下式土坑と思われる。石臼片は4号地下式土坑から出土した石臼片（第75図6）と接合する。

### 2号地下式土坑（第74図、第75図）

遺構の位置と規模 H-8グリッド。入口縦穴部は径1.2m、深さ0.9m。地下式土坑部は $2.9m \times 2m \times 1.1m$ 。遺構の特徴 1号地下式土坑と同じく入口閉塞石には石臼片2点（第75図1、4）が含まれている。出土遺物はなかったが、中世の地下式土坑と思われる。



第74図 1号～6号地下式土坑 (1/80)

### 3号地下式土坑（第74図、第75図）

造構の位置と規模 H-8グリッド。入口堅穴部は $1.3m \times 2.2m \times 1.2m$ 。地下式土坑部は $2.4m \times 2.2m \times 1m$ 。  
造構の特徴 入口閉塞石には右臼1点（第75図2）が含まれる。出土遺物はなかったが、中世の地下式土坑と思われる。

### 4号地下式土坑（第74図、第75図）

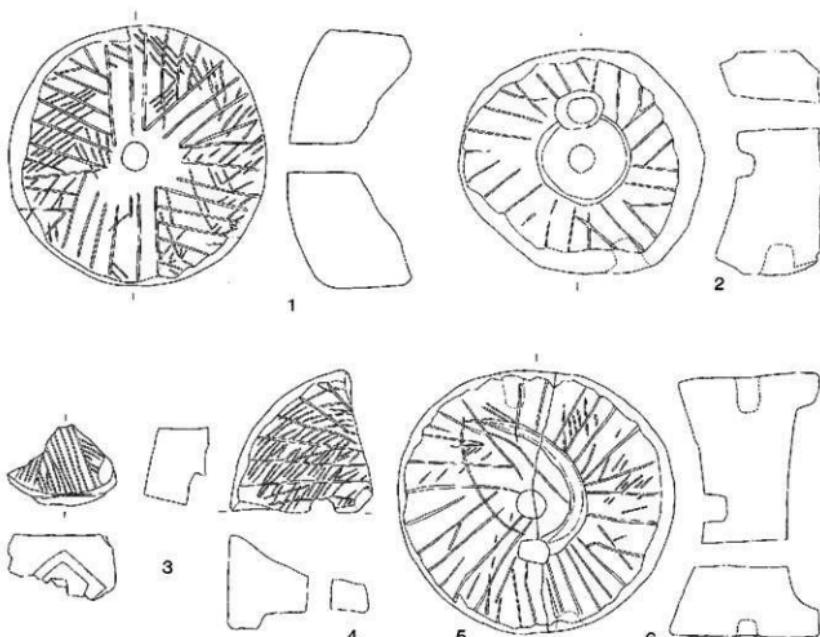
造構の位置と規模 H-9グリッド。地下式土坑部 $2m \times 2.9m$ 。造構の特徴 入口堅穴部及び天井は造出のため削平されている。石臼片（第75図6）が出土し、1号地下式土坑出土の石臼片と接合することから1号地下式土坑と4号地下式土坑は時間的に近接してつくられたと思われる。

### 5号地下式土坑（第74図）

造構の位置と規模 I-10グリッド。地下式土坑部 $1.5m \times 1.6m$ 。造構の特徴 入口堅穴、天井は削平されている。遺物は出土しなかった。中世の地下式土坑と思われる。

### 6号地下式土坑（第74図）

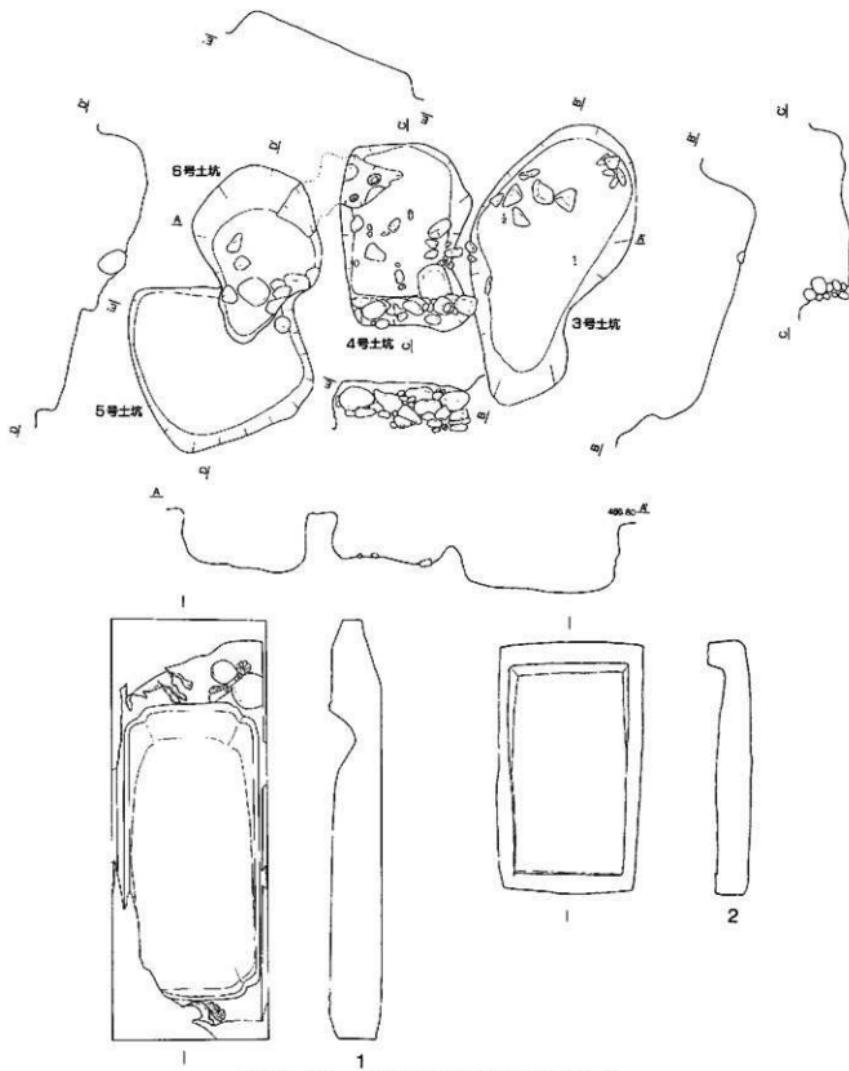
造構の位置と規模 I-11グリッド。地下式土坑部 $2m \times 2.8m$ 。造構の特徴 入口堅穴、天井は削平されている。遺物は出土しなかった。中世の地下式土坑と思われる。



第75図 地下式土坑内出土遺物 (1/6)

3号、4号、5号、6号土坑（第76図）

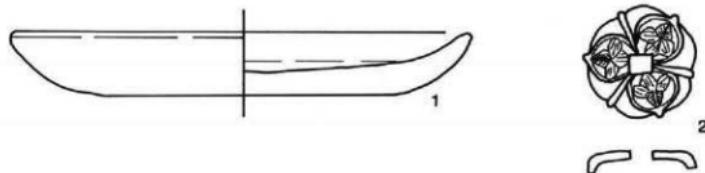
遺構の位置 1~9グリッド。 遺構の特徴 いずれも入口堅穴と天井が削平された地下式土坑と思われる。4号土坑の西壁は地山が砂であるため、崩落を防ぐためと思われる石垣を設けてある。3号土坑より甕が2点（第76図1、2、回石1点（第78図1）、第4号土坑より回石1点（第78図4）が出土している。



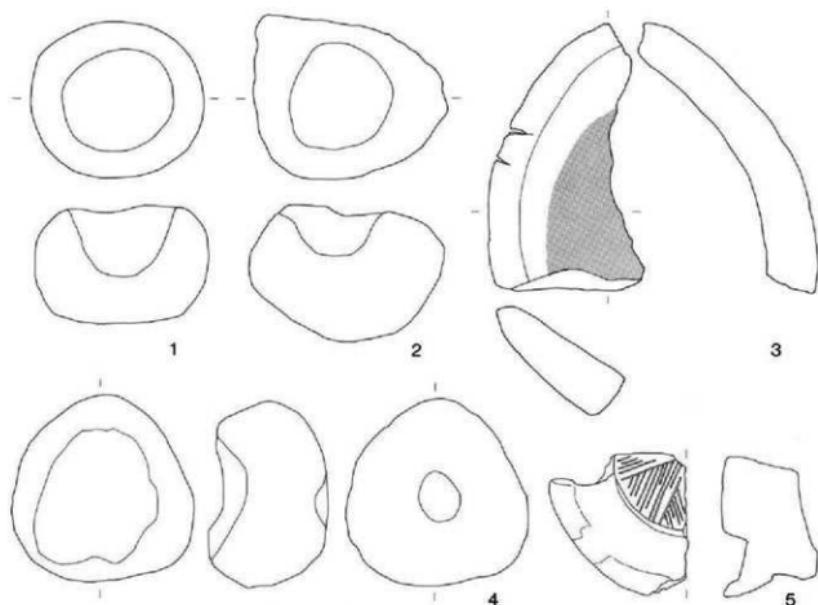
第76図 3号~6号土坑 (1/80) 及び出土遺物 (1/2)

遺構外出土遺物（第77図～第79図、図版29）

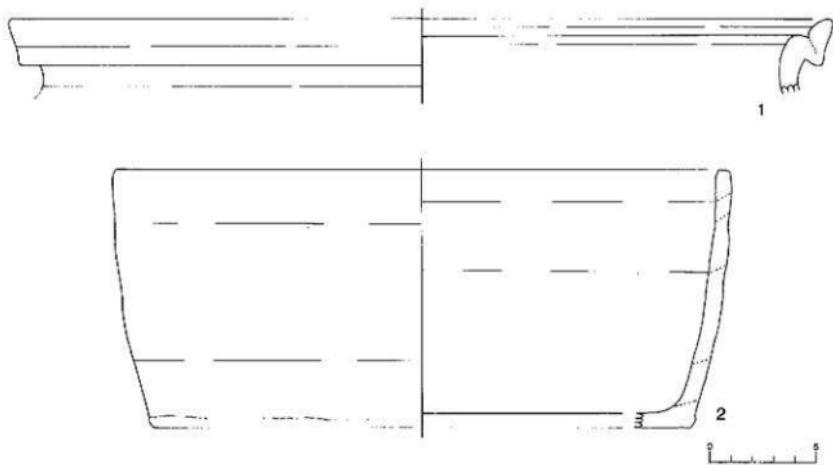
中・近世の遺物が遺構外から出土している。第77図は出土位置不明のかわらけと鐵製（？）のこうがい金具。第78図 2 は、I-11グリッド溝状造構より出土した凹石、3はG-13グリッド出土の安山岩製石皿、5は試掘の際、A区とB区の中間地点から出土した石臼片である。第79図 1 は常滑焼窯口縁部、2はG-10グリッド出土のはうろく。F-8グリッドからは古銭が出土している。



第77図 遺構外出土遺物（1/1）



第78図 遺構外出土石器（1/3、5のみ1/6）



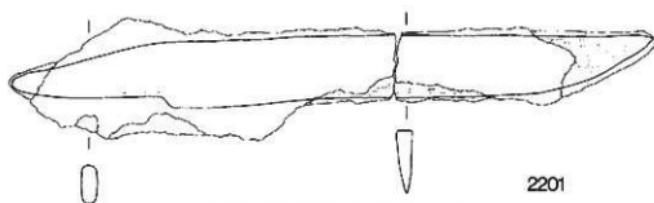
第79図 遺構外出土遺物

## 第8章 時期不明の遺構

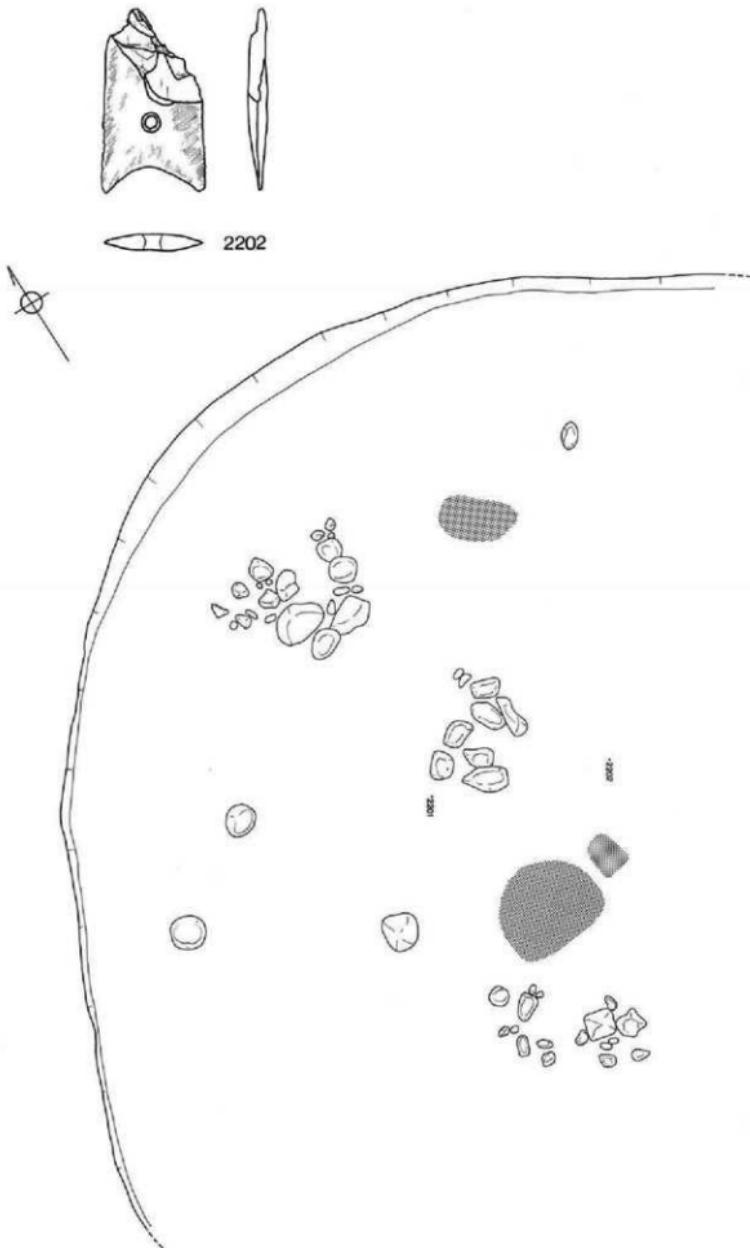
時期不明の遺構は、堅穴状の遺構と上坑群が出上した。堅穴状遺構は調査当初、住居跡と思われたため22号住居跡として扱ったが、床面など住居跡としての属性をもたないと判断した。

### 22号住居跡（第80図、第81図、図版29）

**遺構の位置と規模** H-13グリッド。遺構規模は不明。**遺構の特徴** 旧河道黒色土中の確認面では炭が混じり、いっそう黒い土色の部分がみられたため、住居跡として調査を始めたが、床面、焼土、カマドなどの施設は検出されなかった。出上した遺物は古墳時代から平安時代の土器小片がわずかと、鉄製品、磨製石鏡1点であった。**出土遺物** 2201は鉄製短刀であり、漆と思われる塗料と鞘と思われる木質部、刀身に分かれる。2202は緑色片岩製の磨製石鏡である。



第80図 22号住居跡出土遺物 (1/2)



第81図 22号住居跡 (1/40) 及び出土遺物 (1/1)

### 1号土坑（第82図）

遺構の位置と規模 E-4グリッド。2.3m×2.5m、深さ0.7mの方形の土坑で2mほどの張り出し部がある。遺構の特徴 張り出し部は階段状になっている。E-4グリッドあたりは少なくとも50cm以上削平されており、もっと深かったかあるいは地下式土坑であったかもしれない。遺物は出土しなかった。

### 2号土坑（第82図）

遺構の位置と規模 E-4グリッド。2.9m×2.6m、深さ0.6mの方形の土坑。遺構の特徴 1号土坑と並んで検出された。土坑底に2列の石列がある。遺物は出土しなかった。

### 1号石積土坑（第83図、図版29）

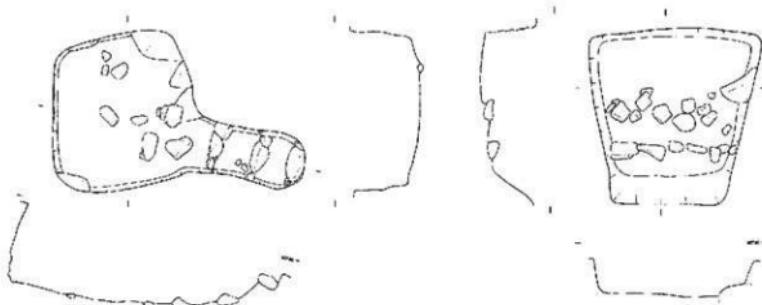
遺構の位置と規模 D-3グリッド。2.6m×2.3m、深さ0.6m。遺構の特徴 円形土坑の内壁に石が積まれている。井戸に似ているが、浅いため湧水か流水を一時的に溜め置く施設だったと思われる。この土坑から南に向かう溝状造構が検出されている。遺物は出土しなかった。

### 2号石積土坑（第84図、図版29）

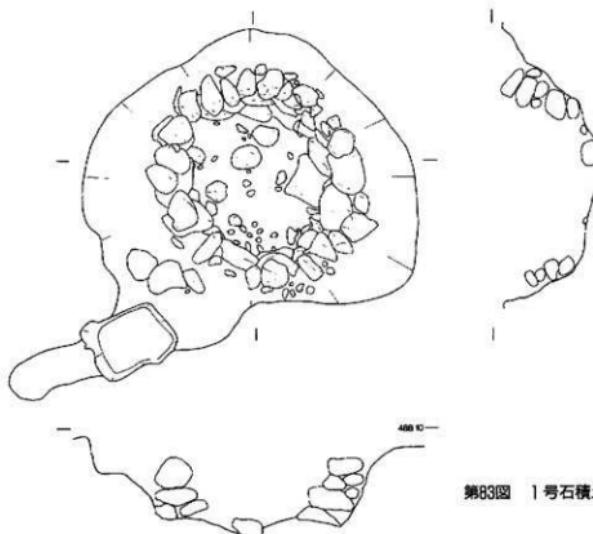
遺構の位置と規模 F-9グリッド。径1.3m、深さ20cmほどの浅い土坑。遺構の特徴 浅い掘り込み状の土坑内に拳手の蝶30個ほどがいれられている。土坑覆土から焼土、炭などは検出されなかった。石棒状の石片が1点含まれている。蝶が被熱した痕跡はみられなかった。遺物も出土していない。石棒状の石片から绳文時代の土坑と思われるが、遺物が全く出土していないため、時期不明として報告しておく。

### 1号土坑群（第85図、図版29）

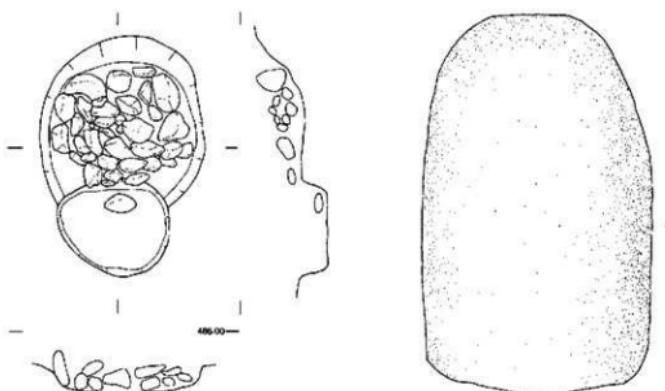
遺構の位置 C-3グリッド。遺構の特徴 径1m前後、深さ50cmほどの土坑が60基ほど集中している。土坑それぞれの切り合い関係は確認できなかった。遺物は平安時代のかなり磨耗した小土器片が数点出土したのみである。中世の土器墓かとも思われるが、積極的に時期を推定する資料がないため、時期不明として報告しておく。



第82図 1号（左）、2号（右）土坑 (1/80)



第83図 1号石積土坑 (1/40)



第84図 2号石積土坑 (1/40) 及び出土石棒 (1/2)

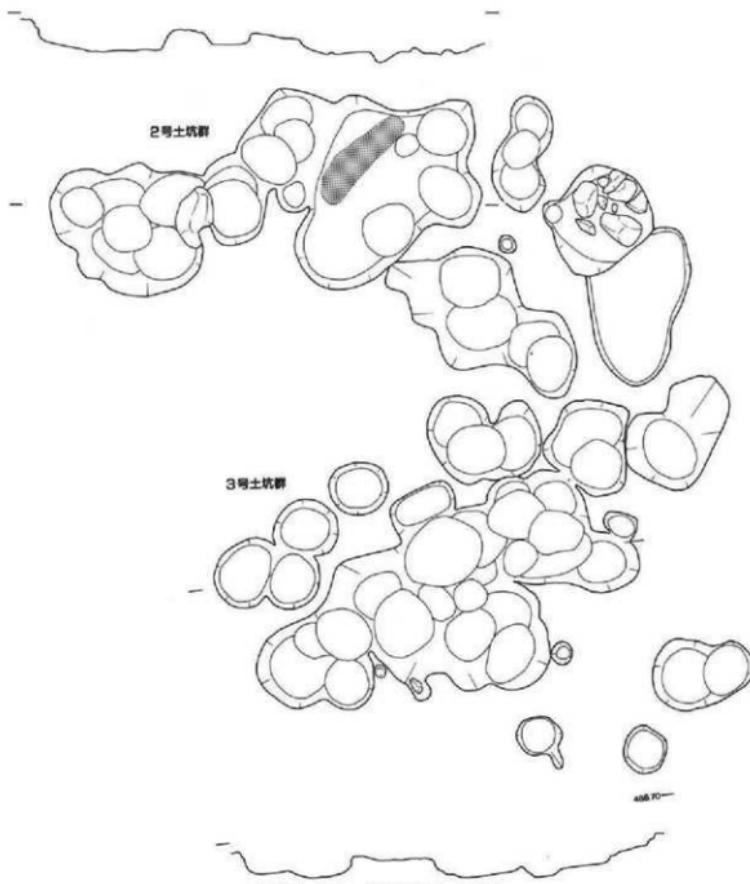


第85图 1号土坑群 (1/100)

## 2号、3号土坑群（第86図、遺構全体図）

遺構の位置 F-8グリッド。 遺構の特徴 1号土坑群と同様で、中世土坑墓らしいが、時期不明としておく。

その他の土坑、ピットは出土遺物もなく、掘立柱建物を構成するピット群も確認できなかったため、時期不明の遺構としておく。ピットは調査区全体をみると造田による削平が少ない箇所で検出されており、元来は調査区全体にわたって分布したものと思われる。1号石積土坑からI-10グリッドにかけて断片的に溝状遺構が検出されている。1号石積土坑と関連した用水施設ではないかと思われる。



第86図 2号、3号土坑群 (1/100)

## 第9章　まとめ

神取遺跡では山梨県内で初めて縄文時代草創期のまとまった資料が出土した。2章まとめでは細降起線文土器、爪形文土器にともなう石器組成を想定し、尖頭器製作を含む広範な活動が行われたとの見方を提示してみた。調査者の浅学非才から充分な検討がなし得ず、2章とともに提示した石器組成も今後の検討で見直すべき点もあると思う。先学諸氏の御叱正を待ち再論したい。そこで、ここではここまで考察を加えていない古墳時代前期と平安時代のうち、すでに明野村で8遺跡の調査成果の蓄積がみられる平安時代について簡単な検討をしてみたい。

山梨県北西部は、古墳時代に濃厚な遺跡分布が認められながら奈良時代には一転して遺跡が減少し、平安時代に再び遺跡数が爆発的に増加する地域であることがすでに先学により指摘され、その背景に官牧の設置、朝廷の東北経営強化とともに東山道周辺地の活性化、「葛原親王駿出」による公田經營等が挙げられている（萩原1986、末木1986、岡本1990、第1章引用参考文献参照）。これら仮説を評価する好材料はあるにく明野村内の調査例には今とのところ見いだせないが、これまで論じられることの少なかった茅ヶ岳山麓の平安時代の動向をここで試みに検討してみたい。下図には明野村で調査された8遺跡の住居跡の時期を示した。図中の横棒1本が1住居跡の時期を示している。住居跡には時期が特定できず複数期にわたる推定をせざるを得ないものもある。そうした住居跡については複数期としたまま表示した。北原、薬師堂、池の下、中村道祖神の各遺跡はその位置から宮後遺跡と同一集落として扱ってよいのではないかと思われる。

この図からは明野村の平安時代集落がⅧ期に出現し、Ⅹ期からⅪ期に住居跡数のピークを迎える、Ⅻ期に集落が解体するという様子がみてとれる。Ⅷ期は普門寺遺跡のほかは今のところ確定的な例がみられず、多くの集落はⅨ期に形成され始めるとみるのが確実である。次に出土遺物の内容についてみると、墨書き土器は屋敷添遺跡、神取遺跡で出土しているが、宮後遺跡では1点もみられない。94年に調査され、現在遺物を整理中の高台・中谷井遺跡でも墨書き土器が出土しており、下保坂遺跡では「市」の墨書きがある土器器形が採集されている。これら墨書き土器が出土している遺跡はいずれも鶴沢川以南に位置し、屋敷添遺跡、下保坂遺跡、神取遺跡は塩川段丘端に立地する。灰釉陶器は宮後遺跡、屋敷添遺跡の住居跡に灰釉陶器保有率は16%、宮後遺跡では19%程度である。両遺跡とも特定の住居跡に灰釉陶器がまとめて出土する傾向がみられる。八ヶ岳南麓地帯と比較するとその保有率は決して高いとはいえない。平安時代遺跡の調査で樹立柱遺物が検出された例は北原遺跡で2棟、宮後遺跡で2棟がある。明野村は小さな尾根が東西にはする傾斜地で造田による削平が著しく、掘立柱建物のような遺構の残存状況はよくないと考えられるため、この検出数が多いのか少ないのかは判断し難い。明野村の調査は県營圃整備事業者工順にしたがって、北から南に向かって進められてきた。そのため、藤井平中根部に近い三之蔵地区周辺はまだ未調査である。後期古墳群のあるこの地域が調査されることになれば、この傾向はさらに顕著になるかも知れない。

このような茅ヶ岳山麓の平安時代集落の動向を先の萩原氏らの解釈のなかにどう位置づけ、評価するかは筆者の力量を越えるところで、確たる意見を述べることはできない。しかし、Ⅷ期（9世紀第2四半期）に形成される集落遺跡が多い傾向は、巨摩郡に官牧が設置された時期により合致する。八ヶ岳南麓と同様の集落の消長をたどりながらもその開始期が微妙に食い違う点からは、茅ヶ岳山麓では開発要因を二者状一的に假定して考えるより、官牧設置と親王駿出の2つの出来事がかかわっていると考えてもよいようと思われる。明野村の平安時代集落が、遺物のあり方から鶴沢川以北以南の2通りに分かれる可能性があることもそうしたことを探しているかも知れない。高台・中谷井遺跡などの調査結果がまとまった段階で再度、茅ヶ岳山麓の様相を見直してみたい。

遺跡名	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	Ⅼ
普門寺遺跡							
北原遺跡							
薬師堂遺跡							
池の下遺跡							
中村道祖神遺跡							
宮後遺跡							
屋敷添遺跡							
神取遺跡							

茅ヶ岳山麓の平安時代集落跡の継続（時期は甲斐型土器研究グループ 1992による）

## 付編 神取 I 遺跡のテフラ

山梨文化財研究所 河西学

### はじめに

本遺跡は、茅ヶ岳西麓で塩川左岸の河岸段丘上に位置し、縄文時代草創期の遺物が出土している。この段丘面は、三村（1967）のⅢ面、八ヶ岳固体研究グループ（1988）の神取面に相当する。遺跡での堆積物は、青灰～灰色砂層（VI・VII層）、褐灰色砂層（V層）など河成の段丘堆積物上にI～III層の暗褐色砂質土層が堆積している。VI・VII層は分級が良好で、上方細粒化傾向が顕著である。VI層中に褐鉄鉱の沈着が認められる。最上部のI層は、暗褐色～黒褐色で粘性が強く水田土壤として使用されていて、盛り土の可能性がある。III層にはよい褐色を呈する。II層からは縄文時代草創期後半～早期の遺物が、III層からは縄文草創期中葉の遺物が出土している。平安時代の遺構はI層からIII層へ掘り込んでいる。ここでは遺物包含層をテフラ層序学的に位置づけることを目的として以下のテフラ分析を行った。

### 試料・分析法

試料は、本遺跡の北壁断面において、鉛直方向に5cmおきに高さ5cm幅10cm奥行5cmの部分から採取した。

試料は、洗ったまま約20gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析筒（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析筒（#60、#250）を用いて $>1/4\text{mm}$ および $1/4\sim1/16\text{mm}$ の粒径に分級し、秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量および含水率は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間乾燥して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、 $1/4\sim1/16\text{mm}$ の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。1試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が500粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型として区別した。また火山ガラスの屈折率は、位相差型偏光顕微鏡による浸液法（新井、1972）で測定した。

### 分析結果

火山ガラスの屈折率測定値を第1表に示す。偏光顕微鏡下での計数結果を第2表に示す。これをもとに含水率（注1）、粒径組成、 $1/4\sim1/16\text{mm}$ 全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第1図に示す。なお $1/4\sim1/16\text{mm}$ 全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径の火山ガラスの割合で表示した（注2）。

試料の含水率は27.4~37.4%とあまり明瞭な変化はない。粒径組成では、 $1/4\text{mm}$ 以上粒子が褐灰色砂層のNos. 6~7で18.5~20.3%とやや多い。 $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径でもNos. 6~7で38.1~42.9%の極大部を形成し上方に漸減する傾向がある。

$1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径の全火山ガラス含有率は、No. 7の5.2%を最大にして上方に減少する。形態別では、下部の砂層中Nos. 6~8において無色の多孔質型火山ガラス（F・F'型）が卓越しB・C型を伴うのに対し、暗褐色砂質土層Nos. 1~5ではバブルウォール型火山ガラス（A・A'型）が特徴的に出現しF型も含まれる。

第1表 火山ガラスの屈折率測定値と対比

試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率（モード）	対比されるテフラ
No. 4	バブルウォール（A・A'）型	無色	1.498~1.501 (1.500)	始成Tn火成灰 (AT)
No. 8	軽石（F・F'）型	無色	1.499~1.505	黒富士火碎流か？

A・A'型火山ガラスの含有が極大を示すNo.4での火山ガラスの屈折率は1.498~1.501(モード1.500)であることから、これらの火山ガラスは姶良Tn火山灰AT(町田・新井1976)に対比される。ATは約2.1~2.2万年前に南九州姶良カルデラから噴出した大規模な広域火山灰であり甲府盆地周辺の褐色ローム層中から検出されている。

砂層中に多く含有されるF・F'型火山ガラスの屈折率は、No.8において1.499~1.505である。これらの火山ガラスは、AT火山ガラスより含有率が高率であること、火山ガラスの形態的特徴、屈折率が御岳テフラなどとは異なること、デイサイト・安山岩のほか泥岩・花崗岩類など周辺地質に由来する岩片とともに河成堆積物中に混入していることなどから、黒富士火碎流の碎屑物に由来する可能性が高いと考えられる。

重鉱物組成では斜方輝石・單斜輝石・角閃石・不透明鉱物から主としてなり、酸化角閃石・黒雲母を作う。試料ごとに含有率が若干異なるものの大さくは類似性の高い組成が連続しているととらえられる。これらの重鉱物組成は、黒富士・茅ヶ岳火山噴出物からの碎屑物の影響が反映された組成である。すなわち遺跡周辺の河成・風成堆積物は、主として黒富士・茅ヶ岳山麓に分布する岩石の碎屑物が二次堆積することによって形成されたと考えられる。

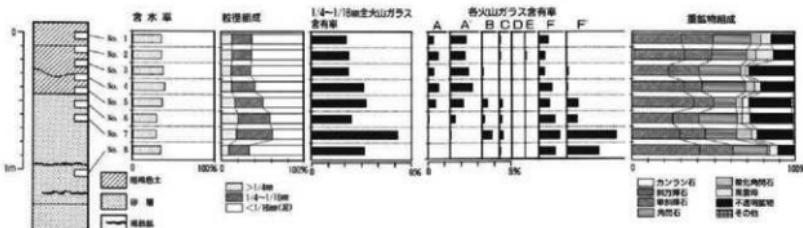
ここで問題はATの降灰層準をどこに設定するかである。二通りの考え方がある。

ひとつは、A・A'型火山ガラスの極大部をAT降灰層準とする考え方である。褐色ローム層が連續して堆積している場合にはバブルウォール型火山ガラスの含有率極大部下部付近にAT降灰層準が設定される。褐色ローム層中のAT降灰層準でのA'型火山ガラスの含有率極大値は、丘の公園第2遺跡で4.58%、丘の公園第6遺跡で2.43%、市野瀬台地の長田口遺跡で0.64%、曾根丘陵立石遺跡で1.08%を示す(河西1989、1990a、1990b、1992)。本遺跡での含有率1.37%は、環境が異なるため単純には比較できないが八ヶ岳南東麓地域の含有率よりも低いが、甲府盆地南部から西部地域のAT降灰層準よりも高率であることから、AT降灰層準だとしても大きな矛盾はない。この場合、本遺跡のAT降灰層準はNos.4~5付近のⅢ層中下部に推定され、神取面は約2.2万年前にはすでに段丘化していたことになる。

他の考えは、バブルウォール型火山ガラスの極大は二次堆積による見かけのピークでAT層準はより下位に位置しているとするものである。本遺跡の場合河成堆積物の直上にバブルウォール型火山ガラスの極大部が位置す

第2表 神取I遺跡試料の計数、鉱物粒数  
(+は計数以外の検出を示す、\*はスコリアを含む)

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
A 褐色	7	34	8	12	7	1	+	
A' 褐色	21	19	24	25	12	4	1	+
B 褐色	1	1	1	1	1	1	1	1
B' 褐色	+	1	2	1	8	2	6	1
C 褐色	2	2	1	1	3	2	3	2
C' 褐色								
D 緑褐色								
E 褐色	2	1	1	1	1	1	1	1
F 褐色	12	8	8	14	9	13	14	22
F' 褐色	1	1	1	1	1	1	1	1
F'' 褐色								
F''' 褐色								
石英	36	60	60	38	34	50	32	14
長石	1	1	1	1	1	1	1	1
斜長石	202	216	214	209	191	183	199	220
カリ長石	1	1	1	1	1	1	1	1
カリ輝石	34	26	20	23	26	25	31	31
斜方輝石	21	13	16	11	11	16	13	19
角閃石	27	18	22	27	13	23	16	16
鈣化角閃石	7	5	3	6	4	3	8	1
ジルコン	+	1	1	1	1	1	1	1
榍石	7	9	2	4	4	5	3	4
隕石	1	1	1	1	1	1	1	1
不透明鉱物	17	11	23	22	25	27	19	8
その他	104	111	99	102	132	133	133	123
合計	500	500	500	500	500	500	500	500



第1図 神取I遺跡試料の含水率、粒径組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成

る。塩川の離水以前の段丘堆積物形成期にATが降灰したとしても、砂質の河川堆積物中にATの一次堆積層が保存されることはまれと考えられる。また砂層が形成される場合AT火山ガラスに比して多量の堆積物が運搬・堆積するため、砂層中にATの二次堆積火山ガラスを検出することは困難が予想される。さらに風成層中においてはAT火山ガラスが降灰以降も上下の層位に、次的に移動している現象が普通に認められる。浅尾新田がのる一段高位の河岸段丘面は、II面（三村1967）あるいは小池平面（八ヶ岳団体研究グループ1988）と呼ばれている。II面は約8万年前の御岳第一軽石On-Pm1以上のテフラにおおわれていることから上部の褐色ローム層中にATが挟在されているはずである。神取面での風成層中にII面（小池平面）など上位の地形面からAT火山ガラスを含む二次堆積物が供給されたと推定することも可能である。なお小池平面に立地する白石1遺跡で褐色ローム層（III～V層）中にバブルウォール梨火山ガラスが高率で検出されATの可能性が指摘されているが、明瞭な降灰層準についてははっきりしていない（金田1989）。

上記のどちらの推定が正しいかは、今後神取面でのデータの蓄積および高位の段丘面などのAT火山ガラス含有率曲線との比較などによって解決されるものと考えられる。

注1 全重量に対する水分量の割合。湿重基準含水率。

注2 形態X型の火山ガラスの含有率Axは、

$$Ax (\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$

で算出される。ただし、

B：試料の乾燥重量 (g)

C：1/4～1/16mm粒径砂分の重量 (g)

D：計数した1/4～1/16mm粒径粒子の総数

Ex：計数したX型火山ガラスの粒数

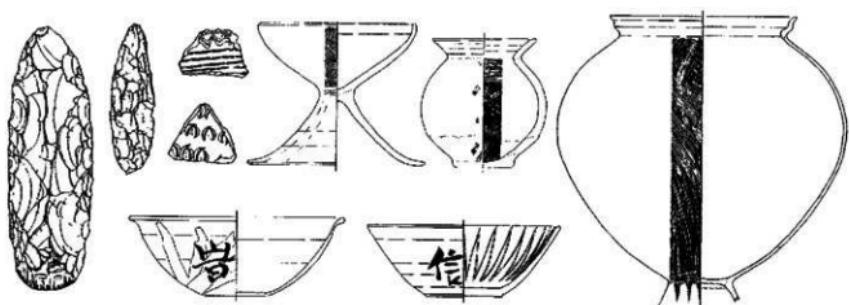
## 文 献

- 金田信行（1989）白山I遺跡の砂粒組成・重鉱物組成。明野村文化財調査報告4「踏石遺跡・薬師堂遺跡・白山I遺跡」46-50
- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の剥離率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究 第四紀研究11 254-269
- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学13 19-30
- 河西学（1989）丘の公園地域のテフラと地形。山梨県埋蔵文化財センター調査報告第46集「丘の公園第2遺跡発掘調査報告書」165-184 山梨県教育委員会
- 河西学（1990a）丘の公園第5遺跡・第6遺跡のテフラ 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集「丘の公園第5遺跡発掘調査報告書」33-41 山梨県教育委員会
- 河西学（1990b）立石遺跡での先史器遺物を含む地層 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要6 47-58
- 河西学（1992）樹形町長田口遺跡のテフラ分析 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第82集
- 町山洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義— 科学46 339-347
- 三村弘二（1967）黒富士火山の火山層序学的研究 地球科学21(3) 1-11
- 八ヶ岳団体研究グループ（1988）八ヶ岳山麓の上部更新統 地図研専報34 91-109



# 写 真 図 版

---





神取遺跡A区全景



神取遺跡B区全景



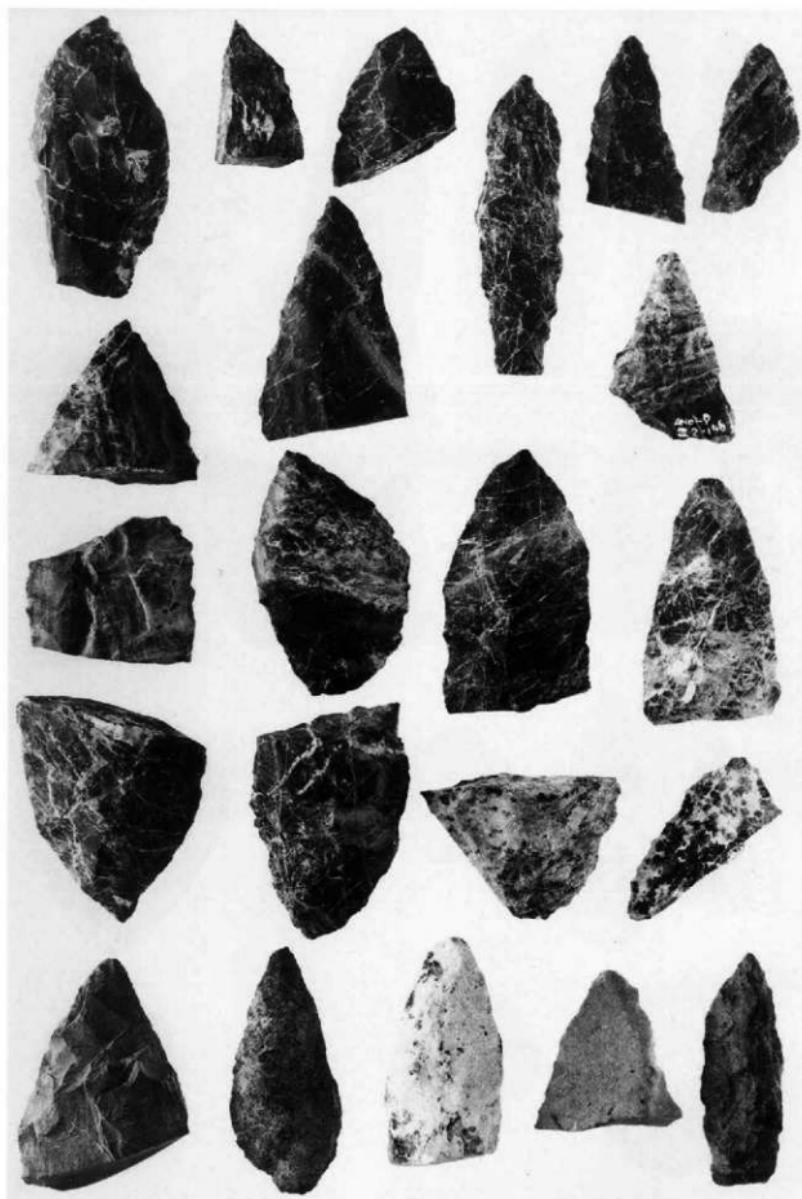
神取遺跡A区全景



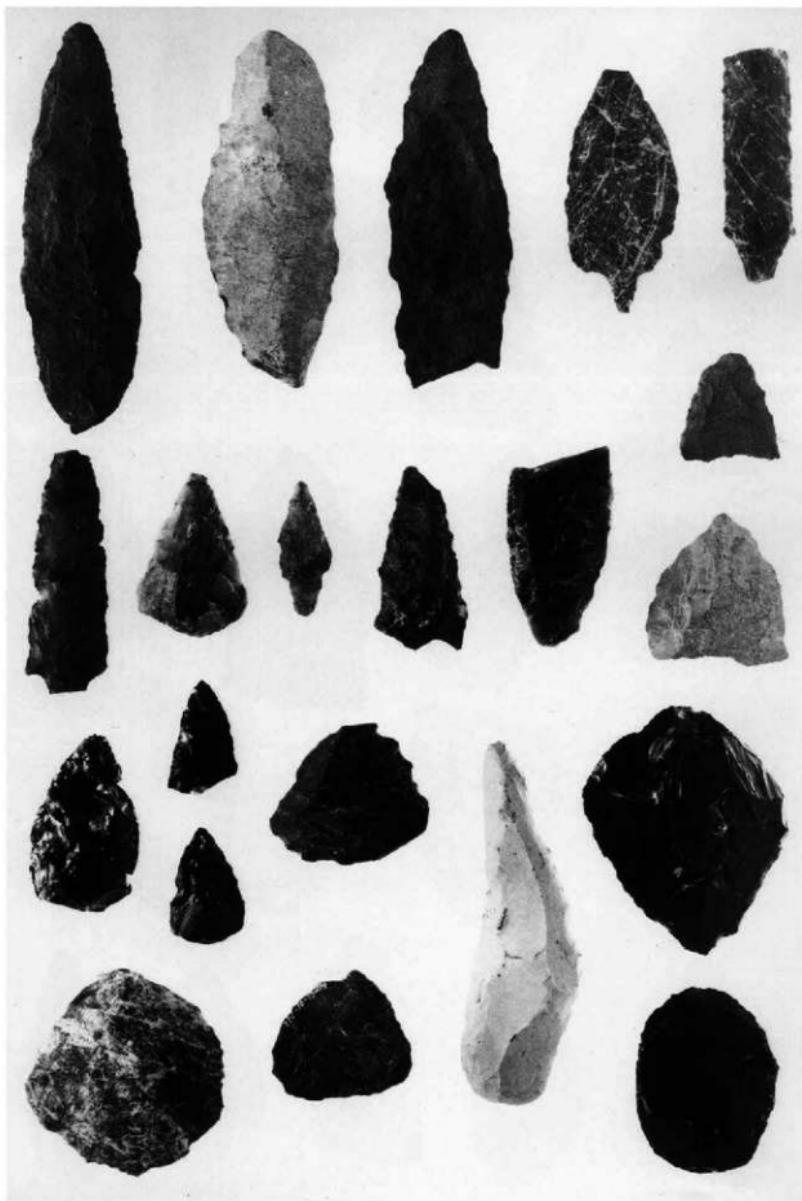
調査区近景



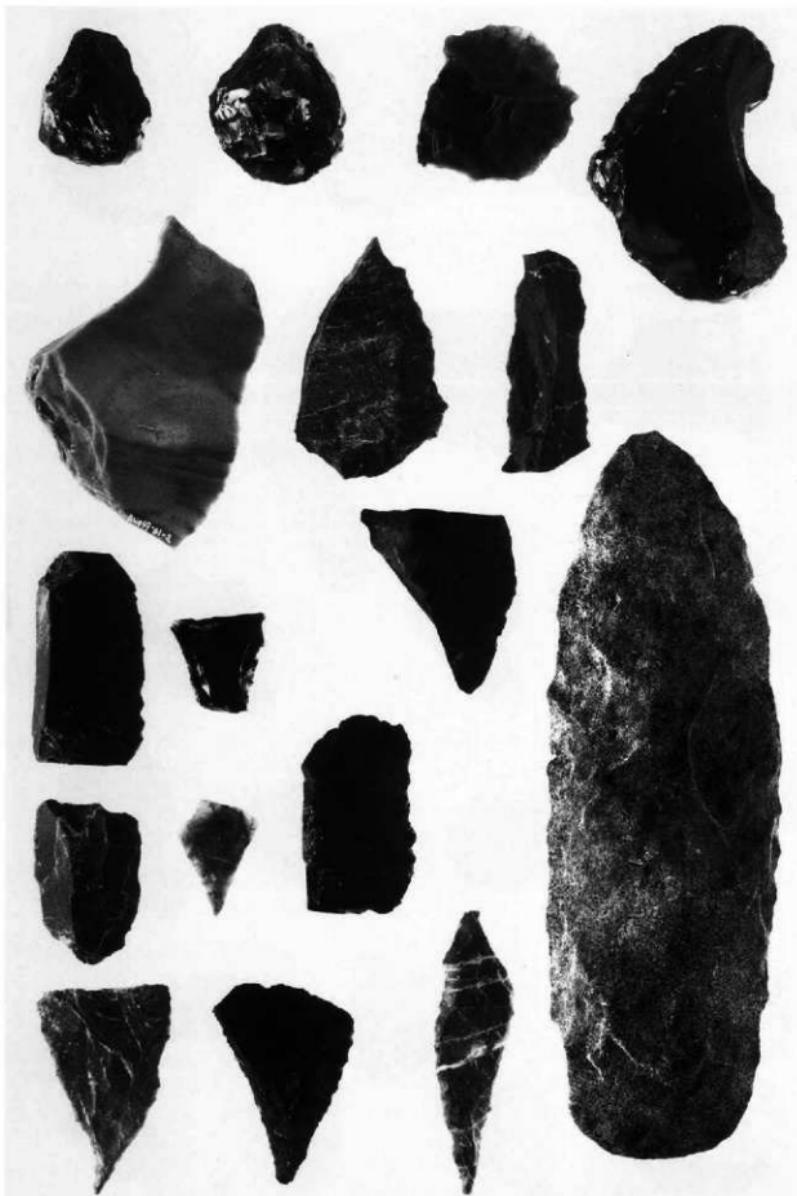
縄文時代草創期の遺物群が出土した地点



草創期の石器 I



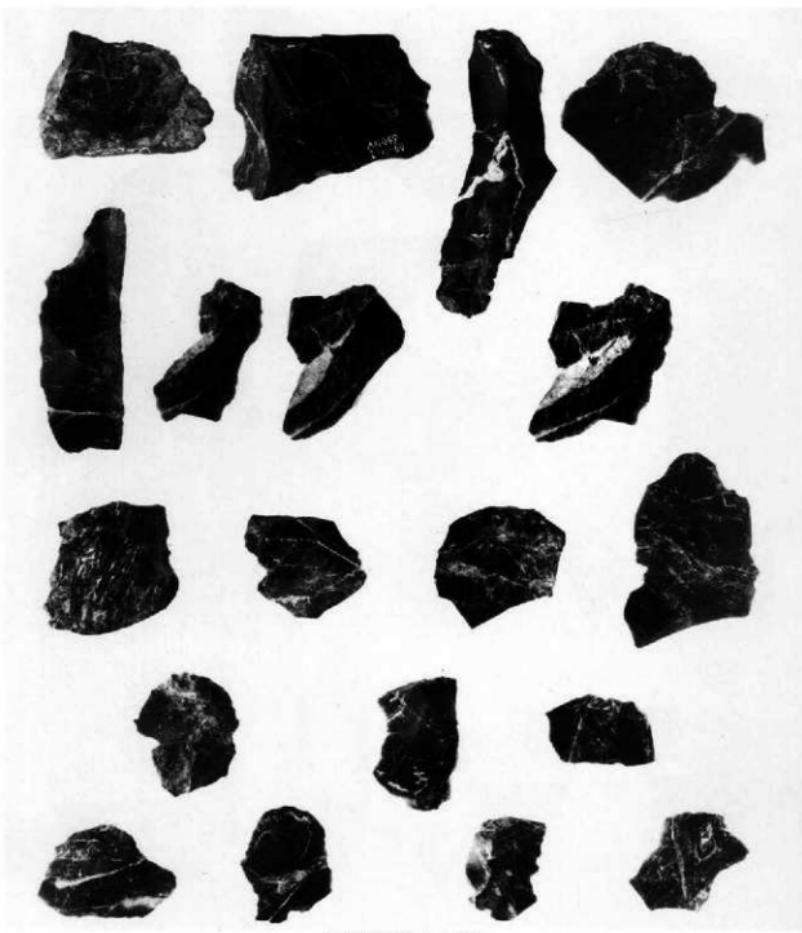
草創期の石器 2



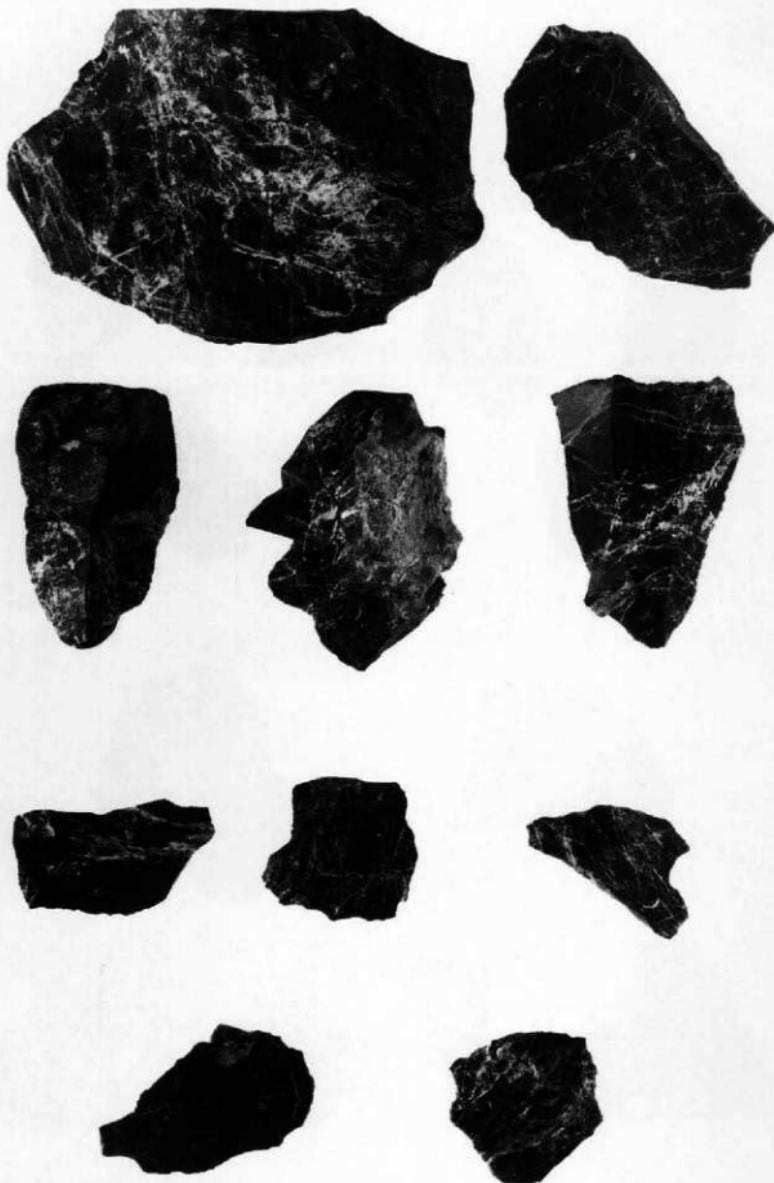
草創期の石器 3



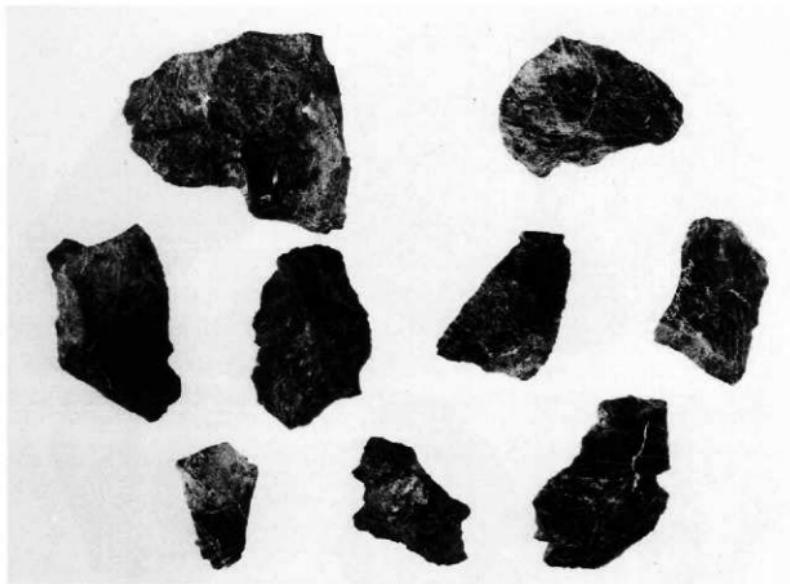
草創期の石器 4



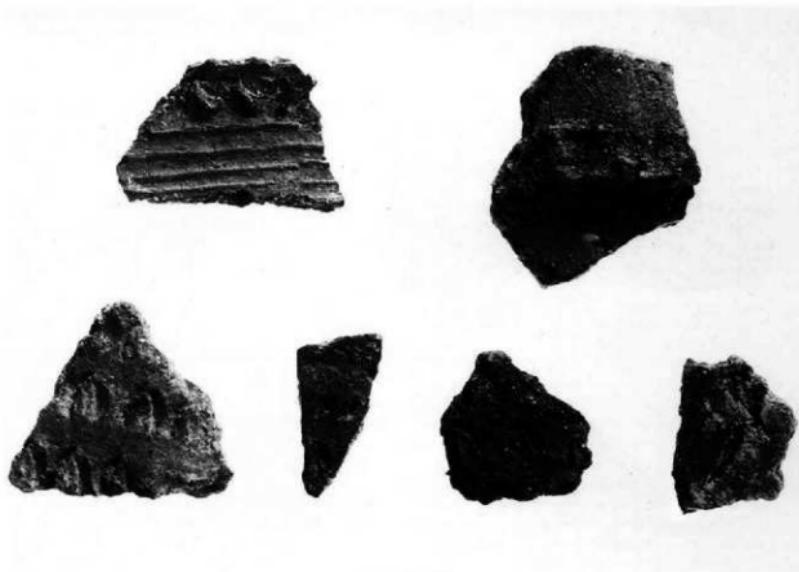
母岩別資料12の剥片



母岩別資料No.11の剥片



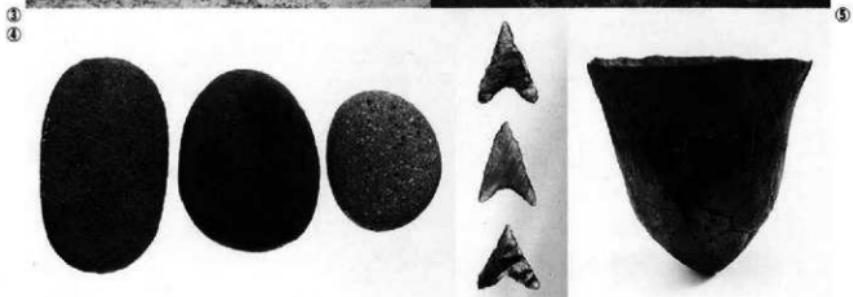
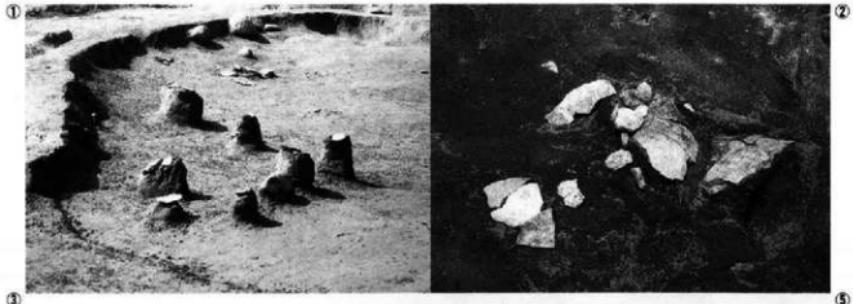
母岩別資料No.10の剥片



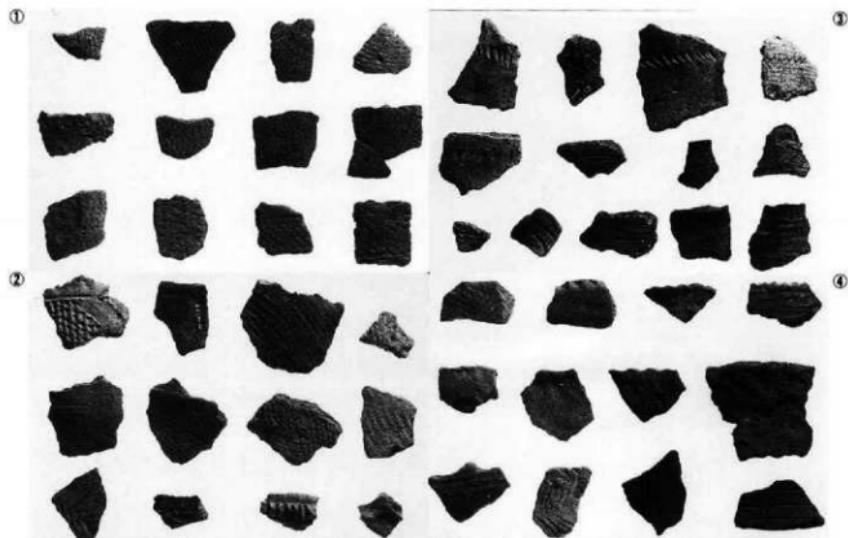
草創期の土器



19号住居跡



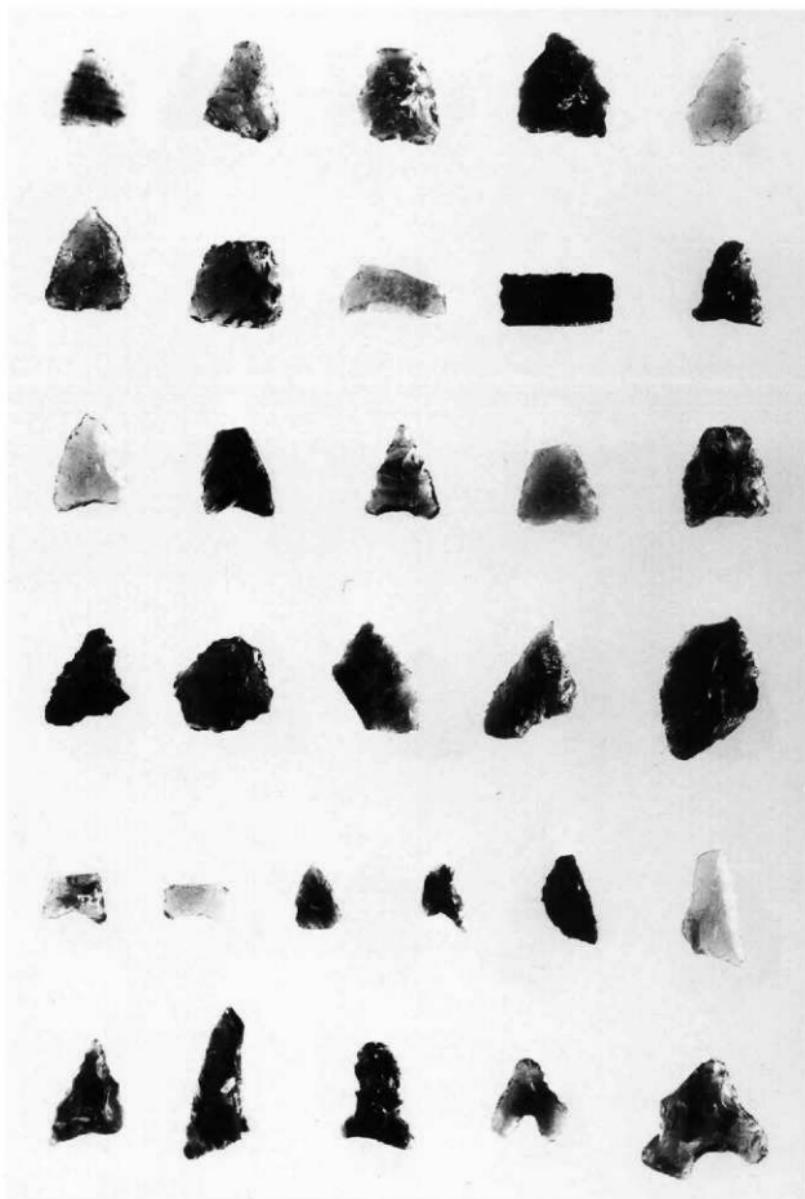
①②19号住居跡物出土状況 ③石器 ④石錐 ⑤土器



縄文時代の土器①草創期、早期押型文②早期条痕文系・隆帯文系③早期東海系・沈線文系④早期無文～中期初頭



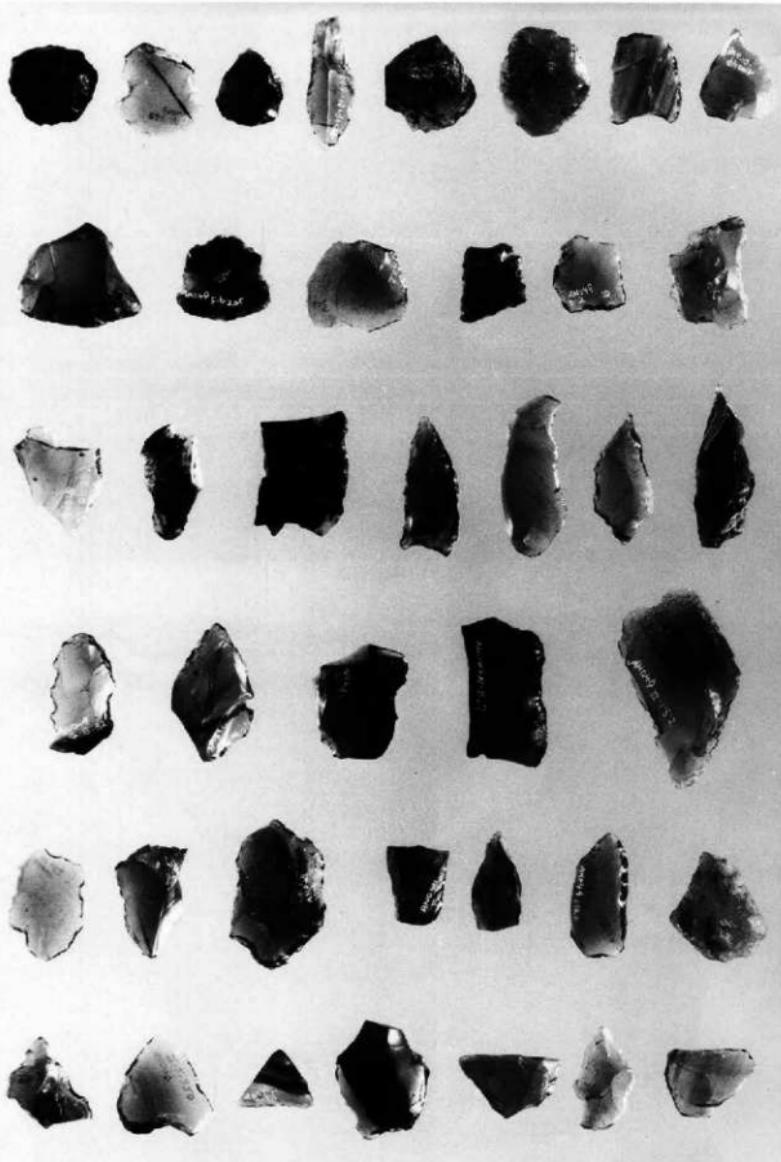
縄文時代の土器①中期～後期②後期～晩期③中期④石器（打製石斧、石耜）



石 鋸 I



石鏃、黒曜石製石器



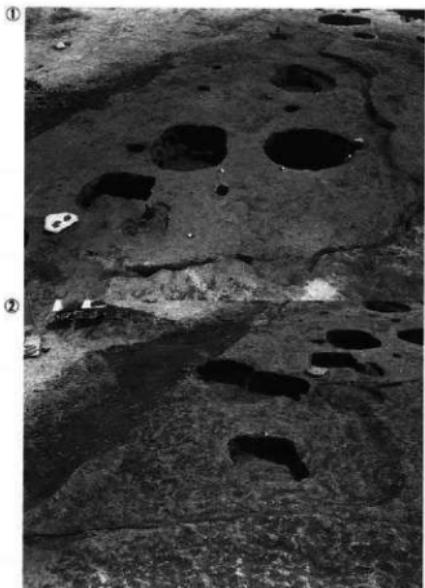
黒曜石製石器



2、17号住居跡



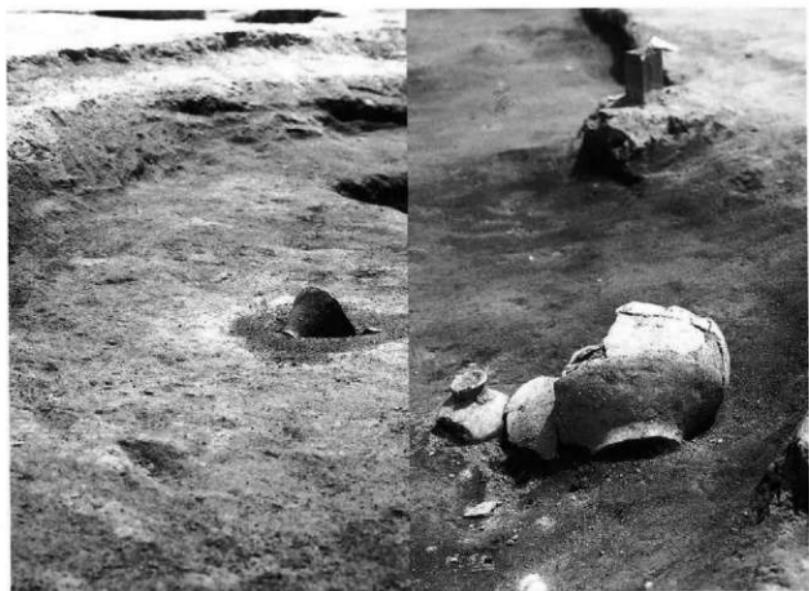
①②2、17号住居出土遺物③④出土状況



① 8号住居跡 ② 9号住居跡 ③ 0801



13、18号住居跡



13、18号住居跡遺物出土状況



13、18号住居跡出土遺物①1301②1302③1303④1304



21号住居跡

①



②



①21号住居出土遺物②出土状況



古墳時代① 4号土坑遺物② 遺構外出土土器49図 1



遺構外出土土器①49図 2 ②47図 2 ③51図 1 - 1



1号住居跡

①



②



③



④



1号住居出土土器①②③④



3号住居跡



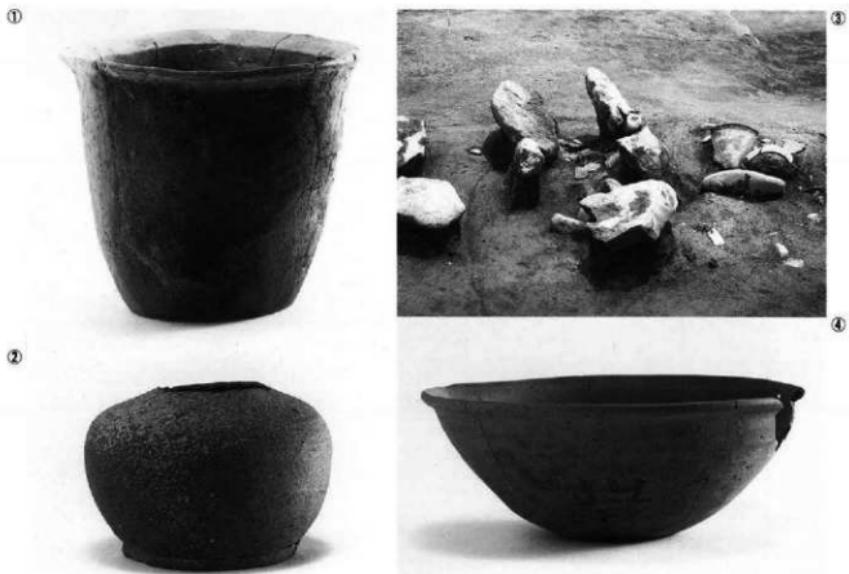
4号住居跡



5号住居跡



10号住居跡



①④10号住居出土土器②11号住居遺物③10号住居カラマド



11号住居跡



128号住居跡



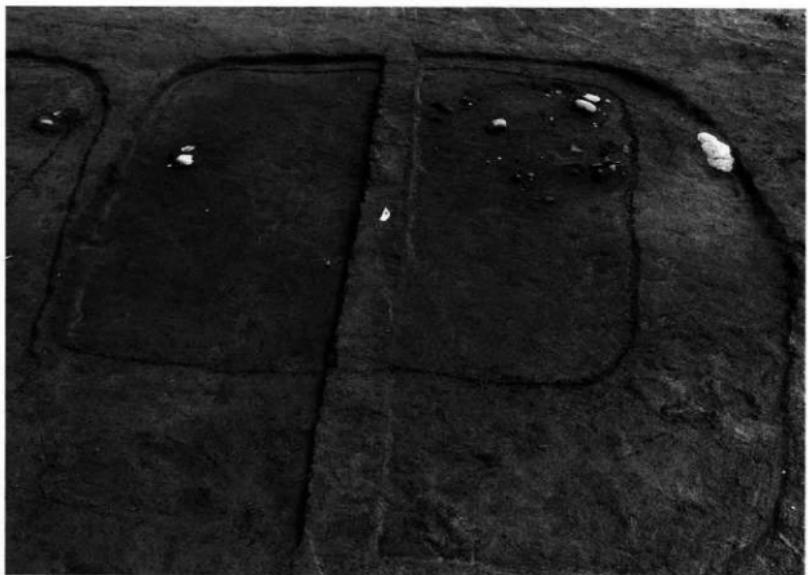
128号住居力マド



23号住居跡



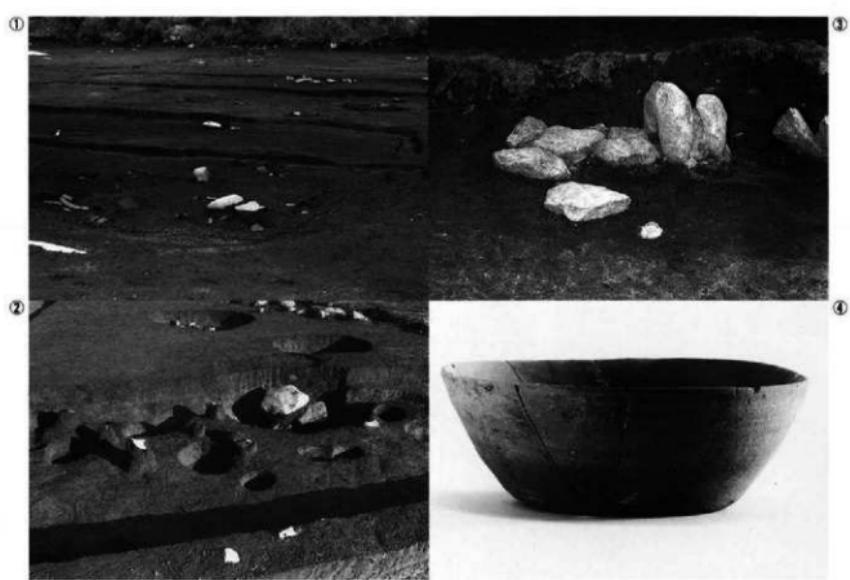
①②③④ 23号住居出土土器 ③出土状況



24号住居跡



30号住居跡



①24号住居出土状況 ②30号住居カマド ③34号住居カマド ④30号住居出土土器

①



②



34号住居出土遗物

①



②



③



④



①25号住居出土遗物 ②6号地下式土坑 ③~⑤号土坑出土遗物



① 1号土坑群 ② 1号石積土坑 ③ 2号石積土坑



① 22号住居跡出土遺物・古錢 ② 中～近世遺構外遺物 ③ 鉄製品 ④ 砥石・石器類



調査参加者



室内整理作業参加者

## あとがき

現地での発掘調査が始まってから約2年、ようやくここに報告書を刊行することができた。記録保存と称して遺跡を調査、破壊した費の一部をやっと果たし、ほっとしているところであるが、整理作業、報告書作成作業は決して充分とはいえない。特に、縄文時代草創期の遺物群は山梨県下で初めてのまとまった発見であったにもかかわらず、その一部しか報告、検討の対象とすることができなかつたのは調査担当者の非力が原因である。

最後に本報告書刊行までに多くの方々に、様々な形で指導、協力をいただいたことに心よりお礼申し上げたい。特にこの発掘調査のために闇場整備事業の施工を延ばし、それにもかかわらず現地での遺跡説明会には地元を挙げての公民館活動として参加してくれた下神取地区の区長、施工委員長、村民の方々には心より感謝したい。また発掘調査の際、誤って農作物を傷つけるようなこともあったが、寛大に対応してくれた方もいた。改めてここにお詫びし、ご協力に感謝したい。また、明野村では1991年の解説添遺跡の調査に続いて、神取遺跡でも調査期間の延長をお願いした。文化財保護の主旨を理解し、期間延長に応じてくれた峠北土地改良事務所、明野村役場建設課、地元施工区の方々に改めてお礼申し上げたい。

1994年3月

明野村教育委員会文化財担当 佐野 隆

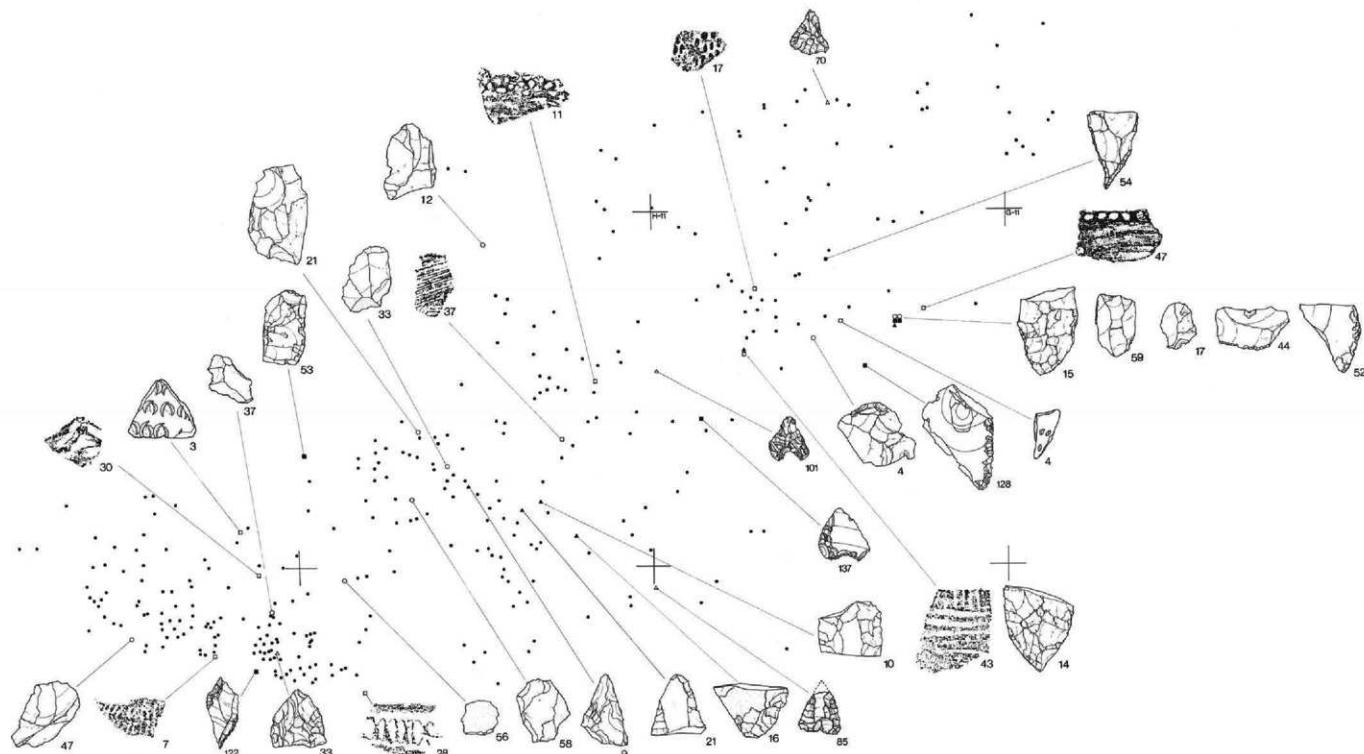
## 神 取

1994. 3. 31発行

発 行 明野村教育委員会  
峠北土地改良事務所  
印 刷 勝美(ふみ)社  
東京都新宿区西五軒町4-2  
〒162 電話 (03) 3268-2141

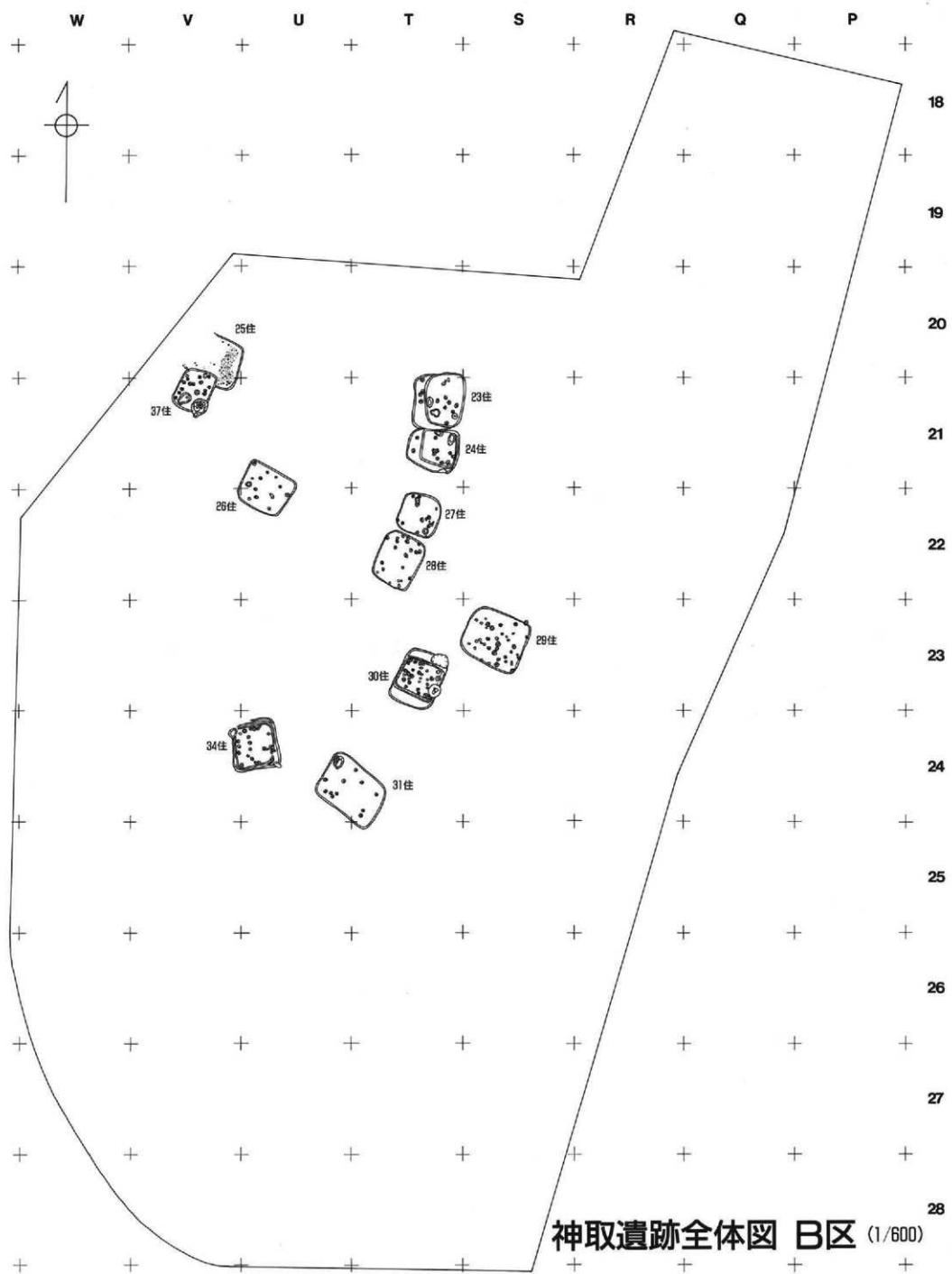
---

第6図 繩文時代草創期～早期遺物分布図





神取遺跡全体図 A区 (1/600)



神取遺跡全体図 B区 (1/600)

